

童謡の俳諧資料

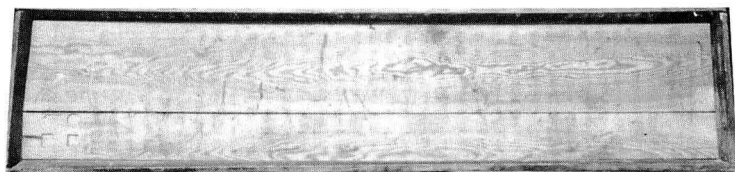


朱印薄言

郷土教育資料 10

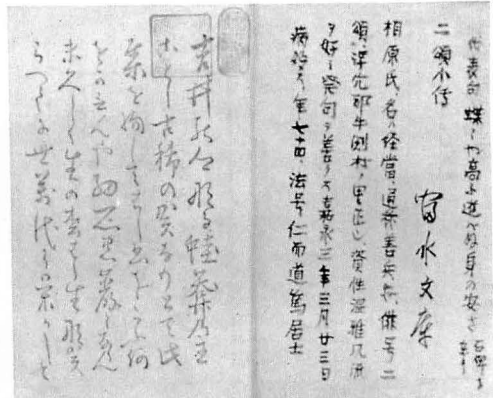
重信の俳諧資料

町内最古の俳額（1762年）と
所蔵する岡八幡神社（西岡）





句集「子の日の松」より



発刊のことば

近年、わが郷土重信町は大きく変貌し、文化田園都市として躍進の一途をたどっております。

しかし、目を転じて考えてみますとき、「温故知新」のことばのとおり、流動変転の激しい今こそ、郷土の先人の業績、生活をふりかえり現在を見直す時と考えます。

つつましい生活の中から、うるおいを見出すべく庶民に定着していったものの中に俳句があります。町内及び近隣市町村から、本町出身者の俳句を収集し、郷土文化研究の一助として「重信の俳諧資料」集を編集いたしました。広く愛好者の方々に愛読していただくことができればまことに幸甚であり、ますます文化の香り高い「ふるさと」づくりに大きく貢献できるものと確信しております。

本誌刊行にあたり、資料収集等極めて困難な調査研究にとりくみ、執筆を続けられた泉洋一氏をはじめ、文化財専門委員各位に対し深甚の謝意を捧げる次第であります。

重信町教育委員会

教育長 越智忠夫

序にかえて

町内社寺の俳額や、古い諸家の句集は、荒廢散逸の危機にさらされている。今のうちに何とか整理しておきたい——これは、以前からの私たちの念願であった。

しかし、まとまった調査となると、なかなか思うようには進まない。泉洋一氏が、拜志小学校長として赴任されて来たのは、ちょうどそんなときであった。

同氏には、前任の父二峰小学校長時代に、久万地方の俳額研究をまとめた『郷土の俳諧』の労作がある。昭和五十一年四月、早速仲間（町文化財専門委員）になってもらい、以来同氏を中心にこのしごとを進めることになった。

古い俳額や句集を掘りおこし、町内出身の句作者をたずねるといふしごとは、なかなか大変な作業である。句作者たちの交流や、町外での活躍を追っているうちに、しだいに範囲が拡大し、予想外の時間がかかることになったが、これはまあ当然のなりゆきであろう。「あとがき」にもあるとおり、この間いろいろな人たちのお世話になった。

泉校長は、昭和五十三年三月拜志小学校を退職、同時に町専門委員の方も辞任されたが（退職後は愛教研事務局へ勤務）その後も無理をお願いし、終始格別のお世話になった。本書は、同氏の全面的な協力によって、やっと刊行に

こぎつけた——というのがその実情である。
以前私はある雑誌に、次のような松山紹介の一文を書いたことがある。

（前略）俳諧をひねくるような連中は、どうせ学や余裕のある旦那衆たちと考えがちだが、そうでないところがこの地方の特徴であろう。彼らは貧しいくらしの中で、仕事の合い間あいまに、麦ふみなどしながら、「何なにや……」などと句作にいそしんでいたのである。日常は貧しかったが、心のゆとりはあった——ということかもしれない……（後略）

本書は、わが町重信にも、子規以前に既にそうした風土のあったことを伝えている——と同時に、当時の人たちの、生活の側面を語る証言者の役割をもかね備えているように、なかなか興味ふかい。

——むかし、村のお寺やお宮は、子供たちにとって、またとない親しい遊び場であった。

ここで、子供たちはよく絵馬や俳額を見た。その奉納者は、身近な誰彼の家族だったり、ご先祖様の一人だったりする。絵ばなしをする子供たちもいたし、俳額の筆跡や俳名をたどりながら、あれはどこそこのおじいさん、こちら

のは誰某のおとうさんなどと、その博識ぶりを誇る子供たちもいた——こんな記憶は、そう遠い昔のことではない。

私たちの知っているその献句者たちのほとんどは、貧しさの中で、つつましく、ひたすらに立ち働いている日常的な農民であった。

粗衣粗食に耐えながら、営々と家を支え、村落共同体をささえて来た彼らの強靱なエネルギーの源泉は、こうした人たちに共通する素朴な信仰や、「ゆとり」とも思われる精神生活の持ち方の中にあつたのではないか、というような気がする。

最近、過剰とも思われる物質文明と精神生活とのアンバランスや、連帯感の欠除などが言われているが、古い社寺の俳額などを手掛りに、こうした問題の原点をさぐってみることもまた無意味ではあるまい。

俳諧は、天文年間の『犬筑波集』以来中世・近世と、百年の変遷を経て今日に及んだもので、その文化史的意義も大きい。常民といわれる民衆の中で大きくなったこの俳諧に、さまざまな視点から論評を加え、その位置づけを考へることも必要であろう。

本書の場合、編集の方針として、今回は敢えてそこまでは立ち入らず、調査記録の整理にその目標をしばることにした。こうして、「俳額・句集・付表」の三部を一巻とし、資料集のかたちをとることになったものである。

本書は、ページ数などの関係で一部割愛したところもあり、決して万全のものではない。

しかしこの小冊子が、郷土文化解明への関心を高め、地方俳諧研究の一助ともなれば、まことに望外のよろこびである。

今回の企画に御賛同をいただき、直接、間接にいろいろとお力添えをいただいた関係諸氏に、厚くお礼を申しあげ、前述の所感と併せ、発刊のごあいさつとするしだいである。

昭和五十四年二月

重信町文化財専門委員長 武智成彬

目

次

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	一、俳額
拜志神社額	東王寺額	浮島神社額	護国院額	香積寺額	素鷲神社額	宇氣洲神社額	宇氣洲神社額	牛頭天王額	城山天満宮額	慈光寺額	城山天満宮額	拜志神社額	拜志神社額	城山天満宮額	三奈良神社額	徳威三島神社額	岡八幡神社額	(一) 町内俳額
27	25	25	23	23	21	20	20	19	17	14	13	11	8	7	4	2	1	
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	
二瀬のお堂額	法蓮寺額	城山天満宮額	香積寺額	素鷲神社額	飛梅天神社額	飛梅天神社額	医王山長連寺額	飛梅天神社額	三社大権現額	宇氣洲神社額	宇氣洲神社額	片山神社額	宇氣洲神社額	浮島神社額	素鷲神社額	浮島神社額	素鷲神社額	
54	47	44	44	44	43	43	42	41	39	39	39	36	36	36	35	33	30	

37	浮島神社額	56
38	船川神社額	57
39	天満宮額	59
40	黒住教吉井教会額	66

(二) 町外俳額

1	住吉神社額 (久万町畑野川)	80
2	八幡神社額 (松山市高井)	80
3	三島神社額 (砥部町麻生)	81
4	金刀比羅宮額 (久万町畑野川)	81
5	川上神社額 (川内町)	81
6	鹿島神社額 (北条市)	82
7	雄郡神社額 (松山市)	82
8	金刀比羅神社額 (松山市新立)	83

二、句集

(一) 町内句集

1	子の日の松	87
2	和田句帖その一 (抜翠四十章)	106
3	和田句帖その二 (秋の鎌磨)	109
4	和田句帖その三 (倭楽会月次発句集)	112
5	青野氏所蔵句集 その一	119

(二) 町外句集		
1	川上神社所蔵巻紙一卷 (川内町)	152

41	黒住教吉井教会額	67
42	飛梅天神社額	74
43	黒住教吉井教会額	75

9	城山神社 (松山市東石井)	83
10	松山神社額 (松山市道後)	84
11	総河内神社額 (川内町河之内)	84
12	金刀比羅寺龍音堂額 (川内町河之内)	85
13	宮内天満宮額 (砥部町宮内)	86
14	宮内天満宮額 (砥部町宮内)	86
15	白山神社額 (川内町滑川)	86
16	その他	86

6	青野氏所蔵句集 その二 (見飽ぬ花)	126
7	青野氏所蔵句集 その三	128
8	奉納梅千句	131
9	雅と俗	134
10	陣宮句集	143

2	俳諧友千鳥	153
---	-------	-----

3 ちなみぐさ……………153
4 嘉永版伊予簾……………153

三、付 表

(一) 関係俳額・句集一覽……………157
(二) 町内俳人一覽……………174

5 おいまつ集……………153
6 閑居の友……………155

表紙「子の日の松」より

凡 例

- 1 重信町内に残っている俳額や、町内の者の手に成る句集の、明治までの分を収めた。
- 2 町外の俳額・句集等については、町内（今の行政区画）の者の句が出ている所だけを載せた。限らないことであるが、近在の郡市の範圍にとどめた。
- 3 表記については、なるべく原文の姿のままにしたが、漢字の草体の文字であつてもかなとして用いられているものは、ひらがなとした。
- 4 濁点は原文どおり付けないままにした。
- 5 送りがなについては、原文がいわゆる歴史的かなづかい（古典かなづかい）に従つていないことがあるが、そのままにした。
- 6 活用語尾も書かれていないことがある。
- 7 字の跡はあるが、不明の場合 □ で示した。
- 8 明瞭ではないが、そのように読めると思われる時は、その字を □ の中へ入れた。
- 9 明らかに誤っていると思われる所は、右側に（ママ）としたり、意味の通じない箇所
に「？」の印をした所もある。
- 10 「2ウ」「3オ」等は、原本の「二枚目の裏」「三枚目のおもて」の意味である。
原文のとおり活字がない時は、作字するか、止むを得ずそれに相応する字体の活字
を使用した。

俳

額

町内俳額

額 - 1 岡八幡神社額(西岡)

(宝曆十二年春「一七六二」、三十三句。追加はないが巻頭に小倉志山。縦五四センチ、横二二三センチ。)

宝曆ミつのへ午の春宝殿の

造営を寿き各式箸を

例の風雅に題して

兜 此岡の分根^や菊の八幡坐 紅魚園 志山
陣羽織 着て帰る秋^や錦の^羽織[?] 兎去
弓 門^の旅^て ^な弓始 普山
母衣 ^の吹^とし^{あり} ^雪 呉風

鎧 卯の花を^鎧ふ^て ^菊司
楯 持楯に^めて^かつ^く時雨哉 ^芦泉
鎗 ^不曲
幕 夜桜の一固めあるらし^幕 ^古因
鉄砲 山深し神のお留守のおとし筒 ^胡蘆
井樓 ^那都の末一つ^井樓 ^白兔
貝 ^吹や法螺の根^浪の ^一釣
鞍 ^散 ^其風
床几 ^小腰 ^吸江
箆 事觸ハ襟にさし^けり梅の花 ^樋志
着込 御^の管帷子や下かさね ^臥龍
轡 招^神の ^虎白
鎌 野遊や^のの^一葉鎌 ^李仙

長刀 長刀の冠おとしや三日の月 婦人 富 松明 松明に□□ 宜中

鞭 □□路の鞭やことし竹 不及 太刀 鶏頭やいかにも太刀の柄頭 徒十

腰札^{ウエスト} □□の□□ 草司 菜配 □□の□□を□□□□ 暮の□□ 孤声

燈 一□を花に踏□□は□□ 檜龍

箴 □白鷺の野松に□□り秋の暮 味文

扇 頼政ハ蛩に遣ふおふきかな 雨十

継梯 □岩は□なや葛の□□継はしこ 午睡

矢 廻廊の通矢多し乙鳥 残醉

笈 陣笠に□□□□□□踊かな 鬼帆

竹米 □□□□□□角もさしぬや蝸牛 止風

太鼓 木兎や森の太鼓に驚かず 神主 盛住

鉢鋼 □はちかねの振分髪や月額 野水

馬印 □出雲□□や□□も勇々し馬印 □葱風

(以上墨色の消えている所が多く、墨跡の盛り上がりを手掛りに判読した)

額一 2 徳威三島神社額(北野田)

(安永四年、追加文養及び五嶺、全三十二句)

奉獻納四季発句

藁杏に一聲蹴出す鶉かな

新農

松の知らぬ涼しさもあり□□□

人臭(くさ)ひ山を洗ふや春春の雨

葉にならぬ漂漂木の伸る汐干哉

水鳥や何□□□て水□□□

茶□□□□□□春の雨

節節をもつ寒さの伸る□□竹かな?

名月や白□□にハ□□□

陽炎や鏡に露のる水のいろ

蜃の□□□通ひ□□□

尼寺の使は清し水仙花

葉桜や根に戻たる朝ほらけ□□

春雨や濡れぬ物とて鳥の声□□

葉桜や芳野ハ二度□□□□

柏志

未白

和聲

里風

兔兄

蘭亭

筇波

歌優

亀友

未得

五白

雲歩

野龍

□□^{キズ}の笑顔□□^{キズ}福寿草

すゝしめの竹に篋や行々子※

※巫女、かんなきのこと。神蘆を鎮めること。

茸狩や其日かへりの道道しるべ

紅葉見や□□にも□□た心□□※

※「より」とも「まち」とも見える。

月の道一筋□□□蚊遣かな

一日は花眠らして汐干かな?

葉桜や忘れ形見の峰の雲

浪を漕渡るこゝろや田草取

憎まれぬ□□[?]の覚悟覚悟や後の月

名月や□□ふといはるゝ□□

夕□□を谷へ□□紅葉かな

我影をすくふて浪浪の□□□かな

蘭亭

幽志

蘆橘

梅友

筭中

自笑

太奇

工吟

糸流

似水

苛聖

鼠十

稻妻や水に印を附て行

蒔季□や□出る洗ひ髪

花といふ物のはしめや福寿草

的にした梅咲里を岡かな

追加

雪に霜丹青□や神の恩

※安永四没没後掲額か

玉鉾の山路も左右に春の雪

安永四己未歳

冬十一月吉辰

糸白

虎勢

春之

野水

雲山人 文養

千八百奄 五嶺

顔主 幽志

梅友方 龜方志 糸流

額一 5

三奈良神社額(下林)

(享和元年十二月「一八〇一」、追加五富、縦七〇センチ、横二一〇センチ、全五十二句)

四季発句奉納

朝露や岩戸の闇の明ころろ

雨の日の露木樅ににけり

※「早」を「に」とも見える。

□ひとつ子を呼聲や春の山

飼鳥の口も結はぬあつさかな

白蓮に一際月の移りかな

二三輪添しハ花のはつ便

湖芳

梨白

全

一臥庵

龜山

可厚

竹賞て夜□□に嵯我の月見かな

※「とる」「そら」とも見える。

長き日を慎む鶴の料理かな

夜は川へ流れて雪の□□かな

汐汲ハ女成けりはつ霞

本意なさや鶏舟の戻る朝餽

月今宵富士の初雪降やらん

國替の船や持仏に鳴く鶉

引板の綱や七瀬の水の尺

我が影に戻る風あり野路の雪

宛なしに出て行夏の月夜哉

名に戦く須磨の茂りや竹の春

松風を引集メ行時雨かな

巖々亭

鳳啼てゆるるゝ浦の小舟哉

苗代や夜□□につくりて鳴く蛙

扇月

己か葉の散葉に動く柳かな

砂月

春風は雨を隠して吹日かな

湖舟

散る花や実を見せる人の顔

吐白

朝寒や往来の人の息白し

せい女

葉に清き月□□をや置川清き庭

黄口

※「身」とも見える。
灯に寄て重問はや夜※(イ)の毒

嵐阿

※「毒」か。

啼止し蛙力□□待夜かな

文林齊(イ)

貫ひ乳の中に鶯飼家□□かな

柳五

乗馬のほこり蹴上る暑サかな

石鷲(イ)

陽炎やはかなく見ゆる城の跡

嵐阿

毒里

柳飛

扇月

吐白

ノラ子コ

毒里

白□

龜山

青江

志白

黄口

黄口

花守の花に疲るゝ心かな

不存

鶯にかたくなならぬ住居哉

一臥菴

洗濯の糊ハ糊ヘけり郭公

梅里

卯花や闇にあや有妹か門

可厚

此山の目出度き道や年木樵

志専

涼しさや連て退く浪かしら

如柳

薬程水の尊きあつさかな

花紅

武士も手を下て牡丹の根分哉

花橋

三井寺の鐘に男鹿の□□哉

良野

神垣に掛しや月の十寸鏡

雨聲

納豆の一間構る火燵かな

哥全

我心心となりぬ散さくら

可厚

謡へつとハぬ振なる雪の柳かな

知能

けふ七日華に染たる心かな

青崦

人遣て跡静也雪のあさ

嵐阿

追加

青崦

吹すてハ草に燃入蛩かな

吐白

初涼し夕つけ鳥の尾の働まき

嶺金堂 五富拜

時鳥物思ハせて明にけり

知里

水莖は御枝もの也初吹雪

筆者少年 花谷

名月や雲もなし又星もなし

嘯哭

(額枿左側に左の年号あり)

衣くに道ハあやなし朝の雪

芦船

享和元年辛酉十二月吉旦

三芳野ハ浮世の果や桜の実

林谷

(以上墨色はほとんど消えているが、幸に墨跡の盛上りが

ややはつきりしているので、それを手掛りに判断した)

同社には見えにくい別に一額がある。

額一 6

城山天満宮額(上林)

(文化六年、「一八〇九年」、追加湖舟、全二十七句、
縦六五センチ、横二〇三センチ)

一つ家もたつねて来るや猫の戀

好哥

降る中に五月雨なり黒牡丹

青山

墨染の桜は屋キエ朧かな

シツ川 破琴

畠打のぬるゝ様ナリ散さくら

田ノクボ 一風

野鳥の羽たハきしけきあられ哉

下ハヤシ 其調

朝白カハやあるしの興の後のゆめ

季鏡

かりてねる蒲團みしかき霜夜哉

白斗

月落て母の手伝ふきぬたかな

湖山 湖柳

涼しさや立そう椽のすてはしら

下ハヤシ 良野

とふ吹て来ても柳ハやなきかな

白斗

一つある窓の日脚のあつさ哉

白斗

玉のなる柳の糸や春の雨

下ハヤシ 其調

藪入の里ても聞や松の琴

梅林

振袖ハ帯にはせたキエ山さくら

季鏡

破魔弓の其勢ひやふところ子

亀友

夕立や隣は麦の土用ほし

一見

稲妻や右か左かみちしるへ

梅林

麦蒔や戻りの道の宵月夜

玉酒

小原女の便りにきくや初さくら

森月

朝貞に夢はむかしのゆふへかな

蒼けりさきけり芥子の散にけり

寐ようかと思ふて虫に明しけり

はつ霞朝日まはゆき鬼かわら

七夕や日のはしめから思ふ事

姥の手のとゝき兼たるさくらかな

追加

新在森や茂りの葉重り

あかくと瑞籬しるし夏木立

白斗

一見

桃枝

梅林

曲二

一可



評者 湖舟

筆者 有道

會林

森月

亀友

文化六己巳林鐘

※「6月」の異称

額一7

拜志神社額

（下林八幡）

（文化六年、追加蘭汀、縦八八センチ、横四一六センチ、五十句及び追加一と會林等の句十一計六十二句、俳号は篆あるいは隸体で書かれている。）

奉納四季
俳諧發句

浦安の国は青田に成りにけり

宮元和光

出て見れハ野に鶯の高音哉

白斗

窓明て母に見せはや後の月

島之川 措月

※島之川に「措月」なる同時代の俳人がいる。恐らくそれか。あるいは「措月」なる別人か

打懸けし棋は其まゝやほとゝきす

南方知情

七草や蒼（あつむ）はかりていわひけり

白斗

牛の眼に夕日こほるゝ時雨哉

和光

蚊屋つりて暫し寐て見ん三日の月

下林良野

時雨した跡は奇麗な月夜哉

二名白水

炭竈をちり埋みけり山桜

白斗

夕月のさくらに懸りそめにけり

桃枝

稚子の寐顔見てやる三日の月

亀友

鹿の涙あかつき露と成りにけり

全

五月雨や流れて来たる□□[?]

宮元二白

光琳の梅のきほひや筆はしめ

下林曲松

蝙蝠のちらつく暮の柳かな

全

みしか夜の夢に朝の日かゝり(行)

全桑洲

茸狩りや押わけて見る萩薄

和光

塩竈の煙りにきゝし千鳥かな

一見

赤いほと淋しさも有り薦紅葉

見奈良雲柴

はつ馬にきぬ着た人の多き哉

林鶴

明月や昼とおもふて門に出る

花遊

初しほに浮きたり蜚の捨小舟

麻生伽白

涼しさや竹に水打男とも

類女

菊に来る人は月見の馴染哉

原町積玉

散る花に芳野龍田の曇り哉

雲柴

何鳥か椿をとして去りにけり

玉水

稻妻や浪に並へる浦の山

林鶴

秋雨や残るほたるの草の露

好哥

春雨や旅籠屋町の糸車

二名文亭

杏風(まふ)の音立切て鳴かわす

里仙

こしらへて笑ひそめたる案山子哉

雲柴

木枯のしきりに高し夜(よ)の峯

二名南里

涼しさや髪を結せて橋の方へ

田之久保千鳥

芭蕉葉は二百十日に破れけり

芭野

のつと出た月に鳴けりほとゝきす

桑洲

煤掃の出所もなしけふの雪

志津川破琴

干竿に雀のならふ小春かな

南方器水

水鳥の羽音も高し冬の月

一可

寒菊や口切る(ま)込の咲こゝろ

南里

春雨や覗きあふたるかゝり舟

田之久保蝶夢

柴の戸や秋のうちより冬かまへ

一見

こうもりや夜は静なる山桜

志津川五葉

よし野山冬のけしきを見にゆかん

季鏡

海山をまたけて高し天の川

田之久保湖白

追加

朝良や星ちりかゝる手水鉢

全文孝

二曉菴蘭汀

うくひすかはしめてふてをとらせけり

全都白

松杉の梢に

あの山のあちらもさそやけふの月

不染

高し秋の月

さひ鮎の嵐に落る幾瀬哉

一見

蝶(ま)の稲に群かる日より哉

書家有道

寐處のさたまる頃や秋の風

島之川此友

しる人の家は過たり山桜

會林一見

淋しさや古巢の残る冬の松

見奈良一三

玉露の升りて実(ま)のる稲穂哉

全亀友

山根から暮る様也秋の暮

全梅扇

センチ、三十句と追加一、跋文十二行

影ミれは寝たきに餘る芭蕉哉

全不染

奉納

住ふるす庭の井筒や蔦紅葉

全森月

名月や壁の落たる^沖のいし

南方一盛

風鈴にきかはや今朝の初あらし

全一可

初^{□□}や^{□□}し其兒の^{□□}所

洗耳

うこかぬは堤の高き柳かな

全花黄

春の日や気の落付ぬ人通り

桑洲

神文の殊更清し秋の月

全桃枝

夕顔に競て粟を精けり

田窪湖白

※「久」と両説アリ

こそはかる桌の眼や秋の月

全工吟

山茶花や大事に^{□□□□}

三津左柳

涼しさや夕浪鷺の脛を打

全白斗

遊て寐る夜はまた涼し鉢叩
湯災の水を曇らすひよりかな

見奈良雲柴

文化六己巳季秋

石菖や禿の裙の玉箒

可翁

暫は鳥飛ふ^櫛五月雨

見奈良里風

額一 8

拝志神社額

(八下幡林)

秋日や^{□□}?に^{□□}?の^{□□}?合

上[□]里[※]暁

(文化六年、追加温習堂麥漣、縦九八センチ、横三八八)

※「林」とも見える。

猫の恋野川の□□□□鳥

上野喜友

三人て事たる橋の涼□□

高井亀毛

妹家に白搗夏の月夜かな

栢枝

風呂の火も消て君□夜寒哉

琴糸

釣草も人目も枯ぬきりくす

一橋

暮安き花の□□や帰り咲

盛柳

続さま椿の落る真昼かな

白斗

□□は炭に埋て□□□□かな

城下雨□□

夕顔や葉から搔出す霄の月

富久龍□六?

こからしや星の乱るゝ浪の上

田窪文孝

蜘蛛の網破し背戸の稲木哉

桑洲

羚羊飛て□□

□□

初鴈や胸に指折る馨の算

麻生伽白

松の葉□□

上村□□

冬枯や鶴の糞白き捨小舟

古三津里三

追加

鳥の巢と枝の隣ややま桜

志津川五葉

驚破野分

我かたは藻に啼虫やかつら川

南方湖鳥

夷の雲山

温習堂

蘭の香や宿□もめす翠簾□□

上村樂之

かけまくも賢き八幡宮と申奉る□□
モトモト無カモ

麥漣

印印

出代やおとなし過て日の延る

良野

應神帝を宇佐に魂鎮め祭□[?]られ尊崇なし□□

霜の夜や静に竹の動き止ミ

雲柴

神号なり我朝 人皇九十代後宇多院の御宇弘安四年蒙古数百騎筑紫までおそひ来る時に

宇多帝伊勢の両宮へ奉幣使を立られ千余

八百萬の神／＼に祈り給ひしに八月四日斗猛風

起て□船海底の水屑となる其

皇神の中に□ 八幡宮の御□を移し荒靈の護神に崇敬す

る事式百歳擁護篤く愛しみの

□の外まで多□□常盤に□□

□の産児のすゑかけて律荔の□□

を□□功しか恐み惶々追□□

なし□

文化龍宿己巳

季秋吉辰

會林

其調

栢枝

琴糸

良夜

盛柳

額一 9 城山天満宮額(上林)

奉納發句

題 花鳥 風月

白梅やたゝ明らけき神心

城下夏山

波花や鳴たつ跡に春の月

田窪湖月

言過ぬ人は人なりほとゝきす

全如柳

薺あさかほやまたほし空て有なから

季鏡

笥おかね川舟寒し冬の月

久万七鳥花鷺

きへ残る雪や越路の初桜

林下

名月や綱引こゑも月の縁

備后福山吞拾

老鹿の角かたけたたる嵐かな

高井架白

梟は日の□かたや片山家

下林其調

うくひすのつれなく松に長寝哉

見奈良里風

(文化八年「一八一」、追加夏水齋、縦八九・七センチ、横二五五センチ、二十八句、追加一)

水仙や誰植置し唐井筒(マツ)

夏山

浦島やあけてはなしぬ月夜哉

好哥

鶯に藁打手間をおさへられ

鳥之川 指月

春風や折(マ)花の香を誘ふ

北梅 亀童

しら菊や清けき露の置所

志津川 魚楽

秋来ぬやなきの上吹風のいろ

指月

炭焼にたつねられけり山桜

森 月

飛梅や神の由来のあらたなる

林 鶴

水鳥や星をふまへつ戴いつ

指 月

月朧花何となく匂ふかな

下林 三花

風やミテ雪となる夜の静也

見奈良 雲紫

追加

うくひすにけふも短ふ暮に覺

志津川 破琴

枯野でも筆すてぬ世や

會林 林下

鯉とんで水玉涼し夏の月

田 窪 文 孝

月と松

秀山 好哥

鶯の馨をたてこむ障子哉

南方 湖 泉

文化八辛未歳仲春
夏水齋

松島にそこく名たつけふの月

破 琴

咲みちて花に夜あくる山家哉

文 孝

うくひすやふる巢へ戻る年の市

田 窪 蝶 夢

寒月や里千軒の戸ハしまり

白 斗

額-11

慈光寺額(志津川)

(文政十三年「一八三〇」、追加風角、縦五六センチ、横一九〇センチ、四十三句と追加一)

奉納四季発句集

富士の山真白に見たり帰花

眼に立や時雨るゝあとの積の山

渡呼聲を横きる時雨哉

大雨の果を夜寒のはしめ哉

□[?]行や雪掃おとの聞洩し

※「引」とも

松一樹植て冬立立立葬かな

手届とおもえハ花の七まかり

快く小□[?]渡るや花圍木

歩行鶴師走の氣色なかり見

夜から啼鳥もある也花のやま

野ハ枯て松梢高き月夜かな

其蓬

其柳

高ノ子 □^き風

河ノ内 不尺

大野 比良

素民

左右田

子全

呑海

魚楽

北梅本 梅里

戸を立て米搗雪の小家哉

□[?]し人□□来る橋すゝミ

奈風も□□遠し小夜朧

煙して居るや雪積山の家

見る内にかハる雲あり花すゝき

凧や山より高き海のおと

鹿啼や紅葉セぬ木の山續き

松風の落て時雨るゝ夜也けり

しら萩やくらき處に水のおと

鈴虫の聲明行長廊下

花毎ををしき□□雲雀哉

□[※]なからむ人の□□

※「徒」かも

嵐和

其蓬

比良

金城下 音船

嵐和

雨柳

大船

其柳

吾葉

丸山

鬼若

左右田

空豆に味の□□□

雨柳

かさなりて狗寐たり水仙花

湖游

□□□?

□鶴の聲

大船

大根引手もこたへけり朝の鐘

素民

隠家の聞ハゆゝしき初しくれムシ

比良

残る蚊の耳に付たる雨夜哉

破琴

なつかしき風か吹なり□□□

花眺

春海や何處から明て鳴雲雀

嵐和

人声の土にしミ込む寒の□

川上 無名仙

一声ハ浪に□□□千とりかな

鬼若

見ぬ人にミセたし花の芳野山

子全

稻妻や耿にミゆる愛□山

島山 柴作

鶴啼や□□に残る朝の月

里橋

つる其處へ月ハ落けり鹿の聲

大野 梅光

蜻蛉にとワレメしカキ火の日南哉

牛 洩 文 玉

追加

大野 梅光

松風も聞□□□夜や鯉汁(いり汁)

吞海

橘陵

晦日の闇ハかくしたうめの□

比良

不似合□□□

嵐角

蚯蚓なく生□□□月夜哉

大野 寿 桃

押分てミれハ芒の雫かな

高子 里 松

（俳額の裏面に厚く溜った埃を拂うと左の如き字が現われた）

うめ咲や今朝結び直す竹箒

久米 久米彦

維時文政十三庚寅歲

十月大良晨

大願主 武智庫太郎

會肆 其柳

其蓬

吞海

大船

左右田

柳 新太郎

蓬 豐助

吞 平介

船 臺太郎

執筆 藤田良祐

額-12

城山天満宮額(上林)

(天保三年「一八三二」、追加二頌、縦七七センチ、横二五五センチ、巻頭とも二十六句、追加一)

瑞夢

百姓の抱えて見たる桜かな

奉納 四季発句

題 松梅櫻

松涼し主を問へは尉と姥

梅か香を曳て登るや淀の舟

瑞籬にしたりかゝりし桜かな

小松引日や千歳の人通り

梅か香の北野に余る日の出哉

年の戸を開く手白し梅の華

鉢の木に千鳥通わせ磯の松

青梅や雨の雫に日の移り

白斗

掬兔

京白

南方 亀芳

牛 洩 二慶

牛 洩 文玉

不染

牛 洩 其石

神垣は岌[※]き松の翠かな

桃枝

凧にしらけて凄し峯のまつ

風孚

※「たかし」あわふし」

風流な札を建たるさくら哉

虎山

駒犬の脊も暖けし梅の花

哥休

名所や照るほと黒む月の松

下林梅隣

唐崎や松一筋に檜(まき)の風

則之内 石上

梅のはな開く千歳の匂ひかな

風子

ぬるみ出る水上床し山桜

牛瀨 二慶

御愛樹は松梅桜御代の花

飄水

梅か香や暗の廊下を行戻り

里女

追加

堅まった風を見よとや冬の松

牛瀨 二集

匂へく

わたくし風に

昔より名高き志賀の桜かな

白斗

冬至梅

蛙庵二頌 匣

鶴亀の命も長し松のはな

文玉

會林 季鏡

葉桜やしけりて庭の芳はしき

北高井 鶴遊

維時天保龍集玄黙執徐夷則日(た)

桜狩一日酔て居りにけり

里鳥

静さや雪の降夜の松の音

文玉

※龍集は年次のこと。玄黙は「壬」、執徐は「辰」に
当たり、夷則は「七月」。即ち天保三年七月のこと。

芳野路は取もさくも桜哉

三巴

牛頭天王額（上林、花山組）

（天保四年、追加故文、縦九五センチ、横二八五センチ、七枚の板、追加とも二十六句）

奉納

ゆく春や草にとりつく芋の蔓

城下 牡（つ）若

すゝしさをしるや蜻蛉の行戻

掬 兎

里の子の鶏※たき歩行春日哉

見奈良 左 叟

※「鶴」とも見える。

魚賣の置いてゆく也（わき）焔の縄

全

遊ぶ日を□につかかハる娘かな

白 計

短夜と言ひ〱御門ひ▽きけり

牡 若

乗合は皆しる人よ江の月夜

哥 休

打破く炭（よ）も（も）散るあられ哉

見奈良 素 遊

青すたれ華橘の匂ひすく

牡 若

鶯の笛に競る木の芽かな

下 林 宜 哉

蛭か火の見えて隠れて（ふ）焔涼し

則之内 石 上

雪晴のま時からミゆる小島かな

左 叟

草打て□□□（？）水のおと

大 野 蘆 澤

よき枝は川へさし出た梅の華

巴 龍

茶のはなや文も届かぬ乳母かり

季 鏡

夕雲雀日和〱と啼にけり

牛 淵 文 玉

耳につく物おと多しほとゝきす

松瀬川 玉 子

寒（寒）聲の次よふ遠き寒かな

玉 酒

うくひすの朝から霞そめ二けり

南 方 里 山

秋の蟬註かゝえて啼にけり

※「榎」の草体とも見える。

下京へ来る間に出たり夏の月

見おほえて置や山路の遅桜

朝曇するハ合点と土用干

青柳を捕えて越る小川かな

冬までも山田に残る案山子哉

追加

月の松動くは

雲のかゝるへし

會林

天保四癸巳龍集

仲冬祭祥晨

補助

故文

哥休

巴龍

桃下

月八

才一

白計

素遊

左叟

玉子

白計

左叟

桃下

額-14

宇氣洲神社額(田窪)

(弘化三年丙午中秋。五十句。追加、會林は見えない。右端の板一枚が欠落している。俳号の見えるのは、保泉・楚雀・起石・巴頭等がある。)

額-15

宇氣洲神社額(田窪)

(弘化三年丙午中秋。五十句。追加、葵註會林は起石・頌風・保泉の三名。松子・二角・壺泉等の名が見える。前記の額と同時期であり、俳名も同じのがあるが、別の額である。)

素鷲神社額（見奈良）

（安政二年「一八五五」、追加卯辰、追加とも四十五句）

奉納 四季
発句

帆柱の立並ひけりはるの月

北方志流

神の名はしらてぬさつく桜かな

嘉庭

茶の花や例の因なる鳴子縄

里水

入佛も濟ぬ伽藍や乙鳥巢

巴頭

追ふて行あとへ乱るゝ蚩かな

宗居

二三日も海見ぬ道や草の花

里水

月の出を馬は啼にほとゝきす

花染

山陰を放れぬ鶴の暑かな

里鶴

水音も奥深うなる茂りかな

里水

鶏のせゝり出しけり茗荷の子

里月

若竹に牛の踏欠く小道かな

巴泉

草むらの闇うち消て飛はたる

宗居

すゝしさや離れ坐敷の青畳

ヒノクチ 歌勢

よき道へ出て見出しけり春の月

魚遊

笠着せて□の□案山子哉

里石

青柳に漣※るゝかせや二日月

久米寿松

※「漣もる、」のつもりか。

植やうも問て戻るや菊の苗

上林花林

涉しから伽の殖けり御景詣

花樵

鍬の柄に蝶眠らして摺燧

スノウチ 梶風

水を菅主をほめて新茶哉

里 覚

蝶高う飛やぬるみし水の色

宗 居

雨の降る夜さへ明るし秋の空

里 月

寛洩る水音淋し火のくれ

巴 泉

驛口に嘶く馬や春の風

北 方 加 玉

霽きつた空やさひしき露時雨

花 染

拭入た柱に移るほたにかな(まじ)

全 木 水

養ぬけは若ひ人なり菖蒲賣

花 樵

松立て神代めかしき寺の門

巴 藤

十六霄や闇消て行眞砂道

ヒノクチ 歌 勢

落かゝる椿にそれる吹矢かな

梶 風

日盛や犬も寐て居る松の陰

素 遊

朝月をほめて麥まく男かな

魚 遊

拳こぶしやとんけに出たる畑の中

巴 藤

遠退た恰好見たる案山子哉

花 染

炭賣て韃祭りに呼れけり

北 方 加 玉

昇る旭に動くやうなり雪の松

素 遊

うるわしき夜の明やうや稲の花

久 米 鬼 友

初(かり)廠の啼けして行なりかな

梅 本 翁 船

雉子啼やまた明きらぬ山の裾

泉 梅 枝

門違ひしてもぬからぬ御慶哉

全※

朝顔や垣を離れて花ひとつ

上 村 玉 光

※この句の前に無字の板二枚あり。何人に「全」か不明。

牛の背に埃りの溜る草の花

志 流

鹿聞の伽や松風瀧の音

寿 松

霜道や昔に替る板庇

嘉庭

追加

菅貫や思願の

卵

はるの埜※き

會林

巴泉

花染

嘉庭

宗居

願主 相原氏

※「堆うづたかし」とも見えるが、句意未詳

安政二西歲※

※安政二年は「乙卯」であるから、何かの誤。

額-18

香積寺額(田窪)

(安政四年文月、奉納の字の次に、誰のための追善か分からぬが、「追膳俳諧乱題」とある。三十六句と追加一。そのうち四句分は短冊が欠落。追加者名は写真では

読めない。會林は、笑山・大里・寿井・残月の四名。「虫啼やひき捨てある瓜の蔓 笑山」など會林の句も多く見える。

額-20

護国院額(上村)

(文久三年「一八六三」、追加東琴、縦五四センチ横一九〇センチ、三十六句と追加一)

奉納

題四季

鶴も巢にあさりと(けり)とき覺初霞

上村 寿蝶

洗米に梅の香の有北野講

古處

年の市鶯買て戻りけり

上邑 白梅

笑顔よき子の貫鳧梅の花

上邑 羊角

日盛や手枕はつす川屋しろ

※「う」とも。

問れても知らね屋敷や梅の華

植更やそれく菊の札配り

忘たる赤い草履や草の華

泣上戸笑ひ上戸や花の山

住吉の社内に余る角力市

猿頭巾脱たり着たりはつ桜

誰れ引た留守の鳴子や遠ひき

草花やあしたに見える鎌の錆

※「ら」とも見える。

稚子の送る哀れや流し雛

老の身の数珠爪操て盆おとり

朝寒や信濃煙草に眼の配り

一 狸

古 處

白 梅

上 邑 華 林

上 邑 玉 哥

古 處

上 邑 竹 林

一 狸

華 林

寿 蝶

波 山

玉 哥

近江路や堅田の鮎の一夜鮎

名月やまつに糸ひく夫婦蜘蛛ぐも

迹連れを招く木陰や夏衣

ゆき違ひ妹背の川を飛ぼたる

轉たる徳利眼たつや月の朝

用のない人の来て待牡丹かな

庖丁の手際涼しき竹婦人

投出した頭巾笑ふや土用干

田の畦や牛飼ふ兒この董角力

※「董」は「ねばつち」とき「わづか」「董」は「すみれ」

むき直るふねの龜かめやはつ時雨

籬から菊の匂ひや椽の先

川音のとまる子刻や虫の聲

波 山

一 狸

上 邑 都 村

古 處

羊 角

郡 村

白 梅

都 村

一 狸

白 梅

全

深 井

むつまじきさまや木槿のかき隣

寒梅や老木も若き花の枝

舞くや舞しつまつて日の斜

山眠る比(ころ)や槽火(ぼた)の焚ほこり

白砂に讚岐□□や夕涼ミ

朝寒やかゝの機嫌に茶の匂ひ

鶯に思わす蹴す筆の管

寒聲の響く稽古や瀧の落

白梅

玉哥

一猩

上邑 石燕

波山

深井

華林

半角

額一22

浮島神社額(牛瀨)

(慶應元年八月。八十八句。逐加ははっきりしない。会林、竹谷・古瀨・松月・春甫・旭松、他不明瞭一名。顔主、襲瀨斎扇二。会林・願主の句も多く出ているが、三津・川上・城下の地名も多い。下ろして読めば七割くらいは分かるようである。出句者は会林の他に方明・城下山月・北川・松波・嘉風・生川・みつ五谷・城下梅盛・花暁・千荷・丹青・みつ筵外・みつ素谷らの名が見える。)

額一23

東王寺額(下林)

(下林紫生の無住のお堂、慶応二年「一八六六」四十句外逐吟一、逐吟二春)

家の棟に

たつや上頭の

白幣

茶楽斎

東琴

南農田邑

文久三亥歳

弥生上句

(同護国院には他にも俳額がある)

篁や雲かけおけは啼水鶏

石燕

さし揚て行や牡丹の渡し舟

豊應

南方村 蘭水

濡た手につかむ扇の要かな

田窪村 鶴枝

追て行蝶は空から戻りけり

音聞て牛も耳ふる木葉かな

時

梅呉てから馴染けり山の家

鶴石

音聞て牛も耳ふる木葉かな

上村 羊角

蜻蛉や流るゝはしにひと休

林光

来る人に問や茂

名月やむきを替たる

林光

伊勢鰯に替て戻るや今年米

鶴枝

来る人に問や茂

眼子

乳キエひの廻り道する案山子かな

来運

松

眼子

神風をこゝろに受てはつ手水

養素

おしなへて

蘭水

寺の名もしらす誉けり初桜

上村 都邑

間引菜やいたらぬ宿の料理物

石燕

ひとつ二つ鶴のひろふやはつあられ

嘉石

楽書の多き越路や夏木

嘉石

華の雨重りてにほひけり

花遊

豊なる在所にまれな躍かな

養素

寒梅やまたさゝ啼も余所に

養素

菜の花をまはれば遠し山の裾

鶴枝

咲て後名の替りけり鳥もらひ菊

上村 花林

海こして聞ゆるかねの氷り鳥

石燕

蕨やところ替しての

眠子

留守の戸に名を記し鳥菊けりもらひ

石燕

昨日より鳥もふへ鳧実のり粟

上林村 榎[※]處

※「梅」と同じ

人の来たおらやはせをに夜のあめ

埜[※]松

※「野」の古字

蕘^{あがほ}やむしの痛たはなもなし

林光

雲影のおさへてかるき日傘かな

都邑

霰ふるおらやとかりて三日の月

嘉石

若竹の長しミしかし雨の枝

蘭水

我空え向ふやうなりはつからす

則之内村 牛淵

燭のいらぬ闇や雪あかり

養素

水にまて箒ふりけり燕子花

養素

朝の戸に□□重き若葉哉

来運

□の□を□□り覺心太[※]

鶴枝

※「ところてん」だらう

月のあしすへり込けりゆきの窓

鶴枝

大雪や鳥の窺ふうすの上

牛淵

漣涛のすそからそよく青田かな

豊應

逐吟

眼のよ[□]ハ聖にも有 二春

秋の月

會林 養素

鶴石

維時慶應二丙寅歲

花遊

嘉石

拜志神社額(下林)

額一24

(明治六年「一八七三」、追加杉蔭、縦八〇センチ、横三九〇センチ、五十句と追加一、其引五、計五十六句)

鈴の緒を引はより来る鹿子哉

ヒノロ 万花園

寒い日をかれいの□[?]に煤拂

高井 亀朝

篁や雪※かけ※せハ啼水鶏

石 燕

鶯を待程かよし朝飼

全上 社中

※「あ」とも見える。

惟子や帯メ直す草の上

東方 里遊

てうくや砥の水ほかす門の先

北方 幽斗

鳴立や草に消込む夕明り

花 頭

けんくや放れて来たる躰※馬

南方 五梅

下りそうにして山越すや春鷹

春 月

音もせて静に雪の積む夜哉

笑 居

若草に濕り持けり踏皮の底

ミナラ 嘉庭

関の灯の細りて近き衛哉(ちん)

東方 伊呂波

霞まれて居るや野川の小魚釣

大野 雲鶴 桐

乗合に成るや花見の戻舟

雲 鶴 桐

春風や吹てもふしに松の音と

高井 二交

藍苧や手繩に残る馬の汗

津 吉 愚 鏡

※ 粥杖に染齒隠して打れ髯

高井 柴 髯

太箸や児は取直しく

田 窪 湖 鏡

※正月十五日あづきがげを炊きかきまわす竹

五月雨も底のぬけしか夕明り

喜 月

美しき夜の明□[?]ふや花の山

川上 松 村

引て見て又釣直す鳴子哉

濃 田 一 狸

六月や葎から来る夕嵐

ノ 夕 公 寿

幾度も見直す露の牡丹哉

井内 春 井

頃なれや忘れて居れハ忘霜

井内 不 覚

麦蒔や日足す宵の月明

湖鏡

結ふ手に砂吹上るしみつ哉

嘉石

山道やかからけにたまる萩の花

花頭

水仙の花に短き日脚哉

顧吟

炎天や心に遠き瀧の音

里遊

朝榮を引込む草の飾哉

養素

花七日蝶も戯れ馴に覺

社中

口々に渡し呼鳥花戻り

田窪旭川

風正て格子をふさく□哉?

月居

七處ならて七草揃ひ覺

濃田二春

凸凹の石や汐干の引残

不深

寒月や折くになる馬の鈴

上村都村

夕立や読ミ残したる道知るべ

上村花林

手の届きそうに見ゆるや霞山

東方我好

野に山に親しき色や龍田姫

高井ト之

芽柳に作り並る蛇華哉

北方静民

濁りとは別に流るゝ清水哉

津吉哥好

水明りして夜の明る五月哉

久米松虹

青梅の落込む音やふきの中

北方志汲

若草に届くや松の吹あまり

南方其翠

菊咲やかわるくの人出入

上村羊角

紅葉照る夕日くゝるや仁王門

湖鏡

風らんや横からも日のさゝぬ庭

北方鶴眠

わる音のもるゝ小家や卵酒

春光

遊にもこゝろを配る弥生かな

明森

わくら葉や降らぬ雪を真昼時

ミナ良嘉庭

追加

舟かじも干ぬ貢や

杉蔭*

千代の春

※則ノ内、野口氏、神職。

其引

弓矢神籬の梅も人こゝろ

あのやうに我も霞る丘の人

時鳥昼も月澄む木の間哉

鶯や梅ほしさうにかごの中

涼風を横に歩行や橋のうへ

願主

森氏*

舎口氏

森多平

渡部久左衛

會

徳永春月

春月

仝上

笑居

嘉月

花頭

維時明治六 秋吉祥旦

林

渡部花頭
森明森

※「谷」の異字

額 - 25

素鷲神社額(見奈良)

(明治十二年「一八七九」、一日葺選)

奉納 四季發句

五千集

波々岐国

一日葺選

葛紅葉鶴の巢も見る木末かな

ウシフチ 南 洲

水僊*や花見るまてはわすれ草

寿 玉

※「仙」と同じ。

白はまやか**か**ふ**れ**たやうに月の人

松山亀静

朝寒や茶袋そくく水のおと

下林春月

寐こゝろや四月になりし舟の中

白翁

□□朝起すれば□□寒かな

南 洩

□□^{ワレメ}折て呉けりうめの花

巴

秋の蚊のふかるゝ牛の寐息かな

里

そかくと聞や朝日のほととぎす

春 月

出ぬ□□水は雨の降りり木下やミ

花 樵

雪の日や障子明れは立すゝめ

風 處

来て見れば葉桜も有風情哉

□ 吟

眠 □□

嘉 庭

□□

□□

(板一枚、六、七句分欠落)

(欠落部に続いて以下二十二句分薄れて読み難いので省略。たゞし作者名は比較的分かるのも多いので掲げる。)

モリマツ谷嵐、ウシフチ竹谷、花樵、北方成也、南方月、花樵、松月、□□、白翁、柳玉、里鶴、巴玉、ウシフチ松谷、竹谷、スノウチ楳風、春月、嘉庭、田 窪如泉、梅盛、北方志汲、花頭、松 山玉甫。

草からも雲の起るや夏の山

巴 玉

打おとの小家にも似ぬ砧かな

田 窪 梅 里

□□夜の寐覚ゝや松の馨

巴 蕉

(以下欠落数句分あり)

とちらから□□夜そ月と梅

梅 盛

むし□□や□□隔たる市のと

嘉 庭

すみれ**埜**をさつさと行や手習子

顧 吟

※「野」の古字

川おとのしくれし□□柳かな

南方 秋月

名月や木の間の竹に□□

巴□

若竹や風にゆれこむ月の艶

里鶴

そふ道のしまりかけんや朝の露

ウシフチ 湖月

曳汐にかたむき直る尾花かな

巴玉

さゝ波のこゝろや風の釣しのふ、

北方 葛陽

うの花や闇をのそけは水明り

北方 成也

軸 一つ宛夜に入おとや遠きぬた

里鶴

霽るゝか^{（注）}と見えては降るや五月雨

嘉庭

逐加

草花や名□□美しき

南方 喜勇

これて社またれ□□そ花に鳥

と岐古

馬も白^{（注）}ふ□□て通るや花ふゝき

□□

水^{（注）}溜て温む瀬おとやほとゝきす

翠□堂 風處

明ほのや花に親しき空の色

寿玉

鈴の^{（注）}尾の冷ゝ白しけふの月

□雨軒 巴玉

朗にあける木末や百舌の聲

ノタ 湖龍

よく見れは一羽でもなし雪の鶴

□古堂 里鶴

手枕の夢も花見の趣向かな

顧吟

秋風や雲間を過る鳥の聲

花樵

見え出した花やこゝろの□□

松山 亀静

ひる貞や朝から影もなきところ

風處

（選者「と岐古」については、俳人録によれば、「時古」の見出しで、「土岐古、松山、天山あたりに住む。また徳禅寺住一日庵、遠藤氏、宗匠、明治時代」とある。また同じ「時古」と号する者に、田ノ窪の人、稲葉（後、

鈴木) 宗十郎なる人がいるが、別人。

額—26

浮島神社額(牛渕)

(明治十三年三月。三十六句。逐加、土岐古。額主—普通「願主」と書くが—八木軽尾・大西花洲)

奉 献

花散るや雪このかたのなかめ物	春	甫
ふさきても思ふ日のある火燵かな	湖	船
咲ミちてももの静なりなしの花	軽	尾
酔たふりして帰りけり雛の客	二	隆
神かきや咲し桜も只ならず	素	雲
霞けり都の山は見えないから	青	渕

手をふりて聞鶯の初音かな

伐口の際よりおほし柳の芽

はる風や驟樹までか青嗅き

見添たる雑木も花の風情かな

雨に出て日にふとりたるわらひ哉

人かほも見えぬ夜明や削[※]かけ

※削掛の神事をいう。京都八坂神社で十二月晦日の夜、子の刻から行われたおけら祭りの神事。削掛を焼いて豊凶を占う。

素 兎

花 洲

春 谷

染 檜 女

春 谷

不 求

膝に花五明の箔や着きはしめ

小ひと月花にやどなきよしの哉

着し笠にさして見て行つゝし哉

明る山花はかりかと思ひけり

蛤を鴉も捨ふ汐干かな

桜 僊

三 津 良

桜 僊

不 求

春 甫

名も知れぬ花の咲けりたれの春

二笑

組板も音の出るものよ芹齋(字を)

石水?

とし玉や笑ひ上戸の寺男

梅邑

問われたる事はまた見す初こよみ

桜僊

はつきりと見る影うすし春の月

花洲

山吹にぬき捨てあり日和下駄

三津良

一つ来てふたつ飛すや草のてふ

賈登?

遠眼にも梅とは見えす初櫻

喜風

初雷や戸に月影は洩なから

喜風

あれほどの花に山家の朝寝かな

春業?

出代や寝た子をさはる一人

春甫

鶏にもものいうて捨る若菜かな

古松

手も洗ひ口もそゝきて梅見哉□

二笑

逐加

塾(の)に山も出来たやうなりあさ霞

桜僊

さかえるや名に浮島の神の花 土岐古?

ぬしなくは折尽されん初桜

古松

額主 八木 輕尾

かりそめや五明のうへの若戎

梅邑

明治第十有三庚辰春三月

日和よし種まくうへの鶏の聲

花洲

山吹の咲や眼の利石の鏝

輕尾

口輕き十日戎の往来哉

松煙

素鷲神社額（見奈良）

（明治十三年六月。一三二句と、薄れて見え難い個所が六句分くらい。別に^{※1}「馬乳園半窓」の追加一句と、其二として三名の一句ずつが三句。會林の記載はなくて、あるいは追加其二の三名がそれに当たるかも知れない。三名は、**園吟**・**嘉庭**・**苍樵**^{※2}。願主は、相原氏・和田米治・池川菊治・池川金三郎となっている。額中の句は下ろして時間をかけて見れば、六、七割くらい分かるであろう。）

それぞれの句の下方の併号の部分のみ、比較的濃い墨色の楷書で書かれていて、見えやすいので、地名の判読できるものと合わせ、写真で見える限りを載せておく。額に出ている順に従い、重出するのがあるのは、それに対応する句が二つ以上出ているということになる。

※1「半窓」の併号を持つ同時代の人には郡中にもいるが、「馬乳園」半窓は今治の人。伊予俳人録にもあれば「田頭武三郎、明治二年六月六日歿、七十一歳」とある。ところが、この額は明治十三年に掲げられている。半窓選の俳額は、松山新立の金刀比羅神社にもあり、それは明治十四年の掲額。また、南野田素鷲神社にある半窓追加の奉額は、明

治二十二年。明治二年歿の選者の額にしては不自然である。歿後に生前の句が奉額に出ている例も見たことはあるが、あまりに年が開き過ぎるのは疑問であるし、殊に選者歿後二十年経て、その時の句を掲額にすることはまず考えられない。俳人録の誤りか、二代目半窓がいたか、あるいは別人か未調査なので何ともいえないが、恐らく俳人録の誤りであろう。

※2「花」の俗字。

喜庭・志津川里静・静民・**文**・**湖春**・**景**・**里**・**静民**・**北**・**不明六**・**寿花**・**松**・**静民**・**花樵**・**老遊**・**東狐**・**顧**・**龜洩**・**風處**・**花樵**・**松**・**松雨**・**静民**・**龜洩**・**湖春**・**寿玉**・**巴**・**松**・**左**・**主馬丸**・**湖春**・**顧吟**・**白翁**・**松瀬川龜若**・**湖春**・**北東**・**嘉庭**・**山**・**南方秋**・**花樵**・**湖春**・**宗居**・**困景**・**玉泉**・**春錦**・**巴玉**・**湖春**・**梅盛**・**野田一狸**・**田野さいき**・**北東**・**巴樵**・**一登**・**湖春**・**成也**・**外景**・**虎遊**・**湖春**・**桃仙**・**顧吟**・**田野如泊**・**嘉庭**・**志津川鵜柳**・**成也**・**梅盛**・**虎遊**・**吾暁**・**白翁**・**湖春**・**巴泉**・**白翁**・**風處**・**一登**・**老遊**・**寿玉**・**いつ**・**哥玉**・**如泉**・**静民**・**風處**・**巴泉**・**今治茶隣**・**主馬丸**・**保免白民**・**成也**・**巴玉**・**花染**・**外景**・**虎遊**・**鳥陽**・**成也**・**桃山**・**北條椽笠**・（約六句分くらい見えにくい。）**外景**・**谷隣**・**月**・**成也**・**大**・**里玉**・**志汲**・**静民**・**湖春**・**巴玉**・**白翁**・**湖春**

・顧吟 □ □ 古柳・花樵・静民・宗居・湖春・茶隣
 三光・嘉庭・静民・白翁・巴玉・波止青黄・東方里遊
 ・嘉庭・桃仙・白翁・湖春・白翁

額一31

浮島神社額（牛渚）

（明治十四年。九十六句分の短冊があり、四句分が欠落しているので、百句のものと思われる。選者、會林ともよく見えない。會林は五名のようなのである。数か所短冊が欠けていたり、全体にずり下がって額縁の下辺に入り込み、俳名の下の字の見えにくいのが多い。字の跡が盛り上がり残っているので、下ろせばかなり読めるものと思われる。）

俳名に見えるもので、二字のうち下の字が隠れているのは、上の字だけ記しておく。

賀・春・古・旭水、櫻僊・湖・□月・吾・里・花・□
 雅・竹谷・□松・可□・竹虎・梁樹女・松・一・三津
 良・□登・貴・倚松・千・不

額一32

宇気洲社額（田窪）

（明治十五年初春、六十句。奉納四季発句。追加は「雨泊」。會林ははっきり見えない。願主、渡部某。一志、如泉、亀泉、千玄、一木、其梅、二扇、和友、天山等の名が見える。）

額一33

片山神社額（下林）

（明治十五年「一八八二」逐加五揚、五十四句と追加一、内欠落二句分）

奉納題四季

月はなのはしらや稲の華盛

徳丸六川

来る鳥の□□□□□□
 □□□□□□落椿

林光

夕の高き松にたすかるしくれかな

牛 瀧 竹 谷

世の中もさくらハ散れハほとゝきす

上 三 谷 寿 水

羽籥て花の笈はくほたに哉

城 下 六 川

宝引や子供に負る

北 方 壺 石

はつ春の嬉しさ移る鏡かな

八 倉 一 困

春 に雨のちかよる滄のおと

稚 奈

騷

春 月

春風の吹やうに任せ人こゝろ

志 津 川 千 静

ふたる日から

津 吉 都 月

移り行く世にも替らず田植うた

寿 水

刺鯖やめてたき塩の膳に散る

川 上 白 翁

出る月をまつたのしミや舟あそび

嘉 石

美しきおとの

牛 瀧 輕 尾

(欠落一句文)

うるはしき松の 生や霧の

一 木

誉て居るうちに散りけりけしの莊

畑ノ川 鶯 谷

鶯や蒲団の中の朝たはこ

德 丸 魚 風

花に来て跡なくなりぬ酒の酔

筒 井 鶴 友

一 して夜の深し虫の聲

川 田 居

ある程のほしハ皆出て露のそら

白 翁

山寺や暮て紅葉のひとあかり

南 方 穂 月

早乙女に結んでやらん笠のひも

梅 志

呼 さうな雪

白 翁

いろくの柿

郡中上野 精 月

めな

川 上 来

太 な世にも弓ひく案山子かな

ト べ百川

無事な

六 川

涼しさに笠のひもとく峠かな

野田 一 狸

牛 洩 春 谷

醉覚の水呑に出て月と梅

城 下 桐 溪

旭の脚も上る笥の水柱かな

川 井 玉 岑

いつも来る

寿 水

山焼きや明日の日和を夕詠め

城 下 樵 翁

住吉の松も霞ミて今朝のはる

時 正

筆のさや机に轉て

其 川

うかれ舞うやうな蝶なり花の上

時 正

海士も髪束直して盆の月

八 倉 其 梅

卯の花の下に目立や蟻の道

牛 洩 貴 宅

精進にこりて出代のおとこかな

魚 風

六月や を載く裸山

城 下 乙 民

桓ともに引倒しけり雨の萩

梅 谷

養 素

顔にふく川風嬉しはつ螢

久 米 松 静

東西やさく朝顔に消るほし

上 林 笑 居

樹 の雪花も及ハぬ詠

川 上 輝 山

小

壽 水

色替へぬ影もいく世と神の

全

紫陽花の姿おもたしあめの朝

静 民

明る夜は只さへよきに梅柳

一 木

長吉か名もあら

北 方 鷹 陽

追加

蝶鳥の影おく

脛や花のもと 五揚

願主 野中 熊衛

井上政治郎

河野 新造

野中 通孝

會林 梅志

稚姿

嘉石

養素

明治十五年六月吉祥日

額一36

宇氣洲神社額(田窪)

(明治十八年二月、五十句、奉納題四季、追加はつきり見えない。會林三名。額中に花村、琴嘯、樹山、湖秋、花林、千松、一志等の名が見える。)

額一37

宇氣洲神社額(田窪)

(明治十九年初春、五十句と追吟二句。追吟は「現花堂世外」。追吟の次に其二として「一志」のがある。會林は「知昇」外二名。願主は山置佐作・土田正□・大西良作。普通「奉納」などと書いてある巻頭の板が欠落している。額をおろせば句も半分くらいは読めるようである。)

(同神社には、他に東側外に一二〇句の、横四間に及ぶ大額があるが、消えて字はほとんど読めない。また正面には昭和三十三年二月町合併記念の石笛選一〇〇句のものがあるが、省略する。)

額一38

三社大権現額(八反地)

(明治十九年「一八八六」、其戎選、追加俳吟ともに全三十四句)

奉懸 四季発句

浅芽生や□□を吐雀の□□□□

篝火八神の花なる祭りかな

あぜかきや冷ミもぬけし月の色

巢立したすゝめに朝の祝ひかな

人か人見てほしかるや□□□□

筏師の□からたつや朝かすみ

冷し瓜□□□□□□

□□家鴨も 日なかかな

膳すゑるはかりにしたるけ□□月

爽に霞つくるや京の鐘

みな消て露となり□□明のほし

松山草月

樋口蘭籠

八倉一本

柳

柳

素石

梅園

花蕉

南谷

玉

柳玉

朝白や何□□□つるの先

犬の寝た婆もまるき寒さかな

鳥の鳴さへもこたまやあきのやま

□□□□ 蚊やりかな

田螺より□□□かたつふり

?

□□? の中からも出す蚊ちやうかな

雪踏たあしをもてなす湯婆かな

繫かれた白も□□かし神の馬

吹風ハ花に消るやよしの山

こゝろから丸う見えけりかゝみ餅

亀遊

哥勢

里

君山

白民

湖春

過生

文閑

井水

松眠

六門

吐月

草月

門門を□めてもとる安居かな

柳玉

袞さをしらぬあらしや鉢たゝき

春月

羽子突た勞れの見ゆる かな

月

新參のなふられてゐる □ かな

愚

今朝の雪まつの容ちもうつめけり

南

畑堀た罪ハゆるすそはつ鴉

二

逐加

四時園其戎

拝吟

蛤になるか濱邊のむらすゝめ

會林 柳玉上

人に迄 □ □ 夏の通りあめ

全 松 眠

是社ハ罪も造らしさくら狩

執筆 素石

明治十九年仲秋吉祥

願主 河原八内宗賢

額一39

飛梅天神社額(北野田)

(明治二十一年六月、逐喙は冬語。八十句。會林は、一風・柳雨・黃山・榮月・晴月。献主は、牧團藏・八塚寅太郎・久保氏・松田兵□郎・相原兵五郎・牧北良・牧四郎・酉ノ年男。比較的墨色がよく残っているので、下ろして読めば、七割以上は読めるようである。(写真で分かるだけ排号名を挙げておく。)

※「風」の異字

晴月・古梅・一風・静民・湖山・玉心・柳雨・湖月・松月・梅居・花友・鷺泉・島石・久米喜雀・北良・一枝・榮月・高井竹遠・一木・牧野・二雀・西岡馨風・東方里盛・梅月・松哥・森松硯□・松山秋月・和水・水泥琴囀・櫻豆・松枝・黃山・高井明梅・里遊・北方壺石・五葉・静可

(重出名は多いが略した。)

風たるむ

蝶くゝる透さへ見えぬ牡丹かな

東明神 梅盛

指出たる枝から咲くや初さくら

梅下

明月や水の鏡に一人言

二柏

風

壺松

鐘の音の草摺行くや忘れ霜

花頭

追加

月雪

松堂 騎樂?

法の庭

會林

歌案 梅下

玉静 玉水

明治廿一年七月吉辰

額-41

飛梅天神社額(北野田)

(明治二十二年一月上旬。追加の書かれてある所は欠落して選者不明。約五十句くらいの額。会林という字は見えないが、願主は、牧邑五郎・相原亀□郎・八塚多一・八塚正之、他不明瞭一名。欠落部多し。)

残っている部分に出ている排名を挙げると、

柳雨・梅月・二鳳・黃山・松枝・田舎・樛月・梅花・櫻友・晴月・千雀・喜遊・友弥・楚月・樛里など。(重出は省いた。)

※さきの「梅月」と同人であろう。朴は梅と同字。

額-42

北野田飛梅天神社額

(北野田飛梅天神社には(41)の額と同じ頃のものと思われる欠落甚だしいものがある。奉納四季混題、百句くらしいものと思われる。追加の所の板も欠けていて不

明。会林は柳雨・黄山。願主は相原利平次・牧甚三郎・
牧虎之進)

梅月・一風・松哥・戀□・砥部五□・松枝・柳雨・萩
月・久米花京・二鳳・琴嘯・黄山らの名が見える。

額—43

素鷲神社額(南野田)

(明治二十二年晩春。逐加は半窓。会林は薄れて読め
ず。願主、末光虎三郎・束村^田次郎・西村□三郎。欠落
部分が大きく二か所あり、正確には分からぬが、ほぼ百
句くらいのもの。額面の傷みは激しいが、下ろせば半分
くらいは読めるだろう。中に、北タカイ二三・カワノウ
チ涼杜・芦僊・和水・ドイ旭山・静民・二蝶・松月・一
狸・香風・古處・花友・マツヤマ桐溪・ウエムラ晴玉
・クメ花京・可長等の名が見える。)

(同神社に明治十年代と見られる俳額もあるが、薄れて
見えない。欠落部分も大きく、百数十句あったと思われ
る。)

額—45

香積寺(隻手薬師)額

(明治二十三年秋八月、水田壺泉追善発句として一一〇
句。追加は桂迺舍千羅、会林一志外三名。豫川・梅友・
不求・柳泉・松嵐・松緑・梅光・花京等近在の者の名が
多く見える。)

額—46

城山天満宮額(上林)

(明治二十四年「一八九二」、逐吟南陵、縦八二センチ、
横二九〇センチ、五十句と逐吟一)

奉納 題四季

皆雲となりて明けり花の山

當処 歌 楽

梅か香や浪も笑ぬ朝の風

下林 春 月

ほろ酔の良(かほ)に降り覺華(けり)の雨

ミナラ 巴人

すゝむしやこゑより遠き啼處

三奈良 一雄

行秋や別れ(か)に暮るゝ山

全處 巴玉

うつくしう夜は明(けり)に覺雪(まじ)の臆

全處 桃語

草木皆影のおさなし春の月

北方 静民

二階から入舩まねく団扇哉

南方 良石

夜を昼に継くや師走の針仕事

小野 梅居

鳩ならて啼鳥もなし合飲(あはむ)の花

北方 梅鶯

新道や柳のかたへ造り行

春 月

こからし(かけ)や笕(かけ)の水のあとかへり

當處 湖辰

谷天や高(たか)ねに居る日和雲

川上 都楽

咲(さ)さうにして日を経るや寒椿

全 梅枝

朝寒むや茶袋そゝく水の音

春 月

富士を見るま(ふじ)と(ふ)や初(はつ)あらし

久万 梅盛

夫(それ)たけに日はまた延ぬ柳かな

當處 花頭

とけ残る雪に初日の匂ひかな

當處 歌翠

舩まねく袂吹れてはるの風

春 月

松風に竿の撓むや月の厖

全處 梅曙

旅ひとも交りて雪の達磨哉

當處 可静

掴まんとすれハ飛けり秋の蝶

ミナラ 嘉庭

くれきらぬ木の間に出たり春の月

全

山里も立派になりぬうめの花

川上 豫川

正月や笑ふはかりに日の暮るゝ

巴 玉

一寸にも眼の行盲(こやし)の鬼灯哉

桃 語

散るたひにこころの動くはたん哉

花 頭

雲に手の届くやう也卓月雨(たつ)

ミナラ 花居

露深し芒に濡すかた燈ミ

西條儀道

寒月や音よく水の遠なけれ

南方潦水

まつかせは時雨であるに月夜哉

可静

神の燈をつゝみて深き霞哉

當処月秋

飛入りの素貞もあるや辻躍り

川上兎山

事足りて春まち兼し梅の花

白扇

星合や秋もまた夜の明易き

梅鶯

ゆれそうて影も踏れぬ柳かな

春月

神さひし花表や梅も老木勝

儀道

傘の雪たゝます人に譲り覺

全

※「華表」のこと、鳥居。

鐘のこゑ聞いて間のあり雪の暮

當処喜月

聞馴る鐘さへ秋の夕へかな

北方志流

ゆきの道歩行にくきも面白き

輝山

何時までもこれ置たし雪の松

全処春玉

隣から来ても客なりまつの内

井染

頓て鳴く鳥とひとまや冬籠

梅鶯

寒いより外に癖なし月と楳(うめ)

梅鶯

杖笠もそなへもの也西行忌

全

山の端に雲の重る五月かな

上村成美

冴かえる空に雲なし富士の山

南方五柳

出る月に船向け直すすゝミ哉

當処榮月

逐吟

氣にたらぬ

※南陵

蓼咲や小川に(たぐ)る水の沫

花居

朝とてはなし

梅柳

※川上、南方、高須賀氏、梅の舎、「閑居の友」にも。

會林 花鳥園可靜

立暮園采月

一思亭歌翠

補助 旭之舎花頭

願主 (名は記載なし)

明治二十四年夏日

額-47

法蓮寺額(上林)

(明治二十四年「一八九一」、横約四間、追加瀛翠居青菱、百五十四句と追加一、願主会林等七、計百六十二句。高所にあり近づけず、墨色はかなり明らかなので写真により読んだもの。)

奉納 題四季

降る雪はふらせて梅の咲にけり

井内二



星あひや秋もまた夜の明易き

北方 榎 鶯

昨日より今日猶淋し春の雨

梅 曙

折なとて折てくれけり梅の花

ミナラ 巴 玉

春は又花に来て啼けはなし鳥

田 窪 二 水

羽織着た夜から聞けり萩のこゑ

ミナラ 成 雅

草の戸もぬくき程積む年木哉

花 頭

見返せハ松風吹よ呼子鳥

久 米 榎 友

成門も廣う思うよ今日の月

志 川 龜 友

空も道有けに見ゆるわたり鳥

ミナラ 嘉 庭

鶯や日和うれしと思う朝

志 茂 林 春 月

美しう春待梅の蒼かな

保 水

一聲は拾ひものなりほとゝきす

川 上 都 楽

朝寒き尺か不足ようめの花

ミナラ 花 居

咲^{ヨシ} 淋しき寺のさくら哉

久万梅盛

柑か家も身のほと／＼や雛祭り

歌楽

あによふに我も霞むか丘の人

春月

夜に残る濱の暑さの匂ひ哉

志茂林石□

山里も立派に成ぬうめの花

川上豫川

松杖[※]の中に秋しる紅葉かな

花頭

道透ひすれは野きくの盛り哉

歌翠

寒き日や障子にうつる雲の影

ミナラ桃語

山一つ越して音聞く清水かな

白楽

花にそう葉も色深しやま桜

萬化

蟬啼や夕日に残る竹のおく

上村都昇

春雨に又出して著る紙子かな

北方志汲

笠の紐しめて見上る雲雀かな

歌楽

鶯や障子明れば^罫かくるゝ

上村成美

暮兼る木の間にしたり春の月

可静

水移りして暮にけり秋の山

北方玄深

松ひと木讀て立寄る清水哉

都昇

釣草に一^夜離れぬ螢かな

ミナラ山月

行秋や笥をあまる水の音

豫□

日盛や砂のほこりの二階まで

湖辰

驚て起て夜深し雪の窓

南方萬化

聲^ゑに夜は明にけり春の鳥

龜遊

※^細代木も又なき川や芦の花

白楽

うかれ立花見を余処に田打哉

松瀬川吉井

※字はこう見えるが、「網」の異体に「網」があり、
多分「あじろぎ」であろう。

汗の引くやうな流れや苔の花

二柳

静さの中に有なり露のおと

輝山

豊さの見ゆる在處や梅柳

川上輝山

吹あれた日もなくて散る柳哉

志ツ川 松 静

手をすけるよふに思うやちる牡丹

其正

さミたれや雀の這入くしの窓

歌 翠

爰(三)て今たしか啼たりきりくす

自 楽

九日も十日も知らぬ野きくかな

井 水

暮る日も知らず見て居る桜哉

南方 濼 水

青空や秋のまたとを桐一葉

輝 山

泥足て持歩行けりかきつはた

稲荷 二 遊

梅さくや雪の夜に似た窓あかり

萬 化

焚ものでないやうに積年木かな

廣島 鬼 笑

松風※ハ時雨て有るに月夜哉

可 静

烟立わら屋敷へてゆき見哉

ミナラ 成 雅

鈴虫や聲より遠き啼ところ

ミナラ 一 雄

ちらつくのは笹の影なりひやし汁

上 村 清 玉

夕月や花の影ふむ庭歩行

吉 井

棟上の日から目のつく新樹かな

吉 井

眼?□□に青海ひろき 晝田哉

桃 語

蝶くも遊て居るよ花の上

龜 遊

夕風の吹てちり出す柳哉

花 居

雨晴て傘にさす日の残暑哉

南方 良 石

雲に入鳥の多さよ波なき日

梅 遊

春の夜は夢にも花のうわさかな

月 種

※この句城山天満宮、明治二十四年の俳額にもあり。

此あたり畑在處や櫛もみし

喜月

隣から来ても客なり松のうち

以楽

船の灯の見ゑて淋しき枯野哉

ミナラ 巴人

夏も花の秋とハ咲にけり

南方湖月

涼しを落て見せけり瀧の水

吉久 吳竹

五月雨や草の上行水の音

榎曙

山寺や庭も座も花のちり

都昇

暮て後ち畳に残るあつさかな

醉月

さなみも見ゑて春行芦邊かな

井篋

雨の根はぬけし月夜やほとときす

嘉庭

そのままに霞め小春の朝ほらけ

梅居

あたりにハ木もなき川に一葉かな

榮月

驚す夜半の夢や猫の恋

久万 裏江

水走り早いよふなり木下闇

自笑

行燈に留主守させて月見かな

吳竹

川舩や柳ちり来る膳の上

以楽

うくひすや朝のミれんを庭に啼

輝山

二三輪咲て匂うやむめの花

南方洋月

雨晴をぬからず揚る雲雀かな

都楽

文る程淋しさの増す疑笛かな

吉久 喜山

朝寒や雀のこほす軒の塵り

同

春のものなれと涼しき柳かな

河内涼牡

柴垣に糸瓜の花のさかり哉

一雄

日も無事に暮行空や鷹の聲

榮月

何處に有る時は雪の夕からす

嘉庭

草の戸をたく水鶏や雨やミて

東方 白扇

道[※]逶ひして幸ひのさくらかな

※「違」と同じ。

涼しさや青田を渡る風の色

客引の客に引[□]さくら哉

朝心涼し板子のこほれ水

おたやかな空より花の吹雪かな

雲に手の届くやうなり五月雨

雨ふくむ夕^夕やたるく風の糸

見上れハ松杉高しせみの聲

来た鳥の潜りておちし椿哉

雨毎に近う見ゆるや夏の山

干飯や暮ても残る日の匂ひ

雨晴て一際高し蟬の聲

亀友

井水

輝山

良石

五柳

花居

北[□]静民

□川其水

南方梅鶯

花居

久米其雀

月秋

鐘の音のかわりハせねと霜夜哉

独り寝の夢驚かすあられかな

老木かとうたかわれけり遅さくら

鶯やまた里なれぬ今朝の聲

※[□]したまゝを氷りぬこほれ水

※上の字は「衆」「露」「鹿」等の草体に近く、下は「相」「打」「折」等に近いが不明。

なにふ自由なき身も秋のゆふへかな

そよ〜と日和にそよく柳哉

一つ宛かれて淋しやあきの鐘

入月の名残を啼^啼欵時鳥

柳さへ風なき二百十日かな

抱た子も持て居る也菊の花

明月や人の心もくもりなき

緒山

月穉

榎^マ曙

居士

輝山

花居

五柳

以楽

陽谷

其正

喜月

二柳

淋しさやもみしちる夜の水の音

梅枝

手にとれハ水に成りけり春の雪

梅月

揚る程聲の澄み切る雲雀哉

自笑

落て後^(トモ)追もいろよき椿かな

吉久松録

静さや霞みを洩るゝ鐘の聲

巴玉[※]

出来秋や里も豊かな朝烟り

清玉

※「巴玉」とも見え、恐らくそうである。

梅□いつれおろかわなかりけり

梅居

みしか夜の咄し崩すや鶏の聲
ちら／＼と柳に光る螢哉

山月

燈火も消たよふなり月の舟

自楽

涼しさに燈火移る入江かな

其雀

聞馴た鐘さ系秋の夕トかな

北方志

雨さへも順よふ降るや土用の明け

嘉庭

遠退は皆空になるさくらかな

涼牡

野も山も只一色や雪の朝

壽月

梅か香に押るゝ窓の夜明哉

吉井

好き風の何時もそうなりいと柳

成美

雨の萩起して杖を突せけり

松瀬川
重松

夕立に^(ト)迹込人や松の下

二柳

和らかに降るや若葉に雨の音

一雄

村雨に追れてもとる花野哉

南方和楽

水仙や寒を厭うふりもなし

連枝

咲そうにして日をふるや寒椿

榎枝

月よしと讚くゝ這入蚊張哉

成美

一とちから入れて落すや下駄の雪

自楽

頼母敷色香ふくむや冬の梅

亀遊

秋の山淋しくと暮にけり

全

行水に影のもつるゝ柳哉

梅曙

栄へゆく門にゆかしき柳哉

亀友

野も山も人聲満て花さかり

志シ川 壽楽

預たよな草屋の牡丹哉

春月

大雪や野は一面に何もなし

二柳

追加

舩人も来て春の夜を更しけり

かしこ

春風も精
一はいか松※の音

渾翠居青菱

飛鳥の影も淋しき枯野哉

則ノ内 七丸

※「か」に近いが、「の」とも見える。

明て行空や月にもうしろ向

楳盛

降る中に
積音の有り夜の雪

願

陽谷堂連枝

神淋し社や梅も老木かち

西西 蟻道

玉も降る

日新斎月穂

吹ちらす松の落葉や神無月

北方 春玉

夜の詠ながめ也月の秋

主

冬されや野は廣くと松ひと木

裏江

桃さくや山ふところの

涼谷軒梅曙

鳥も野に淋しう暮て秋の月

西ノ岡 香風

一在處

氣ほかりの揃う人斗也

旭之舎花頭

皆雲と成て明けり花のやま

歌楽

御取越

美しふ夜は明にけり雪の窓

桃語

客引きも
俱に讃たる牡丹哉

會林
立春園采月

奉納

涼しさや

枕に響く瀧の音

苑林居可壽

我に立つ月日はしらす初さくら

原町目平

寒きくや

雪除け出来て

樂山亭歌翠

あり〜と遠眼のきくや秋の山
撫子や此青空にひるの露

当村喜月
下林春月

増匂ひ

干時明治二十有四載八月良辰

蒼から見て居て久し寒椿

原町目平
村陽谷

懸稲や何處にたつと家の

華可静
原町目平

華□また暮ぬる神の灯かな

乳母呼む□□
□□けり

古塚はかすみ残してきり〜す

砥部一角
畚水

（一句分左半分欠損）

（欠落八句分）

常に來ぬ鳥も来て鳴く涅槃かな

華盛

額一49

二瀬のお堂(西宮)額

(上林)

(明治二十七年、逐唸因阿、五十句内八句分欠落、逐唸一。昭和五十二年十月に見た時は、句の書かれてある板の順序が入れ替っていた。これはその数か月前のものである。)

ゆれさ□^(かけ)て蔭も踏れぬ柳か^(やなぎ)な

下林 春 月

あさの菊誰も交らす詠め^(なま)晃

田ノ窪 喜 鶴

山里はやまさ^(な)と成りのおとりかな

□ 月 田

暮^(な)後奥に残る暑さかな

□ 村 陽 谷

虫鳴や古き田^(い)事^(こと)の^(の)井戸

□ 春 畝

凧や寛の水のあともとり

全 湖 辰^(つ)?

灯を消して菊の誠を見たり^(※)晃^(ほり)

当 村 歌 翠

よき枝は瀧の上也梅の花

南野田 和 水

※「晃」の俗字

窓あけて見送る□□

□ 漂 舟^(ふね)※

露の道出て^(しめ)直す草鞋かな

□ 松 松 嵐

※「丹」とも見える。

なき人をおもひ出しけり月^(つき)の^(の)夜^(よ)

□ 二 遊

春雨や主なき塚の手向水

當 村 月 秋

※「今」とも読める。それなら「月今宵」となるのが普通。

なき人をおもひ出す夜や閑古鳥

□ 春 水

見遅れば木の間の月や鳴川鹿^(かじか)

森 松 嵐 月

茶と酒と□^(か)の交るほたるかな

□ 驚 船

霞む日や床を出てきく京の鐘

成 美

あさ顔や□^(か)はまた灯のミゆる

北久米 終 昔

秋寂し^(お)とや鳴子も風まかせ

目 平

声はかり濡ぬやう也雨の雁

上 村 都 昇

物おとの瀧□□まる霜夜哉

砥 部 祐 一

散り込し花の儘なり送り膳

□ 祖 □

五月雨やありあま□□^(か)のもらひ水

樋ノ口 珪 磋

包むては行ぬ土産や八巾

※「いかけり 凧」の意。

南野田 一 狸

しら菊や庵の障子の恥かしき

上村 都 昇

寝た人の手から借たる白扇かな

南方

眼のとくまで見え居るや揚雲雀

成 美

蕨や露もこころもあさがおしらぬ

成 美

時雨るゝや軒端に

南方

や小川かかりふね

南方

とめられぬ早瀬の舟や

南方

逐 喰

床しさも

※ 因 阿

募りて悲し

萩の花

會林 春 月

※三郎兵工長綱、後渡部操長綱と改称、天保十五年、

南方より東方村へ入庄屋として分家。明治二十九年六月三十一日没、六十五(六十七とも)

※維持明治二十有七甲午寢覚月

月 秋 喜 月 海 歌 漂 榮 月 舟 月

※この一行は俳額のわくの部分に書かれてある。「寢覚月」は陰曆九月の異称

額-51

浮島神社額

(明治三十年晚春。五十句。追加は可長。会林は、八木某・高須賀某・八木某・大西某の四名。願主は松本某・渡部亀太郎・八木□三。下ろせばまだ八割以上読めるよ
うである。)

地名・俳名の写真で分かるのを挙げておく。

上村猿丸・全松月・河之内実玉・牛渚春甫・上村都□

・東方莞爾・麻生目平・一長・久谷梅鶯・砥部龜鶴
 ・牛瀨梅邑・上村春榮・麻生つる女・上野一明・麻
 生茶石・全米里・八倉梅軒・水石・八倉松寿・牛瀨
 下
 祥・東方魯光・麻生和聲・上[□]櫻庭

奉納

※「可長」は大西良実。風竹とも号す。元治元年二
 月、牛瀨の旧家大西八郎衛門の長男として生れる。
 村会議員・県会議員。昭和五年十一月二十四日歿。
 慈雲院覚心実相居士。

(同神社には他に四額ある。一つは拜殿の外側にあつて
 全く字が消えている。一つは、大正乙卯冬日(大正四
 年)の、三十六句のもの、選者は桜僊。催主は松年(渡部
 龜太郎)、松籟。他の一つは、大正元年、桜仙翁還曆賀
 集。追加は松廻本聴水・桜仙。会林に如意・松籟。補助
 は竹雄・松年。今一つは新しく昭和五年四月、牛瀨大正
 倶楽部の手により、牛瀨の人四十一人の句があるが、大
 正以降のものについては詳しくは省略。)

額—52

船川神社額(上村)

(明治三十年「一八九七」、追加世外、縦四三・五セン
 チ、横二〇八・五センチ、五十句と追加一)

朗にあけ行空や千代の春

成美

わかたけに音なき雨のふる夜かな

上林花頭

種蒔にこよみの上にもみひとつ

静石

見る人のかすには足らずはつぎくら

上林喜月

ぬかあめのはれぬ裾野や雉子の声

清玉

時鳥なくやはれ行つきのかさ

都昇

野も山もわがものにして雪見かな

空一

絵にかいた様にはなれて月の雲

可泉

かすみから生みだす鐘や象頭山

水月

摘手から雫こぼるゝわかなかな

妙々

垣越に風[□]の案内や雪の暮

下林春月

月影を付て落るや桐ひと葉

都昇

何時くれて月となりしぞ雪の山

北方梅鶯

あと見ればまだ中程や雪のはら

春月

朝月のしらけて高し蓮の花

見奈良 桃 晤

松風の□□[?]をつむや竹のゆき

春山

あさぎむやめしたく舟の立烟り

水月

見かへせばうしろも花のさかり哉

清玉

桃のはなさくや書院の明はなし

花林

二度に日の久し^振なりはるのあめ

花頭

鶯のこゑ聞きながら朝寝哉

鹿 聲

凧のちしづかなる月夜かな

松翠

あさかほの咲かくしけりこぼれがき

桃 晤

節□□やわかい言葉をかさの内

清玉

正直はかほに見えけりとしをとこ

松 里

袖垣のふところぬくしかへりばな

春月

鐘ばかりくるゝおもひや花のおく

久 谷 亀 盛

万歳やうしろに高き米だはら

花林

せみなくやね心のよき裏野敷

杜 水

足もとのくらき花火の戻りかな

見奈良 宗 楽

はるの山名のありさうに見えにけり

清 玉

兒のとしをかぞへて雛のはなし哉

松 山 笑 ^固

掃除して置直しけり福寿草

上 林 梅 暑

白菊のいよ／＼しろき夜明かな

清 玉

拍手に打ちこむ梅のにはひかな

清 玉

山吹やとなり同志の^{もろひ}最合籬

成 美

五月雨や器にうつる菓子^の紅

下 林 春 鳥

からさきや夜半を告ぐる松のこゑ

何處となく風のくゞるや置火燧

おしかけて来たるでもなし大晦日

桐一葉秋のすがたの見えにけり

積みあげた軒の年木や家のとみ

客びきのいつはりもなき紅葉かな

□□に日は暮にけり秋のやま

行違ふ船もすゞみのもとりかな

山の香も海の香もありひなのまへ

酒賣のもみ手でほめる牡丹かな

□松をほめて戻るや鱒ひき

かすみかと思ふ小春の野山かな

鶏の尾に付てもどるや雨の萩

春月

成美

花頭

可泉

都昇

樹山

岳月

春月

羊角

水月

笠

都

春月

追加

どちらから

□□にやほめむ

月と梅

夢楽庵

※「夢」または「曾」とも見えるが、世外は松山の進藤氏、景爰、夢楽庵、宗匠、鶯居門、洗心庵の説あり。

會林

成美

世外

明治丁酉八月

※明治三十年

額-53

天満宮額(志津川)

(明治三十五年「一九〇三」、追加千蘿、百二十二句と追加一、外欠落九句分)

天満宮壱千年祭
 紀念奉掲四季句輯
 松竹梅詠込詠句百三十一章
 松前濱桂廼舎宗匠撰

頭	鹿笛の澄むや松ふく風の隙	北方	烏陽
式	不足なき春とハなりぬうめ <small>（やなき）</small>	上村	成美
	近よれハ松の木もある桜かな	大野	春清
	松に船繫く入江や朧月	堀江	風月
	日の匂まつのにはひや蟬時雨	北方	煤鶯
	若竹や雨かとおもふ葉の雫	村清	月
	連理なす尾上の松や若みとり	全	胡艶
	朧夜や棚田の梅の片明り	全	栄
	餌に飽て眠る鴉や松の華	全	胡舟

松はえた岩やいつしか苔の花	樋口	醉香
松か枝をすへる柳や夏の月	砥部	千圃
夕和風や松も紅葉のもらひ照	吉田	桃秀
老松の岩もかゝえる鳶のミチ	野田	馬雪
古木ても香ニ替りなし <small>（うめ）</small> 花	全	和水
門松やしつか伏家も奥床し	村花	蝶
雉子鳴くや曙つくる小松原	東方	里遊
ほらかな夜の明ふりやうめ林	平井	生柳
色替ぬまつも淋しき夕日かな	田窪	旭昇
雨の梅にほひハ幹に房りけり	野田	愿村
涼しさや竹の葉裏の露しつく	村可	光
水ぬるむ日は松風もなかりけり	大野	寿聲
朧の木に駒つなきけり花の山 <small>（ま）</small>	砥部	其雪

涼しさやまつ風通ふ柴の月

砥部 静月

永き日を啼草臥て杏の鳩

全 八木

松原に兔のねむる小春哉

和 水

青椽や子守連衆の秘密會

里 静

青梅や解けハ轉かる嫁の帯

久米 終昔

添ふてよし離れてもよし松の月

六 合

すゝしさや縁に満つ影月の影

大野 一筆

松風は竹にしつめて梅の花

村 晴光

降る雪ハふらせて梅ハ咲にけり

下林 春月

名月や岑の黒ミし松歳木

花 蝶

うめの月こゝろ詞にあまり覺(げり)

和氣 龜遊

まつ風は稍を退て本毎の花

田 窪梅曙

老松も床しかられて紅葉山

馬 雪

黄鳥(うぐひす)も口ほときけりうめ笑ふ

村 喜玉

大雪や凭れ合ふたる竹と竹

樋口 遊静

鳥の来て江り落すや竹の皮

砥部 一舟

松になき風にも戦く芒かな

松山 系※白

松の木の下ま(まで)追花のむしろ哉

三軒家 茂松

※「不」と同じ。

霧晴や領巾塵山の松の琴

久米 孤山

色は皆松にゆつりて(あき)焔の山

可 楽

時雨たる松に旭のさす高根哉

東方 松琴

老人の役とて梅を探りけり

壽 聲

松の琴浪の鼓や須磨の秋

村里 静

まつかせハ別に聞えて時雨雨

上野 一明

□□□こゝろに足りぬ朝□□

いろは

白梅や雪此かたの窓明り

牛 渕 春 甫

客乗せて出るや雪解の竹筏

東 方 草 文

ぬれ色に月八宿りて今年竹

指 月

嘗[?]過て□□かねけり梅の花

松 山 紫 岳

(欠落二句分)

(欠落半句分)

□□けり

高 井 漏 月

竹の雨午睡の夢を覚しけり
椈^{*}ありた夜から朧と成にけり

坂 本 水 石
晴 光

巢はなれて田螺^{*}養るや松の霍^(つる)

柳 玉

松葉搔く子の見出しけり初^(まづ)園

堀 江 步 鶴
和 友

※「求食」と二字として、「あさる」と読まず例あり。

松の内平生に^{*}冥る詞かな

田ノ窪 二 鳥

造作なく活けて床しき野梅哉

六 合

※「異」の異体

若竹に残るしつくや膏の雨

砥 部 文 龍

そよ／＼と風生出すや今年竹

六 合

畚の月けしき離れて明にけり

松 山 岡 玉

世は秋と改れと松の色かえす

醉 香

奈風のしはらく吹て初時雨

三軒屋 玉 泉

竹植てわたく^{*}□□を塞きけり

横 川 嘉 庭

うす暗き社にうめの明り哉

高 井 梅 月

のつと出る朝日に添ふて梅^(わら)咲ふ

花 蝶

誰そ来よと湯を泌らして松の内

北 方 玉 翁

松は木の男なりけり冬の山

茂 松

見古さぬものハ松なり雪の朝

三軒家 憑 六

風なきて猶かゝみけり雪の竹

高 井 如 月

もゝとせを又十回りや栞の花

晴光

しくるゝや松に吹込む風の音

上村雲志

植添えた竹の産出す嵐かな

天山

花したふ友や八幡の竹の焔

全岳月

松杉に風は譲りて竹の秋

津吉花遊

涼しさハ松にこそあれ記念石

天山

竹植て程よく雨を聞く夜哉

北方玄深

色暮ぬ栞のみとりや三保の浦

六合

梅咲いて琴の休ミの續きけり

野田喜和恵

垣結へハ祠の外もことし竹

村篠[※] 夢

竹を割る樽屋の檐や秋の風^(かせ)

松山里辰

早咲の梅も出てあり年の市

牛渕松年

千代を経し栞をからみて葛紅葉

味友

ほちくと竹の雫や月涼し

大野永楽

朝の棗唯ひとすしの匂かな

梅月

頑是なき児のほしかるや梅一枝

窪田久洲

山里や焔^(わか)のちからハ松にあり

可光

雪の花咲かせて竹をほめにけり

田窪東志

夜あらしの梅のにほひを廣げ覺

見奈良喜雄

梅さくや東[※]雲はやく神の森

津吉池楽

のつと出る初日の松や神路山

津吉愚鏡

静かさに勿たも知らず竹の雪

金山

鳳凰も松をはなるゝ枯野かな

晴光

簌中に社[□]ありて梅にはふ

恵桃

寒謀や雪の中から香の走る

榮華

蛸か家[□]飾れハ床し門の松

花蝶

※「空」とも見える。

※「ユタ」は「多」

松風も添ふて来にけりけりけさけさの秋

樋口友女

御手洗に梅の花ちるあらし哉

叡月

梅盗む人ハ知らぬかこの寒さ

堀江桂 磋

杖突た夜あかし松や若緑

芦月

竹植て又たのしみの殖にけり

呷水

梅か香や障子ひとへもなつかしき

椋鶯

松風をきく夜ハ軽き蒲団哉

田窪梅 曙

神鏡にうつりて清しうめの花

和水

たけの輪を大人も廻す小春かな

雪樹

杳咲いて詣りの多きやしろかな

野田柳雪

寒煤や埃りまみれの窓掃除(まじ)

勿論坊

蔵建る地築にめれて梅の花

松瀬川吉井

初虹や大竹藪のはつれより

梅本冬村

雪の積む竹にせかるゝ旅路かな

田窪盛貞

(七句分の短冊欠落)

若竹を洩れ出て清し夏の月

金山

文学ふ窓に親しや煤明り

風早一上

三日月や野分のおとの竹箒

西岡香風

神垣の梅に残るや春色

香風

老松や年重ねても若緑り

坂本亀石

永き日や歩行たすくる竹の杖

宮玉

千年の春を迎えて森の花

湖遊

天明にたてまつりけり煤の花

香山虚心

まつの華咲くや昔の城のあと

峰水

軸脇若松の空や舞ふ鶴帰るかり

松瀬川重松

追加

暖かや恩賜の御衣も御風入 千蘿 ※

※松前、玉井源七郎、久米藏長男、通称鶴屋卯兵衛、
羅翁、明治四十年五月一日没、八十五歳、大念寺
に葬ける
に葬る。桂麴舎、宗匠

會林

露口里正 末光可光
武智天山 宮倉宮玉
橘 金山 大西花蝶
焯田 栄

補助

和田和水 伊賀胡艶
岩川晴光

明治参拾五稔壬寅三月吉辰

(俳額の枠の左側に左の文字がある。)

願主 神野忠蔵

宮倉伊六

(この額が揚げられた時を同じうして、同天満宮に、松山市大字河原町、旭扇堂木和村利平が管公一千年祭のため、「梅一千句を奉納している。後掲。’)
右の額の欠落部七句分の板は、同所武智成彬氏が保管されていることが後でわかり、補うことができた。左に掲げる、

浮雲の掛りし松もみとり哉

水常

引残す窓へ散りけりうめの花

金山

若竹や末ハやさしき笛と弓

榮

世に不足なきにほひなり梅の花

山ノ内 叡(まゐ) 月

見る時ハいつとて寒し楳(うづ)の花

松枝

松一木竹も見そえて梅白し

牛 淵 花 績

竹の子や親は鄰(となり)の垣のうち

樋 口 武 智

黒住教吉井教會額

(志津川)

(縦三八センチ、横一七〇センチ、二十五句と追加一)

奉納 題鷹

人ならば神や祈らん※ぬぐめり煖鳥

※「温鳥」のこと。冬夜、鷹が小鳥を捕えてその脚を温め、朝、はなしてやるということ。

□□事なおもひも煖鳥

鷹鳴や小鳥離るゝ藪のうち

苦しさの晴た夜明や煖とり

潔よき物なり鷹の山別

鷹の眼のやうな眼付や□□□

徐に飛別れけりぬくめ鳥

朝鷹に連て来にけり一ト嵐

夫々の名ヨコレハありながらぬくめ鳥

狩鷹や鶴の千ヨコレ也も摺み取

□□ □□ や手柄鷹

凧し□□ □□ 鷹の飛

□□ の命 □□ ヨコレ 鳥

嵐かと思ふ□□ の鷹

放されておつく 飛や煖鳥

□□ 扱て有まし煖鳥

鷹の尾のひねり□□ し不□□

鷹据たテ□□ 掛た跡

□□ に尖き鷹の想鳥

舞行は手に汗握る鷹匠哉

和友

嘉松

勢柳

西岡 香風

村可然

全和水

全和水

村胡艶

全朝月

全里静

朝月

村藤翦

大野此友

鷹啼や人跡 獄の上

北方玄翁

新鷹や籠押フシやフシふる其勢ひ

全玄深

御狭山の神へ詣や鷹の聲

香風

な なり鷹野 揃

村哥月

新鷹の

北方玉翁

追 吟

鷹は西方東方へ飛やぬくめ鳥

願主兼

會林 渡部勢柳

明治 年 一月 吉良旦

(肝腎の選者名と掲額年とが消えて見えないのが残念だが、掲額年については、出句者たちの活躍の時期が、明治十年代から三十年代にわたっているもので、そのころのものであるのは間違いないとしても全員の没年までは未調査であり、仮に中期としておく。)

額—55

黒住教吉井教会額

(志津川)

(明治三十五年七月、一六五句、追加千羅)

奉納

誥句百六拾五組中

拔萃玉芳如列

桂廼舎宗匠撰

透逸 青くさき樹々の夜風や杜鵑

神崎又玄

深梅や雪にこもりしうさ志

高井漏月

美しくう花と見ゆるや秋の草

齋院孝誠

朝雨の乾きもはやし春の風

東方草文

遊ぶ事のミに追ハるゝ睦月哉

松山松樹

雪な やをりく磯に忘なみ

又 玄

山道の落葉二足の勞けり

蓬 生

薄月や露の重みを亂れ萩

大 間 湖 月

定めなき日にさためあり大晦日

窪 田 久 洲

雪餅氷のうへをはしり（けり）覺

塩 屋 蓬 生

置くや霜焚捨てある灰に（まじ）迄

古 泉 櫻 雨

しらむ夜や梅に消こむ月の冷

大 野 永 楽

はつ潮や小海老飛こむ蟹か軒

上 村 成 美

消のこる雪は古ひて初日の出

馬 木 義 勇

楳は葉となりて黄鳥老にけり

神 崎 長 翠

ぬれましとして雨浴ひぬ挿柳

高 井 亀 鶴

暑き日や鍛冶の飛火の色薄き

水 泥 春 水

春の野や枕のほしき草の上

久 谷 亀 翁

筏士の白眼て居るや雲の峰

当 村 柳 雪

霽るゝ空見せて降りけり五月雨

上 村 岳 月

揚雲雀見てとけにけり笠の紐

牛 瀨 單 枝

鶴の巢を見上る松や草もミチ

横 川 嘉 庭

大霜や捨てた火からに立けふり

古 泉 柳 川

※他の額には「見奈良」とあり。

八方へ見ゆる燈しや夏坐敷

志 津 川 晴 光

露ほとこの重ミは見えす萩の花

石 亀 石

はつ雪といふ間に樹々の雪かな

当 村 松 哥

鹿笛や遠音をはしる風の筋

垣 生 花 垣

何處か根の霞はしめそ竹生島

北 方 玄 深

明易き夜を とるほたに哉

三 津 湖 石

花とちり珠とこほすや萩の露

河之内 涼 社

さみたれや水の中から水もらひ

畑中楽山

かすみたる儘に夜に入る白帆かな

漏月

焼残る古葉の下や萌る草

高井紗月

蓮の露鯉の投餌に蹴り

長洲

名月や竹の葉先に登る露

松山蒼林

腰低う茅の輪潜るや相撲取

松樹

支川に枝さしてある柳かな

垣生春陽

長閑さや船て二階の口すさみ

塩屋南坡

夕立に込た在所や蟬の聲

上村花林

※
啞と知る話しも聞きて春の雨

高井蕉青

降る音も優美し若葉にかゝる雨

当ノ村タ原村

近道の橋と成けりくすれ築
(やま)

晴光

島としま繋いたやうに霞けり

水泥彌生

寒けれど春ははるなり春命
(うめやなぎ)

當ノ村タ馬雪

降るよりも寒し高根の雪おろし

北方梅鶯

五月雨や屋根にも麦の自然生

井門郡境

あふなけな岩をすへりつ啼く水鶏
(くひんこ)

松前無號庵

冷麦や客もてなしの貰ひ水

神崎梅月

枯葛の下から瀧の水柱哉

漏月

落てまで色をさまな椿かな

梅ノ本一月

膏闇や垣根に虫のすたく声
(よむ)

当村榮月

踏込んで濁らぬ水や種浸し

志津川志楽

春の山河地向ひても笑ひけり

長洲

白菊に押立られて夜の明る

當ノ村タ花月

吹込んで板間に踊る霞かな

梅本友花

岩穴を鴉の覗くしほ干かな

平井生柳

花もりの草臥なほす若葉かな

上野一明

草の戸を隔てぬ虫の高音かな

當村^ノ壽松

千鳥鳴く岬に高きけむり哉

徳丸赤哉

竹の子や京てはなるゝ嵯我の露

南坡

抱た児の上はかり見る日傘かな

壽声

子の機嫌とるやぬたの片手打

見奈良桃晤

すへりても⁽¹⁾江りても岸の蛙かな

當村^ノ櫻友

〔^(かり)〕啼くや月に餞よむ渡し守

出作亀遊

火のついた⁽²⁾烟管⁽³⁾啣えて午睡哉

齋院⁽⁴⁾千雀

鳴く⁽⁵⁾は居るともしらすゑた蛙

梅鶯

聲かけて行かふ舟やおほろ月

上野長樂

雨の日は未だ底寒き卯月哉

大野壽聲

牛に乗る里の童子や桃の花

長洲

水草の露にまかふやはつ蛩

北梅松香

聞馴た声てめてたし初鳥

下林春月

蝶ひとつそえて置たし冬牡丹

柳雪

虎杖や炭焼く山の爰かしこ⁽⁶⁾

原村

風も寝た夜なかの空や荻の聲

涼社

永き日をなかき涎や車牛

壽松

垣越しに風呂の案内や麦の秋

宮下郡月

海見ゆる山を見に行く日永哉

齋院湖舟

若竹の風やわらかに戦きけり

松山梅林

糸遊や洗ふた絹をほした竿

馬雪

生壁に吹付けられな秋の蝶

原町目平

我をうつ豆やはしらの打もとり

高井水月

積む雪の降る夜は風もなかりけり 山之内 叡 月 魚飛んで細く波涼し雨の霄(はれ) 全

管弦のおとしつか也青簾 志 楽 齒に洩るゝ賣聲おかし子燈心 坂本 水 石

散た花掃いて淋しうしたりけり 志津川 芦 月 二階から涼しき嘶おろしけり 志津川 胡 艶

勲のつきぬ石碑や苔の花 垣 生 霞 舟 大明りもつや芒の薄月夜 當村 一 風

白魚に透いて見ゆるや砵の瑕※ 柳 雪 五月雨にしめらぬ聲や江の蛙 志津川 花 蝶

※字はこれに近いが「鉢」のつもりだろう。

夕立の庭に湯気たつ盥かな 東 野 一 悦 瀧の糸縫た羽色やぬれ乙鳥(はつめ) 目 平

昏るゝのハ鐘はかりなり雪の里 生 柳 犬吼て見返す門や冬の月 志津川 湖 舟

夏の事いふや寒さの門の川 上 野 一 遊 足音のすれハ鳴止む河図哉(かはづ) 牛 洩 松 年

咲出すとはや曇けり山さくら 松 山 苔 翠 話消すあとの笑ひや火取虫 北 方 玉 翁

水に居て雨に出さかる田植哉 牛 洩 春 甫 水洩の落て乱るゝ會釋哉 北 梅 冬 村

負た子の背中おひけり(はだか) 志津川 和 水 拍掌の もつらぬく(は)かな 高 井 竹 春

謡らはて月見て居るや獨酒 當 村 愿 村 花の空雨には遠く思ひけり 斎 院 紫 石

雁の聲覗くや闇の天津空(あまて)

津吉花遊

水音もまじる遠音や小夜礎(こよた)

出作松翠

子も連て来た様子也 か奥?

砥部文龍

夜終や岩打つ浪と鳴く乳鳥

久米孤山

藻汐焚く烟に薄し夏の月

梅鶯

戸口まで来て行過ぬ初玄鳥(はつづ)

高井如月

鯨突く海と八見えす小春風

長洲

雲誘ふ風の運びや神の旅

塩屋秀紅

春を待つ斗(はかり)にしたり青疊

柳雪

黄鳥(わんじす)の聲にかたむく鳥帽子哉

松山一翠

初花やまた底寒き朝の風

大野春濤

出代(でがはり)や京の言葉を郷土産

柳雪

最(も)う花に飽しか莖を啄く鳥

斎院霍孫

酔かはす手製の酒や冬こもり

當村嘉和恵

音もなく満来る汐や春の月

南海梅山

あたゝかに成けり梅の散てより

上野多松

此木には觸るゝへからす八重桜

牛淵双洲

暮る花おしまぬ者はなかりけり

秀紅

鮎釣の竿にとまりし蜻蛉かな

當ノ村ヲ玉心

乳もらひの日傘廻して歩行(けり)

東方松琴

如月や寒さの見ゆる水の底

砥部一舟

留主守のるすと答えて納涼けり

喜和恵

風を着たやうな心地や薄羽織

東方里遊

蚊も蠅もをらぬ峠の午睡哉

榮月

神垣やさくらもミちと榎紅葉(つゆ)

吉田桃秀

濡たまゝ昼飯を喰ふ田植哉

志津川さかえ

黄鳥や左右へ捲かす駕籠の垂

目平

灯は虫にとられ俣なり庵の月

高井梅出

茸狩や見て来たやうな誘ひ状

原村

春雨や柳のしたの繋ふね

東野逸悦

咲く花に老木若樹ハ無り(けり)

河之内 涼橋

舞蝶やうれし野に人沖の人

玉翁

若草や野飼の牛の放ち俣

牛淵 花績

著とれば膳に置けり筆※つはな

津吉池楽

袖振るな障るそ芥子(ひし)の一重咲

北方 太甫

取落す手鞞轉かる氷かな
※「つくし」の異称

玉翁

うくひすの初音に惑ふ碁の手哉

志津川 和友

ほつくと蹄のあとや花董

馬雪

糊刷毛に付いて鳴けり冬の蠅

玉心

(ほうち)子子や米研く水の溜る溝

全

雨も未た乏し土筆の長みしか

馬雪

山寺の料理時めく芽独活(うど)哉

津吉愚鏡

稻芥の其俣拜む御幸かな

斎院 湖舟

橋こしたとろく坂や女郎花

玄深

燈ともせハ動くやうなり飾海老

水石

氣のつかぬ袂をそむる覆盆子※(いちじ)哉

大間清泉

長閑さや舩の鼠も人馴るゝ

北方 白扇

※「とつくりいちじ」のこと。

梅鶯

幣をふる度に匂ふや花榊

出作 道楽

是にさへ夕栄のあり薮柑子

梅鶯

受る手に慈悲の繰るゝ施米哉

壽聲

水際へ菰をならへて御杖かな

冬村

杖笠は備へもの也西行忌

晴かけてくるゝ野山や秋の暮

人招く紅行灯や西瓜塵(みせ)

福引は慾のなき子に當りけり

まつ風と水音高し里神楽

空もその色や紅葉二日の昏るゝ

仰き見る不二未た寒き初日哉

大尾 雲脱て心に足りぬ星逢ふ夜

追加

ねかつけは神風、涼し朝まふて

南吉井村大字野田

會林 牧 愿村

八塚喜和恵

松田 壽枿

松田 冬村

八塚 馬雪

千蘿

梅 鶯

冬 村

志津川 金山

長 洲

則之内 清谷

亀 鶴

北 梅 竹 堂

神 崎 梅 月

願 主 野田 新村

※ 明治壬寅文月 講 社 中

※明治三十五年旧七月

額-56

北野田飛梅天神社

(北野田飛梅天神社に半分以上薄れてしまった額がある。明治三十五年素秋。八十句のもの。會林は馬雪・冬村・喜和恵・寿松・□村。願主は渡邊孫次・牧邑□郎。他の部分は見え難いが、下ろせば三割くらい読めるようである。)

(同社拝殿の外側に二額あり、一つは明治□□年庚辰掲額のもの。年号の□□が見え難いが、明治の庚辰は明治十三年しかないから、十三年にほぼ間違いなからう。他は見え難い。他の一つの額は、更に字が見えない。)

※「素月」は陰曆八月の異称

黒住教吉井教会額

(志津川)

奉納 四季混詠片歌
一万吟中拔翠一百章

常陸国田月庵宗匠撰

石楠花は岩をしたゝる水の味

松山 李瓶

朝白やまた有明の片あかり

大野 寿聲

一足も無駄には踏ぬ田植かな

大野 一 葦

木枕に寝覚かちなり霜の宿

大野 壽 聲

玉と成ほとは夜もなし夏の露

鷹ノ子 志晴

人こゝろ雨に揃ふて田うゑ哉

志 晴

姉ははや夏瘦のミてなかりけり

育院 紫石

鴨の聲降らねは氷る夜也けり

神崎 長翠

着せて見て妹に譲る袷かな

松山 一走

掌に握りてあまる落穂かな

高井 漏月

さら／＼と葉分の風や稲の花

大野 永楽

出たなりに雲の動かぬ暑かな

平井 生柳

我影のわれに馴染て冬籠

南梅本 梅 遊

撰むつきものは友なり月と梅

神崎 梅月

ひる白や砂のはめきの顔へ来る

平井川 生柳

こゝろにも花咲けふや福寿草

大野 寿聲

稲刈やつ／＼く日和を花こゝろ

大野 湖月

着て三日はや帷子も軽からず

浄瑠璃寺 水石

柳ふく風も重たし入梅くもり

南吉田 桃秀

南吉田 桃秀

南吉田 桃秀

賑ハしきものは煙りよ雪の里
神崎柳雅
何よりも梅に目のつく花見かな
柳雅

山冷をさそふて暮るゝ紅葉かな
大野寿聲
降て行雨脚白き夏野かな
土居清

夕立や落合川の片濁り
水 泥 彌 生
蚊やり火にくもるや京も片ほとり
鷹ノ子 可

藪入や親に土産は無事な顔
大野永楽
菜の花や鳥羽も伏見もひと曇り
久谷梅友

中高に湛へて白し月の海
松瀬川重松
両親は家の柱や門のまつ
川ノ内涼杜

笑ふ子は抱人の多し夕納涼
西ノ岡香風
咲たれは花の重なる小菊かな
北梅松

楳(つゆ)に月さえた鼓の聞えけり
松山蒼林
物影の薫るはかりや初月夜
吉田桃秀

さしたのも春に後れぬ柳かな
新村柳雪
節季 やわか大 ハ知らぬかほ
平井生柳

寄る門は馬もわすれぬ新酒かな
三津谷
草の葉に秋また暑き埃りかな
大野春濤

人聲の野に暮のこる弥生かな
神崎梅月
よひ足らぬ笥の水や蟬の聲
大野一

明た戸の用は忘れて月と梅
神崎梅月
さし花の名はわすれても翫かな
水 泥 琴 嘯

咲満て葉組の替る牡丹哉
古泉桜雨
とちらへも帆のきく風や春の海
水 泥 寿 玉

並へたる膳の光りや明のはる
水 泥 春 水
鐘の音も誘ふて来るか暮の鴨
松 山 二 葉

花守りや叱りなからも子供好	大野 濤 聲	うくひすの啼かためたる日和かな	砥 部 其 雪
鹿啼や岩をたよりの片庵	南梅本 梅 山	谷の戸に臼とる音や五月晴	大野 春 濤
鳴りやんで明るうなるや冬の海	松 山 菅 翠	寝っ起つ□ [?] しまいふとる鹿の子哉	駄 場 竹 堂
山茶花や鋏の音にたつ雀	三 津 素 啓	板の間や茄子よむ音轉ふおと	松 山 一 走
何事も笑ひになるよ松のうち	三 津 花 朝	帷子やくるりと廻す帯の音	井 門 硯 志
都にも名ある築地のやなきかな	北 梅 静 遊	花咲ぬ木もうつくしき八月かな	高 井 漏 月
蝶飛やこゝは寿永の夢の跡	松 山 儼 榎 堂	青からし物に障は無りけり	平 井 生 柳
干梅のきらつく頃や雲の峰	大 野 寿 聲	終日斧のこたまや眠る山	畑 中 樹 堂
手を突て明る一間や菊かをる	津 吉 秋 月	二つ葉の大根畑やわたり鳥	古 泉 榘 山
つゝるそこはうれしの森や放し鳥	三 津 鹿 甫	畔道も埋むはかりや稲の出来	柳 雅
涼しさのや黒住教の鈴のおと	大 野 永 楽	柴船の霞のせ来る入江かな	志 津 川 晴 光
すゝしさや庭木へうつる夕ともし	神 崎 梅 月	しら魚や笹にのすれハさゝの色	西ノ岡 香 風
傘に手こたへしたりほとゝきす	土 居 一 素	足らぬのも目出度秋の蕙かな	西ノ岡 香 風

初汐やほのくしらむ巖島

畑中樹堂

藻の花や小海老の^(はた) 刃る石の上

古泉 知学

菊咲や挽茶の匂ふ障子越

駄場青甫

花まては遊ぶこゝろや冬籠

河之内 梁山

虫賣や常の渡世は竹細工

平井谷青木

初霜と知るや畳の足さはり

上村成美

咲花にけふもからるゝ座敷かな

南梅本梅山

今はれた雨のにほひや若楓

平井生柳

白蓮やしのゝめ近き水明り

久米孤山

群れたつた跡にもものこる千鳥かな

下林春月

茶の花や名高き寺の大手かき

吉井芦邨

茶の花の匂ひや朝の物しつか

古川竹翠

遣水に夏菊匂ふ垣根哉

駄場竹堂

秋深き色を見せけりからす瓜

久谷梅友

茨の実のいつまで赤き枯野かな

吉井芦邨

白露に

下林春月

許されし朝寝も出来て松の内

斎院紫石

懸乞やこゝろ易は常のこと

古泉櫻雨

みとり子の気に入ものよとし男

吉田桃秀

水霧のはなれぬ里や啼水鶏

古泉桜雨

残菊の夕日に匂ふ垣根哉

椿山

萩の戸や昼も乾かぬ鞍馬石

松山 置翠

降る雨も頼ミに花を待夜かな

上林花林

新らしきの匂ひやはるの月

砥部和水

さら／＼と稲に実の入あらし哉

野田馬雪

山にむくひとつ戸口や秋の暮

神崎長翠

富士を見る目に糸遊のかゝりけり

松山菅翠

福藁や見事にわたる日の光

大野寿聲

追加

音もなく降や

七十四翁

木の芽の

峰居

誘ひ雨

印
印

會林 當郡小野村

大野町

渡部 春濤

同

永山 永楽

同

宮内 一葦

同

宇高 壽聲

西ノ岡

山内 香風

平井川

重松 生柳

願主

小野村字平井谷今吉組

青木好五郎

山内浅次郎

高市百太郎

高市 藤吉

明治三十六年終夏吉祥日

町外俳額

額一 3

住吉神社額

(久万町畑野川)

(安永五丙申秋、百句、五嶺評、会林晒来・巴扇・烏十)

人嗅(か)ひ麓の風や山桜

畑中※筭車

※筭は算と同じ。筭車は、友千鳥・川上神社蔵文書等には志津川となっている。

水打夕草をちからや夕すゝミ

吉井女一

大雪や雲見の客の使なし

牛淵通意

夜は山の裾から明る桜かな

畑中筭車

直(ま)の手から百度の落葉哉

西ノヲカ湖青

置霜や芦火押ヘル軒の音

牛淵鷺踊

躍子に除さす奴踊かな

牛淵兎拝

世の人に張ひち見せぬ柳かな

牛淵兎兄

額一 4

八幡神社額(高井)

(天明六壘穴秋無射※1吉辰とある。五十句。葛錦舎和扇の追加がある。※2芳林は梅里・亀白・五名の三名。天明の額にしては、墨色が鮮明である。松瀬川・川上・三津・苔谷山・土居・松山・川ノ内・徳丸・松前・神崎・京都等から句が寄せられている。)

※1「無射」は旧九月の異称。

※2「山乃」は會の古字

初鷹(か)やほのかに聞ゆ神おろし

楚雀

柴入は雪折添ふて土産哉

田ノ窪里瓊

芽柳や日(ま)に俯向神の前

里瓊

こゝろあるや春の名のミを帰り花

里 瓊

鶴立て一枝青し松のゆき

上 林 桃 下

更行や秋の底きく篠のあめ

桃 下

額-10

三島神社額(麻生)

(拜殿内東上、文化十三年、追加の場所に「五富再拝」とある。五十句。)

額-19

川上神社額(川内町)

(肖像入り五十句の額、萬延元年、遊舟堂及び源々庵撰)

夕立や水の中行水の色

田 窪 文 孝

遣水のすむまで洗ふ硯かな

見 奈良 宗 居

涼人を横眼に見るや筏さし

見 奈良 巴 泉

山吹や恵心寺坊も健?し

ミ ナラ 左 叟

水まちの雲ハなかれて月さやか

田 ノクホ 寿 井

賑やかなものや小春の紺屋町

見 奈良 花 樵

朝かほのねしめ戻るや玉櫛化

ミ ナラ 湖 雲

鳥の来て蝶はまた見す初(ついで)三九良

牛 フチ 醉 園

額-17

金刀比羅宮額

(久万町上畑野川)

(安政三年仲春、追吟鶯居、百句)

年の市鶯買てもとりけり

田 窪 鶴 水

行よふに船から見ゆる案子かな

上 林 不

常盤木のぬれ色かへて今朝の春

見奈良 久楽

慇懃にして八眼たし花の雨

見なら 花樵

陰ハ皆松とも見るや夏の月

田ノ窪 二見

長閑さや霍(つゆ)の居眠る磯の松

田ノ窪 笑山

からかさ(か)に手こたへのする霰かな

見奈良 花染

鷺や洲に懸たる声の橋

田ノクホ 岱梨

雪と見て飛(けり)て知れ鳧池の鷺

見奈良 巴藤

味さふな雫(しづ)持けり蕃椒(とうがらし)

田ノ窪 鶴枝

日のさゝて□□風情や谷の梅

牛 淵 扇 二

菊提て来た手の匂ひ香りけり

田ノ窪 花遊

吹寄せたなりに藻の花咲にけり

み奈良 里石

暮るまで石ひくりや蕎麦の花

牛フチ 古淵

月の橋海に懸りてわたる膺(か)

田ノ窪 蝶月

額一21

鹿島神社額(北条市)

(元治二年称生、追加笑語亭雲岱、願主喜朝、一〇一句)

柳さへ風のはふらぬ暑さかな

牛 淵 扇 二

賑しう思うて淋し魂まつり

田之窪 湖鏡

出る日も入る日も淋し枯野原

牛 淵 扇 二

茸狩やまた降残る松の雨

田之窪 枕石

草も樹もしらぬ風有扇かな

田之窪 枕石

額一28

雄郡神社額(松山市)

(明治十三年十月、和吟鶯居、世話係雨泊、九十八句)

欠落部あり。

葉さくらの朝こゝちよし臂まくら

志津川 晴光

降物のしなかはりけり神無月

志津川 干静

夜までも麗さうに海の果

志津川 胡艶

名月をいつも靈とし松の上

志津川 歌月

額-29

金刀比羅神社額

(松山市新立)

(明治十四年青和、撰者半憲、會主龜柳、花山、補助蔦
廼舎)

※四月の異称

餅花にはやし小窓の朝ほらけ

志津川 干静

鶯や小倉のさとの朝けしき

志津川 胡艶

親船に客一はいの月見かな

志津川 晴光

花待(ふせ)や林の茶屋の青畳

志津川 里静

炭うりの聲からし行ゆふへ哉

龜泉

はしり行人に日のさす時雨かな

田ノ窪 龜泉

雲わけてすんくくと登れ不尽詣

志津川 和友

額-30

城山神社額

(松山市東石井)

(明治十四年九月、追加蔦の舎雨泊、一一五句) (句の
上の番号は俳額の句の順)

91 炉ひらきやぬしの馳走の貰ひ水

志津川 和友

68 子の智恵の届く梢やかかり風

樋ノ口 龜泉

62 佐保姫のくらへ物也不尽筑波

志津川 里静

41 松は月桜は己の明り哉

志津川 其静

39 めてたさを船へ積こむはつ荷哉 志津川 晴光

37 朝嬉し夕栄うれし菊の花 志津川 いろは

14 御鏡にうつるは笑ミかいねの花 牛 洩 素雲

3 とハるゝも問も旅也花の山 志津川 胡艶

額-34

松山神社俳額

(松山市道後)

四季 奉納 壹萬五千餘集句 発句

(明治十七年一月、四時園其戎選、百句、会林、鷲泉、古柳、桐鳴、松旭)

たな引たけふりも青き柳かな 下林 春月

わかき名のはなやゆかしき兒子桜 上邨 清玉

薬玉の匂ひうつるや化粧ノ水 野田 天神

身の花をさかひに出たり雑魚寝の夜 田ノ窪 一志

雷の陣やこふしを握りつめ 田ノ窪 自稱

はつしもや藪越し見ゆるしほ明り 野田 天神

瀧のいとひと筋つゝにこほりけり 下林 春月

曲鞠に身をかわしたる蜻蛉かな 野田 二春

した枝八百舌のさし餌や帰りはな 田窪 天蘭

心から備尊しけすりかけ 田窪 一志

額-35

総河内神社額(川内町)

(明治十八年孟春、全七十一句、奉納四季発句、追加撰者困阿、會林陽柳、花眠、涼杜、一石)

松杉は眠らぬものか秋の声 下林 ○(まろ) 八

(ヨゴレデ見エヌ)

春雨やとまりし客に起さるゝ

西岡村 龍月

鮒汁をくらへと船に繋ぐ船

西岡村 素石

(縦ノワレメデ読メズ)

やま吹や汲ても見たき水の花

田窪村 文敬

十六宵の心に高し東山

志津川村 不老

稲垣や近隣の見えぬほと

田窪村 其玉

遊はるゝ程の友あり春の月

志津川村 晴光

春鳥の置画なかめて冬籠

西岡村 香風

しる人の名を呼声や木下闇

同

額-44

金比羅寺観音堂額

(川内町)

(奏奉納発句題四季、明治二十三年初秋、追吟雲路園百壺、会林寒山居翠湖外二名、補助二名、願主渡部衆平他一名)

初空や人に逢[?]まで神代めく

野田 古處

夫だけに日はまた絶ぬ柳かな

下林 春月

さして賣る紅も水なり心太

田窪 一志

我門之山の影ひく□□かな

上邑 都昇

十月や山から明て啼からず

全

花の香に曇る日もなし梅林

野田 和水

額—48

宮内天満宮額(砥部)

(奉納、故蛙庵五虹追悼会俳諧之条句十句詰一句撰、追
加涇翠居青菱、会林発起人天野知規以下十三名、明治二
十六年八月、全九十一句)

なき人のとふかや塚に飛蛭

上林 月 秋

額—50

宮内天満宮額(砥部)

(明治二十八年七月、逐加碧水園桃陽、会林一角、柳
泉、春水、九十八句)

春の夜の夢やそれさへ花の事

上林 月 秋

額—58

白山神社額

(川内町滑川、郷)

(明治三十九年四月十日、百句、逐章阿波国、陽嘉園昇
浦、三・九メートル)

うくひすの来ると□庭の掃除かな

西岡 香 風

華の雨最合傘して通りけり

(小田町立石神社の奉額に、文政二年九月、追加海老洞
五富のものがあ、中に「田ノ窪、二橋」の句がある。)

(大三島大山祇神社の掲額の中に、明治二十一年四月吉
辰、四季混題、壹万余集之内拔萃壹百章があり、「松静
・西ノ岡香風」の句が出ている。)

句

集

町内句集

句 - 4

子の日の松

(和綴、縦二十センチ、二十五枚。木版。弘化二年、相原二頌(蛙葺編。)

(表紙)

子の日の松

(表紙裏)

(県立図書館の俳諧文庫本には、故西園寺源透氏の筆で書入れがしてあり、参考になるので、「」を付して載せておく。同じく朱で書き入れされた所は、『朱「』として掲げる。)

「代表句 蝶々や高ふ遊バぬ身の安さ

石碑に在り」

「二頌小傳

富水文庫

相原氏、名ハ経當、通称善兵衛、俳号二頌、浮穴郡牛瀨村ノ里正也、資性温雅風流ヲ好ミ発句ヲ善クス嘉永三年三月廿三日病歿ス、年七十四、法号仁而道篤居士」
(現在牛瀨にある二頌の墓の向かって左側面に、さきの源透氏(富水)が代表句とされた句が刻まれてあり、句の下に蛙庵二頌とある。なお墓の表は、二頌の法号と並んで夫人の「義光妙心大姉」の法号が彫られてある。)

(1才)

吉井の郷なる蛙葺の主

ことし古稀の賀なりとて此

集を編してはし書をこふ何

をか言んや細石の巖とならん

末久しく生の姿はら生な

らへて千世萬代に栄かしと

(1ウ)

祝ことほき待りぬころハ弘化

二の秋也けり

朱「松山一ノ家老奥平弾正」

鶯居 (聴雨)※



※梅滴齋(庵)、鳳朗門、文化六年三月十七日生、明治二十三年八月二十五日卒、円満寺に葬る。

色替ぬまつを 契りや老の年

(2才)

「星野好義」字敏邨

寿 (大きく一字書かれてある)

「星野氏」

(2ウ、3才)

(十六人の句座の絵) 「矢野随意」朱「権九郎」

(3ウ)

(引かれた小松の絵)

(4才)

七十の春をむかへて 朱「牛淵相原氏」朱「蛙庵」

よる波の皺ものひるや小松曳

二 頌

霞うれしくひらふ眞砂地


「高市理兵衛」

亀毛

かなに啼ひな鶯をほめられて

「豊鳴源左衛門」

樂聖

捲けは上手とわらふ  ?

「牛淵、二頌ノ男相原善」五兵衛

素兄

※俳人録には「與(善)五兵衛」とある。

との作りすらりと照らす月の影

「田窪」朱「下林カ」 「小山義一郎」※

樵子

※俳人録には、田窪、外山義市郎、庄屋、慶応三没とある。

眼のとくくまで十分の秋

「花山民五郎」

二 春

(4ウ)

風穴のあれハ冷つく山のはな

「伊左エ門」

野水

四五年あとの暦たつねる

「傳右エ門」

二 丈

笠縫ふもわらふて参宮の下こころ

「森傳右エ門」

示牛

きこへぬ耳をせゝる商売

「立花甚七篤好」※

扇 二

ミつうみちかくすへし仏像

〔柏新五右エ門〕

雨 柏

反はしのなかはは月のほそくと

〔谷脇惣太郎〕

夏 昇

ちるなど萩に立添る杖

〔大西三省〕（牛淵）

二 芳

（6才）

足音かすれハ蝨（いそ）のふるととひ

〔武智對馬〕

可 調

おさなきものゝ年思ひ出す

〔齋藤勇三郎〕

志 随

※¹ 供まちは皆咄すこと跡やさき

〔原町、二宮十右エ門〕※²

古 綿

※¹ 供人が主人の訪問した家の門口などで、その帰りを待つこと。またその供人。

※² 俳人録には二宝重右エ門、宗匠、慶応三年没、七十二歳とある。

壁の崩れを隠す盛砂

〔砥部、後藤龍伯〕

鶏 里

住の江の岸にさく花神さひて

〔宮内天神社、高市伊勢〕

二 貫

亀も遊ぶや春の滄海

〔北河原〕〔東村新五兵衛〕

千 鶴

（6ウ）

（記載なし）

（7才）

月雪に久しき友や宿の松

朱〔松山〕〔菅沼田露〕※

萬 井

※松山、藩士、笹廻舎、菅沼平兵衛、弘化三年八月廿一日没。

いつまでも盛りたかへな菊の花

〔白川佐、右衛門〕※

芝 堂

※松山、百七十七石、馬廻。

ちとせ経て蓋とれ露の玉手筥

朱〔松山〕〔榎山彦左エ門〕※

鶺鴒 居

※松山藩士。

しら菊や齡をかさす花の綿

朱「」〔垂水忠蔵〕※

麦 年

※俳人録に、松山、大小姓五十俵、時雨庵、菱々庵、とある。

いく秋も活ぬけらしや月の人
朱「#」 「矢野権九郎」※
随意

※俳人録に松山、矢野権九郎、画家、文久一没、蓮
禪寺に葬る、とある。2ウの絵を描いている。

小春なりいさ竹馬にむち打ん
「岡村重兵衛」 (松山)
黙夫

千代までの齡ひ経ぬらん放し霍^(ア)
朱「松山」 「樋口茂兵衛」
庭里

※松山藩士、千草庵、可久時氏。

寿の眉に置けり月の霜
(松山)
呼水

(7ウ)
年毎に増る匂ひや菊の花
「武知八十太」
里鳥

松ふくや富士を見返す[?]□へり
朱「松山」 「岡田屋廣藏」※
葵笠

※河原町、岡上広藏、涼蟬亭、一に岡田(鳥)屋古
藏ともあり。嘉永項。(俳人録)

小わたりにをとの一所や芦の角
草羽

霜年ハならぬ木ふりや磯の松
朱「松山」 「播磨屋半兵衛」※
鳥岬

※松山魚町 吉永、蛸壺、「ちなみ草」を刊行。
(川上) 帰鷗

見渡しの松に旭やおろし鶴
朱「松山」 「岩田屋政助」 (松山新立)
膝に手を置いて誉けり福寿草
民芝

梅かゝや旭をまねく老の杖
鷺谷

亀の屋の緑もすゝし九十九髪^(ア)
「尾崎喜平太」 (松山藩士)
岱眉

(8オ)

日々に見ても新しうめの花
「宇和川清長」
三和

はるかにも鶴の眼にたつ青田哉
朱「松瀬川」 「玉井傳六」※
非玉

※庄屋、五尺庵

機嫌よう遊ぶを役の残花哉
栗壺

古稀墨の雨にも散らす花の札
朱「川上」 「及川玄安」※
素居

※東方渡部家に伝わる「よひの夢」の第二の百韻に
もある。

涼しさの風情くらへる扇かな
「高須賀安右工門」※
茶山

※竹ノ鼻の熊野神社額の奉掲者。

どちらへも枝のさし出て梅の花
「宇和川傳左工門」（須内村）
吐雲

うくひすや老て猶ます聲のあや
「北方、重松弥次郎」※
木人

※俳人録には「松山」とあり。

たのもしき色や南の山の春
「則之内、宇和川仁平太」
朴人

(8ウ)

稲妻や徹葵[?]に遠き水の音
「川上渡部喜一郎」※
玄來

※俳人録には「渡部喜一」とあり。

楠のくちむ限りや君かあき
「スノウチ高須カ伊平」
卵支

左義長にけふたさう也渡し守
「北方 江戸貞蔵」※
志流

※俳人録には「江戸貞次」とある。

伐込て餘處のに早し梅の花
「川上 坂本民平」※
茂松

※川上神社奉額者、坂本民平公隆、鍵屋、茂松

新入が出来た様子やうたひ初
あと連を日かさて招く木影哉
「南方渡部庄吉（八幡屋）」※
米谷 蘆村

※温泉郡南方、渡部長積、八幡屋庄吉、又定吉、桃の舎とも号す。

風と日のかはるくや草にしき
朱「河ノ内」「近藤林兵衛」※
五揚

※通称林内初め林兵衛、名は是正、湧翠舎、清翁、五蕉門人、文政元年正月二日生、明治廿一年一月四日歿、七十歳、川内町史にもあり、川内町金刀比羅寺昭和三十三年追福の俳額あり、下林片山神社明治十五年額等の選。

つゝしみもしらぬ白也神の馬
朱「リ」「近藤（新宅）」
吾暁

(9オ)

雨の日も捨[?]られもせずはつ乙鳥
「近藤」（川之内の人）
巴人

牛買て秋むつましき親子哉
（松山）
梅夫

きりくす鳴や小寒きゆかの下

藤 □?

かいわるに稀な大木の若葉哉

「則之内、野口」(神職)

杉 蔭

鶯を聞てかふるや竹の雨

「南方 渡部次郎」※

因 是

※「ちなみ草」には「二郎」とある。淡々糸。

「南方か 渡部与五左衛門」※

見所は老木の事よ桜花

芦 錐

※故星加氏は「佐平太」だろうとされている。(伊予川内の俳人、渡部因是、因阿、芦錐)

「志津川武知傳次郎」※

のかくくと鶴ハして居る師走哉

蘆 岳

※中清、米田屋と号す、彩管を弄し子全と号す。明治十二年一月五日没、享年七十三。

常盤木のかはらぬ宿や松の花

是 邦

(9ウ)

麗に鶴の歩行や長暇

「山口新泰」

其 柳

琴の音の松に結ふや庭の秋

※「誘」とも見える。

蘭 久

うれしけに龜の子遊ふ小春かな

「藤田良祐」

如 州※

※俳人録には「如洲」とある。

百升は慥にミゆる稻ほ哉

「柴田文六」※

布 山

※俳人録には「市山」とあるが版本は「布」と読める。

うつくしき月夜成けり花の山

「大野宮内」

静 眉

さゝ鳴やまた鶯と名も付す

「山内」

起 牛

霜かふる程ハ根に入大根哉

「村田藤右エ門」(大野)

桃 里

朝きしの来るや棚田の畦つゞき

朱「大ノ」

鶴 相

(10才)

萬才にそなはる門の旭かな

「三好屋」

泥 木

野へ出せは馬嬉しかる弥生哉

朱「北梅」「梅本屋」※

龜 童

※伊予俳人録には「龜堂」が二か所あり、一つは「川上、梅本院」とあり、他の一つは「北梅本、

文政項」とある。この坂本は「亀童」であるが、誤りがあるかも知れない。

梅かゝの帆[?]かけに留る夜明かな

「米次」

柳山

葉に成て老木勢ふや庭桜

(灘地方)

文水

いとゆふを引延したり桃花

「茂平」

東籬

清水から連の増たる泊り哉

二水

飛つくや花の雫に哥^(うた)かはつ

一枝

親と子の笑かほめてたし衣配

濱女

春なく人のふえけりいせの宿

※里百

鶴の啼日なり老も岡を見る

河西朝

※俳人録に松山、水口町、池上嘉蔵とあるのがこの人か。「里白」トモ

※1「ちがや」をたばねて作った大きな輪。六月祓の病気厄よけのまじないとしてくゞらせた。

※2俳人録に「郡中、天保頃」とあるのと同人家。

一鞍か遠乗になる霞哉

朱「内ノ子字都宮氏か」

玄和

(11才)

鳩飛て水の名月澄直す

朱「川」「森佐七郎」

庭居

※喰つミヤ老の目もとのうるハしき

花井

(10ウ)

登る日の見へてあるのに春の雨

芦雪

松うえて齡を祝ふ子の日哉

※一松

呼に住た人にひとやるすゝみかな

柳窓

※俳人録の村崎屋某、大洲商賈、弘化時代(ちなみ草)同一人か。

筑波根に添ふうきはしや天の川

「灘」

峻嶺

袴着の手引や老の神詣

朱「稻荷村」「稻荷西岡氏」

柿遊

常盤木はたゞ其俣か花の中

「原町村」中之内善兵衛

乙陽

※庄屋、竹林軒、淡々系、明治九・九・一〇没。

見る度に朝心なり梅の花

「川井砥部 影浦政助」

花昌

若返りまた若かへり春の不二

「原町年」杉野庫次

其嶺

千代までもたかはぬ風の扇哉

「医師原町、大野玄碩」

柴石

耳の毛も長い翁や菊の花

笑語

(11ウ)

何處迄も果なき山の霞哉

「下原町、麻生 松崎伴蔵」

楽久

朝／＼や鏡にうつる窓の華

「恵原村川井 川井政五郎」

梅二

老の眼も若／＼として四方の春

「麻生 稻荷金吾」「彦」とも素金

鶴の巢を救る松のみとり哉

「三好庄蔵」

文亀

※俳人録に灘地方、三好庄蔵とある人か。

うくひすや老ても聲の芳しき

「久五郎」(籬庵)

梅志

百人かうくひす誉て通りけり

「麻生 高市税」

花石

七重八重さく勢や小米花

不明

花と氣の合てももの立弥生哉

竹子

(12オ)

ほとんよき腰のまかりや種ふくへ

「多賀大社」

呑湖

老てなほ力をますや唐からし

東莊

いつ老の名をや旭にむく竹の春

(川上)

牛子

老樹かと問るゝ梅のすわひ哉

あやめ

老馬のきはひ見へけり寒の梅

牯所

老と名の付てめてたき南瓜哉

桃人

廻る日のミゆるや梅の咲ちから

鳥孝

※鴈あるいは雁

芒ふき草吹山のうらおもて

〔河之内〕

露井

ゆらくと伸若竹の風情哉

〔清水庵〕

竹

(12ウ)

うくひすに一息つくや駕の者

楚山

みどり様色増りけり庭の松

〔丹下為右エ門〕

石

秋の来て一際たつや海の面

可柳

野老掘て詠けり和歌の浦

〔北土居、尾海兵藏〕

素人

高砂や石の杖突松のはな

〔龍門山〕

いろは

雨晴る柳堤や飛ぼたる

〔池田藤太〕

白兔

山この腰も延けりけさの春

〔武知安房守〕

二京

寒いとて餘計も積す富士の雪

〔越智峯次〕

山狸

なの花や建かけて有別坐舖(ざしき)

〔星ノ岡 仲次〕

草月

眼恥さのあまる小庭や玉つはき

〔八束嘉右エ門〕 (松山?)

五島

行水に影のなかる、柳かな

其鳳

夕月に松の黒ミや虫の聲

〔濟川林之丞〕

梅林

水おとの垣ねに澄て夏の月

(松山)

雪笠

※俳人録に住所不明、濟川林之丞、とあるその人か。

〔八塚氏〕

あやめ

杖突た人ハ稀なり桃の花

(松山)

湖洲

橙や皺そのまゝのかさりもの

〔高橋氏〕

京女

(13オ)

雀まで力増しけりことし竹

〔今村嘉太郎〕 (松山)

湖山

曳延るいとや柳の枝のふり

〔好光伴作〕

賀石

春雨の籬に登る蛙かな

〔柏新兵衛〕

雨石

近道の湿きを笑ふ花見哉

初春や日々に和らく松の風

〔大倉松右エ門〕

鶴松

丸窓に蒼の影やはつ日の出

〔堀内幾次〕

滝水

ゆひさすか神日か三保の若緑

〔好光栄蔵〕

二柳

幾年もかはらす汲ん桃の花

※〔井口留右エ門〕

二白

※俳人録には「村口富右衛門」とある。

(14才)

鳴^(つゑ)霍^(ふ)の^(つゑ)扨^(ふ)す^(つゑ)や^(つゑ)春^(つゑ)の^(つゑ)藻^(つゑ)し^(つゑ)ほ^(つゑ)甲^(つゑ)

〔光田鳴太郎〕

一笑

※この字だがこの字は国字「はめる・しぼる」

蓬萊やかしこまりたる男の子

〔平岡平次郎〕(松山)?

五梅

是からは心のまゝに桃の味

〔上林 醫王山〕※

壺水

※俳人録に、上林、僧、天保頃とある。21ウに七言

律詩も載っているが、住所、山号等に疑問がある。

似く舞百菊の友酒のとも

朱「浄ルリ寺」「八坂寺」

素月

月影のさくら芳しあらし山

〔灘 宇野庄兵衛〕(上灘村)

二好

足ることを知るやしらすやけさの春

有琴

袷脱て登れ妙なる日枝の坂

十随

月花八千代のはしめや道の春

〔永井集朔〕

子光

(14ウ)

花も葉もかはらぬ菊の匂ひ哉

〔橘金五右エ門〕(松山)?

湖月

※俳人録には「胡月、橘金右エ門」としている。

藻のうへに亀の遊ふや春の海

〔橘庫次〕

里鶴

山出歩抑て高し雲の峰

〔豊嶋半右エ門〕(川上)

其雪

雨と根に吸よせて咲牡丹哉

〔森松 玉井瀧蔵〕

紫路

月代や重りあふて鶴の聲

〔玉井時次〕(川上)

其玉

常盤木にかはらぬ春の風情哉

(森松の人)

白雲

とかもなう松の齡の久しけれ

鶴 養

秋ふかきころにも田霍の芽出たさよ

空 山

(15才)

程? の蒼を山のわらひ哉

〔高井、相原吟右エ門〕
延 寿

水おとの幾すしもある茂り哉

〔武井新次〕
安 居

いつまでもかはらぬ山のわらひ哉

〔相原虎次郎〕
鶴 志

初東風や高根に寒き霄の雲

〔高井 妙知院〕
虎 谷

葉の数にはさる齡や夏の松

〔武智備後〕※
千 鈴

※浮穴、武智備後、高井神社神職

鷺の操(たや)とる聲や谷渡り

〔東村新次〕(松山?)
梧 水

穂もつくる朝の日あしや鳩の聲

月 貞

すゝ風をたゝみ込たる扇かな

飛 蝶

(15ウ)

梅さくや雪ある山の裾なから

(久米、加藤氏)
松 月

青臭き脊の俵や今とし米

〔上林下三谷 傳宗寺〕
二 扇

松久しその落はかく人は誰

〔井上金兵衛〕
漁 虹

うれしさの筥ひらく也のうちの雛

〔梅ノ本 青井又兵衛〕※
羊 角

名月や柳の眠る水のうへ

〔安平 万次郎〕
鶯 盛

※俳人録には「青木又兵衛」とあり。

祝ひ日や鯛の鱗もうめの花

〔民助〕
免 月

梅活る間に開きけり福寿(草)

〔宮脇新七〕
一 由

茂り葉に一かさ高し今年竹

山 月

(16才)

寒梅(三)や今とし延たる椿にも

〔野中松次郎〕
哥 遊

若水やおほろに移る花ハ何

里 雪

島八夜も早う明けり福寿草

〔貞助〕
林鶴

とし経ほと松に艶あり千代の春

不染

花も實も晚稻に多し御代の秋

〔源兵衛〕
里風

千代迄（まで）も咲顔（かんはせ）やもゝのはな

古情

〔谷〕の登るやう也梅の花

〔佐作〕
左月

いく秋もめくりて照せ君か星

〔大西石見守〕
猿耳

（16ウ）

風に実を入る扇のかなめ哉

〔相原与五右エ門〕（川上）※
亀雄

※俳人録には相原与右衛門も亀雄として並んで記載されている。

築山に峰まで打ぬ今年綿

〔東村唐藏〕？
鷺暁

荒波を重ねてつよし若みとり

〔利助〕
双水

年を積む木振もミセス松の花

〔窪田、松田安右エ門〕
露青

春秋の日和揃ふやことし米

〔藤田万次〕
巴綾

目にめてし心は花の主哉

〔藤田政助〕
一風

昇る日の暖※ミへ出たり福寿草（聖）

〔馬次郎〕（高ノ子）
春人

※この字は「暖」と別字であるが、誤用かも。「ぬくみ」と読まずつもり。

たのしみにかそへて見るや梅の花

〔後藤勇次〕
可笑

（17才）

大株に手筋も恵むやなき哉

〔乃間覚右エ門〕
如遊

千よろつの秋を告るや天津鷹（あちかり）〔久米米山父、三輪田河内守〕※

二橋

※日尾八幡神官、嘉永元年四月十七日歿

風乃子む楠の大樹の茂り哉

〔浅井佐太郎〕
酔月

積としは見えて柳の盛かな

朱「久米」「三藏院内」
真静

橙の枝に吹れてすゝミけり

朱「久米」「如来院」
天保山

年を経る程色増や濃紅葉

左宿

※ 槩となる筍の恵ミかな

野晴

※ 槩と同じ。おほよそ、おほむね。

山茶花八霜を冠て咲にけり

「藤田源次郎」(松山?)

厚志

(17ウ)

※ 俳人録には、藤田源節とあり。

悠なる野山のいろやはるのかせ

「東方村大蓮寺」

耳風

餘念なく蝶も羽をのす牡丹哉

亀石

※ 河内、石丸岩之助、また上野にも松山にも同号あり。

道ついて杖忘れけりはなの山

「田窪」※
壺泉

※ 田窪の人、教育家。水田虎之丞第二子、名卯作私塾を開いて住む。明治十八年五月歿、六十五歳。田窪隻手薬師に頌徳碑あり。

風の夜の長い道ある柳かな

「田窪」
頌風

聲く〜に夜は明にけり春の鳥

「川上」
亀楽

御降の雪を梅の苔かな

花勢

着せ様にこゝろ見へけり菊花

「大徳院」(田窪の人?)
二鳥

神の恵ミ君の恵や升の市

(三津、立川)
一井

※ 十月十七日大阪住吉神社で行われた栴を商う市。宝の市。

(18オ)

鹿郷の道の枝折やわらひ栗

虎石

床の画の竹も薫るや青簾

「田窪海稻神社武知和泉盛稔」
残月

※ 伊予俳人録には「稻荷神社」とあり。

手車にして通りけり雪の傘

「田窪、山置小平」
一笑

梅さくや放して見たき籠の鳥

(井内)「吉助」
古柳

山の根の揃ふあしたやきしの聲

「安井民助」
里益

鶴の巢へ届く^(まき)柩の芽立哉

掬兔

(19才)

萬歳や帆たなに並ふ舟子とも

器玉

とふ見ても松の事も若みとり

「松山」
唐? 翠

餘念なく鶴龜諷ふ霞哉

三扇

色かえぬ^(ま)松のよはひや神路山

「米屋安太郎」
哥柳

(18ウ)

拍手の中から咲や福寿草

虎勢

高砂の松も友なり千代の春
うまさうな風か吹なり梅の花

「相原近江守」
「牛瀨村浮島神社神職?」
梅籬

降度に色ます里の若な哉

寄友

二三次も廻り逢はや初曆

「明賀邦助」(松山?)
吳山

老松に鶴も秋たつ汀哉

春調

舟も居る向ふの岸の牡丹哉

「濱次」
里遊

わか水の国を初瀬の流かな

林山

三寶に鱭ふる鯛や夷子講

「幸次郎」(住所不明)
白扇

鶯はめて度鳥よ梅のやと

器山

瓢箪の重荷もちけり桜かり

「明賀常右エ門」
波蓼

白きくや^(あか)藜の枝に香の登る

季鏡

(19ウ)

寒うなしひたるうもなし櫓の宿

山積

うら白や旭に千代の増光り

「明賀茂作」
寿勢

元日やとしのよるとハ思はれず

葦村

松高しそれより延し薦紅葉

「明賀藤太」※
山月

※「ちなみ草」にも。

※同号が15ウにあり、姓名を異にしている。俳人録には「明倉藤太」とある。

揃ふたる二木の松や初日かけ

梅里

松毎に千代のしらへや浦の春

玉井

老木さへ春やいろ増やとのうめ

逸民

ゆつたりと花の穂まりや春の川

河柳

たのもしき色香ふくむや寒の梅

柳枝

盃の徳こそ見ゆれもゝの花

村薪?

(20才)

はつ暦見た跡て出す眼かね哉

花人

きゝなれた聲もめてたし初鴉

二鳳

萬代の旭をうけて霜の松

蓼村

※辻屋仲田一爐庵。故星加氏の「伊予郡中の俳人仲田蓼村とその作品」に詳しい。

大雪や松に小鳥の百ばかり

一楽

年毎にいろ増りけり松の花

五峰

深草をすつと出ぬけてきしの聲

花鶯

稀に咲後そたのもし冬の梅

其態

※俳人録には「川上、齋藤喜左衛門」とある。

月花に栄て若しふゆの松

鍛

(20ウ)

杖はまたいらぬ風情や翁草

少鸞

橙や霜うけて猶まさる色

春蟻

※俳人録に、高井、井門傳作、又誠、淡々系、明治十五年エヒメ新報俳諧集補助者、明治十七・二・二二没。「嘉永伊予簾」松の契「子日松」とあり。

めて度も雪雀啼日にしたり鶯

箕山

よろこひの重る花の齡かな

左

幾度も花の散るゝはよかりけり

麦人

飲に科羽重穂や雪の霍

楽聖

「野口因幡」

※「齋藤喜一右工門」

「鈴木栄次郎」

朱「高井」「井門氏妻」

朱「井門傳作」※

「村田平蔵」

「信濃」?

「武頭傳右工門」

「豊鳴氏」

(21才)

はせを葉の蔭を力に踏からは
千年の坂もこえぬへくなり

敷しまの大和ひちりや君ならむ
こゝろの矩のくるはさりけり

(21ウ)

稱必招體五束齋 嚴容和穆人中儼
一斗百吟哈李伯 詠雪弄華過樂天
汲陳池潔滌蛙鳴 集蕉翁玉蔵牛淵
系菜門葉賀古希 興擢拙歌寄慶筵
漫把蕪詞賀誕辰 莫疑不敢問疎親
白頭強健真天福 言識君非薄徳人

(22才)

天意為誰傾鶴齡 果知先生是文星
蓬門雪滿三千尺 裏有春風和日馨

祥雲潑爛映朝陽 麟趾傳拳紫氣揚
忽見蓬萊開寿宴 瑩歆醉語各成章

〔光田与エ門〕

典綱

〔無量山〕

宥恕

〔醫王山〕

壺氷

朱〔松山〕

伊藤誠

〔山田氏〕

山田煥

〔光田畦次郎〕

光田売綱

夏冬七十遊松邊 肥雪琴風榮野田
將啄將歌龜鶴與 為君宴席是千年

〔橘新十郎〕

(22ウ)

(記載なし)

(23才)

蕉門六世河盤図庵二頌翁ハ
勤仕を秀子に譲り月花を友とし
子の日の松に齡を契り今とし連理
国杖家杖の誉れますく精力健
にしてその雅名南北に輝き東西
の徳君子より贈り玉ふ賀緑山の
ことく酒肴泉水にあまりて日夜
謡ひ舞ふ風情をある人の勤めに
したかひ桜木にのほせ一冊と成その
流を汲てみたりに拙き章句を
是へ千歳を祝ひ侍りぬ誰か厚篤
に似らんことを願ハさらんや

〔小山義一郎〕

鍛ふたるちからの艶や鏡もち

樵子

(23ウ)

地嵐や百万石の稻のなミ

榊葉に大古ふりや老の春

初しほに亀も渡るかいせの海

※一掃賀集に「トベ」とある。

「伊左エ門」

野水

「高市伊勢」

二貫

「後藤龍伯」※

鶏里

「丹生屋只清」
(つ)

鼠友

「宮脇惣太郎」

夏昇

「相原善五兵衛」※

素兄

※二頌の男

「花山民五郎」

二春

「柏新五右エ門」

雨柏

眼さましく開く老木のさくら哉

(24オ)

長閑さや雲に乗たる鳥のこへ

「大西傳右衛門」※

二集

※俳人録に「大西伝五兵衛」とあり

摘ふとて恵方へ出たる若な哉

「龜次」

霍山

髯の伸や二見の桜海老

「盲人和佐部」

里莊

踏上りくけり老の坂

「大西三省」

二芳

突杖に千代味有翁草

「二宮十右エ門」

古錦

ありかたや重る年を屠蘇の酒

「齋藤勇三郎」

志隨

葛の根を通ふて出る清水哉

「森傳右エ門」

示牛

節分の豆も両手やとしの数

「大西幸之助」

良久

(24ウ)

「相原喜平次」

一様

いさましき麓の松や朝の鷹

「大西沢次」

白志

年しれぬ木の咲ふりや梅花

「相原能登」

竹影

持初の扇ひらくや福寿草

「小山兵左エ門」

里友

てふ／＼も舞ふてのほるやうば桜
〔清助〕（牛淵）
文玉

松かせの音も開けて浪の花
〔大西八郎右エ門〕
亘春

風ゆれもめてたし色をかへぬ松
朱〔久米〕〔三藏院〕
宗静

乗初や乳母も竹の馬にむち
〔河野助次〕
里留

（25才）

いく筋も登る道あり花の山
〔常閑院〕
清友

※俳人録に「常閑院」とあるのが此の人

長閑さや朗にミゆる淡路島
朱〔田アチ〕〔立花甚七〕
扇二

※俳人録に「牛淵、橘氏、甚七、名は篤好、南洲、慶応2没」とある。

万倍と祈る水口まつり哉
〔井口八郎〕
商山

※旧暦二月頃初めて苗代水を引き、水口に幣を立て田の神をまつる行事。たなまつり。

月花にされて色よし梅もとき
〔傳右エ門〕
二丈

底垢のぬけし桜の若葉哉
〔東村新五兵衛〕
千鶴

道問へは花に行人教へけり
〔阿召義貞〕
二洲

積雪をいとはぬ鶴の歩ミ哉
〔高市理兵衛〕
亀毛

来て見れハ猶奥の有月の道
〔大西傳藏〕（牛淵）
二 暁

（25ウ）

菊植てとし／＼若き齡哉
〔戒能源八〕
二 調

葉さくらや花には風も有物を
〔武知對馬〕
可 調

※ 豫松
〔河般凶菴〕

※ 終りに二つの印あり。その篆刻印の字を書いたもの。

豫松
浮穴

河般
凶菴
社中

句一 8

和田句帖その一

(抜翠四十章)

(縦一三・七センチ、横一九・八センチ、假綴本文十八枚、追加雨泊。和田句帖は、和田和水子孫の方が所蔵されていたのを、神野陳氏の好意により写させてもらった。)

(表紙)

奉灯四季

発句合抜翠

四十章

闇評

蔦の屋

(1才)



逆坐 (朱字)

立鷺にこほれ落けり松の雪

以呂波

(1ウ)

今朝見たる萬才来たり素良の町

ひと早雨松もかくれて神送り

(2才)

品のよき子の名をきくやおとる中

膝に手を重ねて讚る牡丹哉

(2ウ)

菊をしミてまた出直すや花に月

黄鳥(じやま)に邪(じやま)な音なす普請かな

(3才)

蝸螂(かまきり)や葉を吹風にひと構

夏座しき風も馳走のひとつ哉

于 静

玉 志

笑 止

于 静

于 静

于 静

于 静

胡 艶

(3ウ)

第三十番 (朱で)

行当る處をねくらや秋のてふ

于静

樹も草もうこかす蟬の鳴日かな

(6ウ)

歌月

日暮たも知らて花見るむしろかな

游雀

豊としの格へつ多しいなすめ

于静

(4オ)

見るうちに雲のかはるや秋の霄

游雀

暮際も知らす夜となる花野哉

于静

(4ウ)

若水やまたのこり[?]た去年の闇

笑止

御鏡にかけあさ[?]やか[?]や夜の梅

于静

(5オ)

ひとつつゝ日暮も行や秋の鐘

歌月

第二十番 (朱書き)

(5ウ)

梅咲て畑の家も覚へけり

歌月

鶯にうち誤りし暮の手かな

(8ウ)

市あとに残り顔し春の月

蘆月

于静

(9才)

何の木も葉は皆落て批把の花

胡艶

山鳥の尾に撫消る春の雪

勢柳

(9ウ)

落かゝる日のさす山の紅葉哉

文柳

雨風は道の清めか神迎

天山

(10才)

夜は水に消込つうへや子規※

ろ月

第十(朱書き)

(10ウ)

つましとふ声ときこえず夜の猫

于静

物凄き雲より出て冬の月

胡艶

(11才)

あゝ涼ふじしふ尽をまくらのうへに見て

干静

松に月見せてしくるゝ軒端かな

于静

(11ウ)

清らかに朝月さすや雪の松

里静

(14ウ)

宿に夜を残して立や花の旅

于静

※「つ」とも見える。

(15才)

鶯や初音はきのふの竹傳

(15ウ)

水底もありく見えてもミち鮒

(16才)

けふ建た家見に行やはるの月

(16ウ)

草潜る水音寒し露の中

(17才)

第二(朱書き)

そら晴て花に雲置標(あかし)かな

(17ウ)

巻尾(朱書き)

于静

藤剪

歌月

游雀

于静

朝(きり)霧や花□を潜る人の声

※「裏」「哀」に近い。

天山

(18才)

いつの間に月は出しそ花の山

和水

右巻逸(朱書き)

(18ウ)

追加

押かけるやうな冷ミや露の窓

右雨泊

印

※松山、永川、宇野氏、蔦之舎、葛廻舎、宗匠

句一 9

和田句帖その二

(秋の鎌磨)

(縦一八・四センチ、横二五・五センチ、和綴本文八

枚、逐加素石

(表紙)

秋の鎌磨

(1才)

悪病を吹はらひけり秋の風

いつも来る客揃ひけり秋祭

笑ミ初る座の芙蓉やけさの秋

独り寝のいとゝ淋しや秋の暮

抜道の橋となりけり落し窠(やせ)

(1ウ)

秋も良深し暮告鐘(や)の声

三軒家茲三五軒やしかの声

露霜(つゆしも)や倍(ますます)々青き松の色

翌日は行けふは月見の支度かな

見たよりも捨ふて多き落穂かな

(2才)

掃除して客待門やきくの花

花野から見れば小さき我家かな

稲妻のかたなり豊の一在所

掃寄た芥の中やむしのこえ

(作者各なし。或は右に同じか。)

午睡する癖ハ止(けり)ミ覺けさの秋

是より上坐

(2ウ)

息話息話てとれは落る息話? かな

歌遊

矮夫

拜月

可也

晴光

寿楽

可也

可也

可也

可也

可也

和友

(3才)

名月やうめ柳より磯馴まつ

胡艶

打揚て闇を動かす花火かな

里 □

(3ウ)

更て行ほとつゝ高しむしのこゑ

倭夫

濶と日のさせは障子のもミちかな

寿 楽

(4才)

喰ひ時も忘れて菊の手入かな

□
□
庵

天地有無夢

寿 楽

(4ウ)

菊の香や床に餘りて四疊半

扇枝

不二ハ雲脱きしあしたや初嵐

寿 楽

(5才)

鹿笛の下手ハ罪なくもとり覺

晴光

白露の玉を欺く旭かな

和 水

(5ウ)

海遠き里から近し秋の色

晴光

逐加

殺生の是も部らしや木の子狩

素 石

句-10

和田句帖その三

(倭楽会月次発句集)

(縦一六・八センチ、横二三・五センチ、手書き假綴、
本文十枚半)

(表紙)

倭米会月次
(わやくゑい) (つきぎあひ)

発句集

抜萃七十章

上座逆列二記

す

不玉齋

(1オ)

逢坂山の八

(山各と番号が、どの句の前にも朱で書かれている。)

目出たさを八重九重やきくの花

北梅梅里

イ吹山八

新酒や門□□も舌つゝみ

西岡香風

逢坂山五

更るほと関の戸たゞく水鶏かな

クメ花京

伊吹山六

新茶売人の咄しや薫はしき

西岡梅女

全十八

闇深きほと白菊の見栄かな
(みはら)

上村都昇

(1ウ)

稲妻や月か覚悟をする小舟

志津川柳玉

逢坂山六

待人ハ来す(ふし)に水鶏の叩き覺

津吉愚鏡

伊吹山十

鳥ハ飛放して行衛眺めけり

※「様」とも読める。

上村清玉

月□□□夜や鳴水鶏

上村水月

逢坂山九

手枕の覚たる跡なき新酒かな

北梅秋明

夕凪て海も静かや涉り鳥

クメ花京

合の山廿

諸共に命を延よ放し鳥

大阪丸万

伊吹九

(2オ)

イ吹山十九

夜もすから河辺にたゝく水鶏かな

クメ梅友

眠たになれは又鳴水鶏かな

川ノ内實玉

合式十

ひと声ハ千世の記念かはなし鳥

高井貴遠

わたり鳥無事を見するや水鏡

畑中亀鏡

逢坂山十八

獨り寝の枕つめたしわたり鳥

志津川勢柳

よき風に扇忘るゝ峠かな

クメ梅友

合山三

逢坂山四

(2ウ)

開きまゝ寝白に扇休ミけり

タカイ貴遠

合の山七

全上十七

全五

全十二

名月や玉と澄きる湖のうへ

志津川 ろ 月

伊吹山一

(3オ)

日和二ハ飽□□頃や綿の華

新村馨

全二

真盛りに杖引続く菊見かな

クメ 柳 枝

稲妻や箸とり落す女の児

志津川 ろ 月

伊吹山十四

全四

菊の香やみえ^るハ朝の日和かな

クメ 其 雀

須^{すま}廣明石ひと眼に舟の月見かな

上 村 水 月

全十五

露にふれ石や白々鳴水鶏

高 井 寿 闌

新酒汲きくや覗けはたゝ二人

西 岡 香 風

逢坂山十四

逢坂山十三

友鳥の中に眼たつやはなし鳥

北 梅 秋 明

辞義をするやうに見へけりはなし鳥

牛 淵 不 尽

全一

都二ハ無と鄙のつき見かな

タノクボ 残 月

(4才)

合山十三

燈火も出さぬ月見や庵の主

西岡龍月

月見るや宵の蕙(よひ)のぬるゝまで

畑中一枝

伊吹山二

白菊と見間違ふ夜の黄きくかな

新村柳雨

めつきりと秋の見えけり桐一葉

西岡龍月

合の山十四

□□店に□□にもかけぬ新茶かな

志ツ川柳玉

嘸(ま)うれし(ま)さう(ま)に見ゆるや放し鳥

志津川亀友

逢坂山七

□□た門賑はしやことし酒

津吉池楽

全十七

※「□ことしさら」とも見える。

夕□□のして花重きほたにかな

高井一法

全十

下さとして山こすや涉り鳥

上林花頭

逢坂山十二

児か笠にしてみる桐のひと葉かな

西岡和有

※「ゐ」とも見える。

(4ウ)

伊吹山六

(5オ)

イ吹十二

一聲八禮ニ残してはなし鳥

上村成美

稲妻や屋の見しも野色

畑中素重

全十一

宇治といふ名に位杯新茶かな

成美

桐ひと葉落て笥の堪ひけり

クメ梅友

合の山九

稲妻の廻りにつくや男やま

クメ梅友

驚寝の夢驚かす水鶏かな

北梅亀昇

イ吹十四

寝ぬ筈の児に約束の月見かな

クメ其雀

稲妻に見へけり船のつけ處

クメ梅友

合の山九

菊の日やをくになまめくをみな声

クメ梅友

すつはりともつハ白地のあふきかな

クメ柳枝

(5ウ)

逢坂山二

イ吹十九

合山十九

全二

全壹

(6才)

イ吹山四

涉り鳥また其声のうひくし

西岡 香風

白菊や闇といふ字をしらぬ色

志ツ川 晴光

全十一

醒易き酔も床しき新酒かな

上村 成美

秋頃や放した鳥の寝にもとる

クメ 花京

逢坂十一

しら菊や月をいたく花の顔

上林 花頭

陰膳に高し新茶の立つ薫

平井川 生柳

合山六

椽先に秋を見せたるひと葉かな

川ノ内 涼杜

酔易きものゝ醒よき新酒かな

上村 都昇

イ吹山十三

滅つめし夜の寝餘りや鳴水鶏

クメ 其雀

全十七

稲妻やきらり渚の浪の色

高井 一法

(6ウ)

合の山十

逢坂山五

結構な日和続きや綿の華

クメ花京

(8ウ)

伊吹十九

(7ウ)

合ノ山十

ひと群ハ雲かと見たりわたり鳥

志津川 晴光

(9オ)

伊吹十一

逢坂山三

稀人に恥ぬ馳走や菊のはな

畑中歌居

不二の絵ハ分てすゝしきあふきかな

上村成美

全五

有なからもらひ水する新茶かな

クメ花京

イ吹の十六

人山吹の色に香を添ふ新茶かな

高井寿閑

(8オ)

伊吹十二

涉り来る鳥の土産よ飯の味

上村成美

イ吹十九

地稲妻やわすれしまとを起て引

クメ梅友

桃[?]絵[?]ひ[?]實[?]けり綿の花

クメ梅友

(10ウ)

合の山八

天 もち馴ぬ蓋(さか)もたす新酒かな

志津川 和水

(11オ)

極 吟

朝冷もうまし新酒の酛(もと)卸

水鶏しやおもひなからや寝もやらす

相互不沙汰詫合ふ菊見かな

素石 印

(1オ)

高井邨(むら)覺王寺

永額四季随意

発句輯薫聲

甲乙逆順

(1ウ)

明治第二十八稔春

三月應需秀調

一百章

選

桂廼舎老人 印

(2オ)

殿 脇 (朱印)

句一11

青野氏所蔵句集その一

(表題不明。縦一六・八センチ、横二三・八センチ、墨書き、製本してある。本文四十枚。明治二十八年。)

(表紙)

題簽なし。剥げた跡あり。

徐に曙作るさくらかな

(2ウ)

はてなほとなをあわれなり盆燈籠

川 上 豫 川

新 村 莞 爾

(3才)

身も軽くなりしおもひや厄おとし

田窪 一志

薬玉やたらちねの意に叶ふ處

久米 梅友

(3ウ・4才○開きに続いている以下ほとんど同じ。)

酸漿(はつぎ)の壻や子守の出つ入つ

上村 鬼勢

山別れた若鷹や十文字

新村 恋※棹

※8才には、久米として同字の番号あり、30ウには井門として出ている。

世の富を賣廣げけり杵の市

上村 鬼勢

(4ウ、5才)

青梅や口酸くして子を吃※る

新村 梅月

※字はこれであるが「叱」のつもりか。

清かな佛なからも御身拭

田窪 一志

引ワけて後花咲かすすまひ哉

川ノ内 涼橋

(5ウ、6才)

船の燈や施餓餓参りの鳥戻り

高井 明梅

冬枯れて佗しき鶴の古巢哉

田窪 一志

麗しき山のかたちや龍田姫

高井 竹搦

(6ウ、7才)

添たまう母の手紙やワたはうし

畑中 祖丈

※1 蓑に笑ミ包みて戻る岡見かな

※2 上野 都昇

※1「蓑」なり。
※2「上村」の誤だろう。

無事にかと這入れハ誠冬籠

田窪 一志

(7ウ、8才)

袴着や千歳寿く伊達模様

川上 豫川

蓮伐るや暁闇の手くらかり

南高井 満月

茶の花や茶白山から天王寺

久米 恋棹

(8ウ、9オ)

笠脱て見れば日高き田植哉

北高井 貴景

山茶花や蝶も来さうな海の風

東方里 遊

涼しさや鏡にうつるあらひ髪

高井 □? 多

大雪や隣見舞も旅こゝろ

上村 成美

足もとに消る雲あり不尽詣(ふし)

高井 集泉

岩角を打丸めけりゆふしくれ

津吉 南雪

(9ウ、10オ)

雫かと覗けは花の光りかな

高井 亀鶴

鳶の輪を鳴崩したる雲雀哉

津吉 池楽

風の吹方か上坐か夏坐敷

水 泥 琴 囀

聲かけて見れハ兄なり朧月

新村 龍山

詔(つと)ひもなくて涼しきひとり哉

新村 柳月

聞なれた鐘にも秋のゆふへかな

川ノ内 實玉

(10ウ、11オ)

霖(うめ)潜り柳潜りて春の水

川ノ内 杜月

長□? 兄に持たせたり罌粟(けし)の華

高井 亀鶴

かけたのハこゝろの橋よ花の瀧

田 窪 一 志

枯(まで)て辻風弄ふ柳かな

高井 水石

羽箒て掃やほたにの塵埃

川ノ内 涼橋

蝶飛ふや橋わたる兒の向ふ見す

畑中 祖丈

(11ウ、12オ)

(12ウ、13オ)

(14ウ、15オ)

わかれ霜草の雫と成(けり)に鳥

新村流美

柳さへ戦かぬ日なり雲の峯

久米一葉

(17ウ、18オ)

眞白なこゝろや花の朝日和

田窪一志

日は山に傾きながら暮遅し

新村龍山

寄浪も夢の枕や浮寝とり

東方里遊

名月や花とも見ゆる浪かしら

高井寿楽

(15ウ、16オ)

とちらから生るゝかせと釣葱ふ

田窪壹詩

雨の根のぬけし聲なり暮ひはり

田窪壹詩

忍ふ夜の友とも成りぬ鳴水鶏

津吉愚鏡

草の戸や露につゝまる門明り

西岡村香風

美しき詞もとしのはしめ哉

久米峯松

花の香も添ふて流るゝ筏哉

高井二三

(16ウ、17オ)

万歳は鞆て呼ふやわたし守

牛淵不盡

いつになき夜の清らかや寒の入

津吉池楽

雨宵の遠音床しき百舌鳥の聲

高井寿楽

百葉の長とも言わん蓬餅

高井寿閑

蛸※や江に横倒る松の蔭

田窪一志

谷の戸や風かもて来る鹿の聲

梅ノ本一枝

※「横たはる」の意。

(20ウ、21オ)

茶巾干月の小窓や梅薫

東方里遊

宇宙にひとつ淋しや春の雁

高井貴景

我れ獨日永きものか花の留守

東方里遊

(21ウ、22オ)

苦は楽の庸廣し稲の花

高井寿関

※「税種」ちからしね「税代」ちからしろなどに当たるか。または「ほねをり」「つくない」とも。

寒月やいそにされたる実なし貝

水泥峯松

落かけたまゝに出るや樹の雫

上村成美

(22ウ、23オ)

燈の消ゆる迹におとある霜夜哉

田窪壹詩

ふきあげたさまおもしろき落葉哉

高井集泉

菜の花や留守へ来て居る旅馴染

畑中祖丈

(23ウ、24オ)

花蕾も數に読けり初茄子

高井集泉

孤む手を逃て其手にとまるてふ

高井頼三

引捨た草にも露のやとりかな

畑中楽山

(24ウ、25オ)

生寄樹に花を催す如月かな

北高井貴景

※「寄生樹」やどりぎのつもりだろう。

若葉から秋を含る楓かな

西岡三関

聲のはし門からかけて梅もらひ

津吉花遊

(25ウ、26オ)

陽炎や旭まはゆき鬼瓦

高井集泉

疲労るゝや踊る児よりも親の肩

西岡素石

日に幾度換た師走のこゝろ哉

川ノ内實玉

(26ウ、27オ)

鴨なくや風先あらし浪の音

田窪 一志

暉系した月も夜寒の姿哉

上村 成美

星逢の光り見古しなかり覺

川ノ内 涼橋

梅探るかと問ふ人もうめ探

高井 亀鶴

山吹や宇治の焙爐(ほいろ)の匂ふ頃

北高井 題嚴

唯さへも嬉しき春を花見哉

川ノ内 實玉

(27ウ、28オ)

友を呼ふあわたししさやゆふちとり

久米 冬昔

嚏(はなむね)の付けは戻るや後の月

田窪 一志

※「昔」「昔」とも見える。

※「くさめ」のこと。

米(む)の直は知らぬ在所※1や諫鼓鳥

北吉井 素石

持換へた掌を懐や雪の傘

田窪 一志

※1 「諫鼓」と判ぜられるが「諫鼓苔蒸す」の意や、「閑古鳥」をかけているのだろうか。のんびりした

在所のようす。

(30ウ)

※2 前に「西岡」とあり。

瀑布にはしかけたやう也藤の花

井門 窓遊

流したる経木漂ふ水の泡

吉井 一志

(31オ)

※他には「田窪」とあり。

むら雨の霽間を暑きにはひ哉

新村 龍山

(31ウ)

春の日や歩行^(あるき)勞れて寝草^(ねぐさ)臥

梅本桑園

雙六のよつ目の中を不如帰

高井寿閑

(32オ)

客とめて米搗家や鹿の聲

田窪旭昇

花に注く日は暮易うおもひけり

南高井完暁

(32ウ)

涼かせや忘れ燈する蚊遣屑

東方里遊

隠れ家にかくれぬうめの薰哉

牛淵一笠

(33オ)

下草は露のまゝ也秋の霜

川ノ内杜月

松一樹主顔也安藝の山

田窪樹聲

このおく鄙郁たる

(36オ)

十内(朱書き)

枯菊のかれ葉にほふや冬の雨

南高井亀靄

(33ウ)

六月や流るゝ水に日のにほひ

西岡素石

あい宿や寒さ話しを襖こし

久米梅友

(36ウ)

(37 才)

染る樹のとひ移する紅葉かな

水 泥[※] 琴 嘯

※沈は「沉」と同じ。しかし「水泥」の意か。

(37 ウ、 38 才)

巻中の殿

巻殿 (朱印)

今植えし竹を養ふ曇かな

新 村 柳 月

(38 ウ、 39 才)

巻中の魁

巻魁 (朱印)

涼しさはとちらに有そ月と水

川ノ内 實 玉

(39 ウ、 40 才)

追 加

七十二老

紫^(せんまい)薇もわらひも肥て寺に客

※ 千蘿 印 印
※ 前出

句-12

※ 青野氏所蔵句集その二

(見飽ぬ花)

※この句帖の内容は、青野氏所蔵句集その三の27ウ、月並三回の「是より、倭樂亭撰甲の巻」と同じである。句の右側の「一」内はその「甲の巻」に書かれてあるものである。また句順は両者全く逆になつてゐる。したがつて作者名の「全」は、その左に同じの意となる。作者名の両者異なつてゐる個所も数か所あり、いずれが真であるか不明であるが、この「見飽ぬ花」は選者印もあり、ていねいにできてゐるようである。

(志津川青野隆夫氏蔵、縦一七センチ、横二三・五センチ、表紙とも八枚、墨書假綴。年号の記載はないが明治中期ごろ)

(表紙)

見飽ぬ花

(表紙裏)

金刀比羅大社奉書

月並題四季発句

五百六拾有集之内式拾

章拔翠甲乙次第

逆順二記ス

倭楽亭選印

笑はれて笑ひたしけり楳拂

實玉

(2ウ)

涼しさや嘶し上手の月の門

全

長閑さや沖を行船戻る船

實玉

(3オ)

咲出して酒の賣よき牡丹かな

谷越

匂ひ出るよふや茶摘二歌の艶

里仙

(3ウ)

重ね着を仕た夜となりし別れ霜

和居

居並て雛みる人の笑顔哉

霞川

(4オ)

世渡りハ下手て踊の上手哉

一友

(1オ)

桜から美しく夜の明にけり

晚梅

なか／＼と昔を語る巨燧哉

流柳

(1ウ)

晴て後こゝろつきけり虎か雨

實玉

十の字にありし影する蜻蛉かな

實玉

(2オ)

吞たりて口にくゝめる清水哉

雅光

元日や此上もなき隠世[※]

※「さと」とも見える。

(4ウ)

枝打た跡はまたなし初桜

暮れ越した雪に七八重花曇り

(5オ)

採りあせりしては胡蝶を迹しけり

是より天地人

(5ウ)

名月の照るや西山東山

(句の左上に朱で「人」の字あり。)

(6オ)

神旅とあるニ金刀比羅まつり哉

(句の左上に朱で「地」とあり。)

杜月

(6ウ)

暮れて立つもりは居ぬ花見かな

實玉

(左上に「天」の朱字がある。)

杜月

(7オ、裏表紙裏)

竹朗

追加

吹来るも御廻ける神か青嵐

香風印

海西

杜月

句一13

青野氏所蔵句帖その三

(川ノ内の俳人であった青野實玉氏が、明治二十年代三十年代ころに、近在の神社佛閣に掲げてある俳額や、奉納された句会の作、あるいは月次会の抜粋を書きとめ、自らか他者が整理し筆写されたもの。現在その孫に当たる青野隆夫氏(志津川在住)の所蔵。今一冊に綴じられているが、もとは二冊であつたらしく、一冊は二十一枚までで奉額類や奉納句、月次句会の作等を写したものだ。

二十二枚目に別の標題名「金刀比羅月並会抜吟」があり、本文八枚あって、通して三十枚。縦二六・五センチ、横一九・五センチ。現在は所在のない神社等があり、中にはこの句帖のまゝの原額が残っているものもある。当時の地域俳壇の情況を知るのに良い資料である。町内句集として全文掲載してもよいと思われるが、当時の實玉の書留の体裁をしており、川内を中心としているので、ここでは重信町内の地名の明らかなものだけを記しておく。

河之内村問屋白王神社奉燈発句抜章題四季

白菊の露一色の盛りかな

北野田 梅 雨

當国周布郡滑川村薬師永額抜句写し

着心ろを人に問るゝ紙子哉(こゝろ)

シツ川 胡 艶

(右側の「」は原額に書かれてあるもの。以下同じ。)

寒喰やあき家の様な臺所

胡 艶

旭や窓に最鶯(もつ)の来る時分

西岡 香 風

分別をさすり出しけり當火鉢(せ)

志津川村 叡 月

陽炎や一雨ことに花の翠り(翠)

志津川村 晴 光

(原額によると、撰是因阿(前出)、明治二十二年四月吉日掲之、催主青野清右衛門・渡部權右衛門・会林凉杜・雪竹とある。)

周布郡楼樹村大字滑川白山神社永額集抜章

第二 御留守にも曇らぬ神の鏡哉

ヒノ口 珪 磋

孝に身に藪入□を□□けり

珪 磋

山にあり野にあり春の人心

珪 磋

若(わか)きより老を□□れや案の花

全

有明の濡色寒き芙蓉哉

珪 磋

周布郡明川村九崎所氏神永額抜四季発句

何つ(なに)の間に花ハ咲しそ梅嫌

シツ川 胡 艶

すゝはいて明う成るや臺所

山ノ内 叡 月

※「志津川村」と出ているか所もある。

只ならぬ雨や佛の生るゝ日

シツ川 晴 光

道問へハ柳をさして教へけり

晴 光

道筋へ柴落並ぶ清水哉

叡 月

角力取の手柄嘶しや涼ミ臺

晴 光

松山川上大宮月次奉書題抜句写し

乳貰ひの来てはかとらす田植哉

珪 磋

能風を招くも晝籠の幟哉

珪 磋

全所月並六月會抜句写し

川狩や人から過て名も呼す

珪 磋

川狩やうろつき過てもつれ網

香 風

夕立や傘と日傘の川向ひ

珪 磋

川狩や片手ゝひねる煙草すき

珪 磋

川狩ハ名の見て提る瓢哉

珪 磋

世に逃た人の川狩上手哉

全

借茶屋と能町にや心太

香 風

※この字に近いが「所」かも。

南吉井村大字牛渕金刀比羅社永額抜翠

二、出かけしを手に隠さるゝ寒

上 村 猿 丸

三、初花と言間に唯の桜哉

全 松 月

余處事に誘ひ出しけり鯨の友

上 村 都 昇

大年や米搗共のふところ手

牛 渕 暮 甫

朝起と晝寐と心一つ哉

見 奈 良 桃 晤

追 加

磯の香の叩きならすや海苔礎

水 月 楼 可 長

※南吉井村大西良実、県会議員、村長、碧梧桐の新傾向派

雪の川闇一筋に明にけり

珪 磋

(1才)

正月の二十五日や梅の花

梅白し神の慮にかなふ程

咲く梅にぬからぬ聲の小鳥かな

白うめのしろき限にある寒さ

里ちかくなるやちらほら梅の花

梅の香の一筋なかし石河原

葦垣に春の覗くやうめの花

煤咲いてなくなるものハ闇夜哉

うめ寒し鳥ハそと啼ながら

暁や星降かゝる梅の闇

蕙帆て迎へに來たり寐(うめ)の客

緋かぬ画卷物なり未開紅

句一14 奉納梅千句

(志津川、武智成彬氏所蔵。明治三十五年三月一日、縦十
八・五センチ、横五十三センチ、奉書二つ折二十枚。
※木和村李瓶が、菅公一千年忌に当たり、梅の句を千句詠
み、志津川天満宮に奉納したもの。各ページ二十五句ず
つ書かれている。)

※伊予俳人録には「松山住、尾道産、木村利平、旭
扇堂」とある。「木村」は「木和村」の誤。

(表紙)

愛媛県松山市大字河原町

大和村利平

号 旭扇堂李瓶 印

奉納梅千句

鎗梅や弓ハ袋に君か御代

うめか香に麩のちか道覚えけり

羽織着た馬引通る野棗哉

新らしき酒樽寒し梅の花

りゝしさは色にも見えて花の兄

梅か香に曇り勝なる月夜哉

散しきし梅の白さよ苔のうへ

夜一はい退かぬけしきや棗(うめ)の月

白雲に横たふ虹やむめの橋

うめかゝに行当りけり曲り角

月踏て唐うためかせ梅の人

牛に乗るハ彼の神童かうめ林

梅寒しとハなくてよき詞かな

(1ウゝ20オ、略)

(20ウ)

(とらふを)
纜をかけて淋しやきしの梅

山蔭や好文木のかくれ里※

※梅の異称

八重梅の細工過たる匂かな

植主の四徳はいかに棗の花

漢帝の鈕やのかれて臥龍梅

有るたけの梅は残して開墾地

梅もたぬ小家もなくて夕月夜

芦火たく家ハ煤けたりうめの花

山の戸や梅か香出る朝あらし

梅白し暗部(くろぶ)の山の暗きより※

※鞍馬山の古名

事觸の田舎わたりや梅の花

勅題

八重雲のさ八たつうめの颱風かな

初明りさすや梅ある處より

駒下駄てそゝろ歩行や月の毒

全

薄月や梅にをみなの立姿

毒笑ひく今年と成にけり

梅か香や千代の古道ゆくこゝち

梅千句書てもつきぬ言葉哉

梅折るや男まさりの小原人

(裏表紙裏)

右やせん左りやうめの匂ふ溪

明治三十五年

神の毒冠正さて立りけり

三月一日誌畢

楳か香や此所より五丁奥の院

(裏表紙)

紅梅の朱な奪ひそ岩の色

志津川天満神社蔵

梅園のうめ咲にけり鳥の聲

いさましや梅の中ゆく奉幣使

雅と俗

(上村の岩田弁二郎氏所蔵、縦一六・八センチ、横二三・三センチ、和紙表紙とも十八枚。明治三十六年句角力であるが、判者の当時の句に対する評価の一端を知るのに興味がある。)

(表紙)

雅と俗

(表紙裏)

(記載なし)

(1オ)

明治三十六年暮春中旬興行
久榮社第七十二回月次衆議
判餘興也

第十八番角力句東西合

輪番勸進元 愚鏡子
鮮釋并判 ※ 守中庵

印 印

※「守中庵は石山と号す。森義朗、廣島に生れ、明治二十四年八倉に住す。郡中時代に樞姿社を経営」と伊予俳人録にある。近くは椿神社奉額その他の選あり、近郊の斯道の指導者であつた。

(1ウ)

(記載なし)

(2オ)

名の付ける山の端賑はし竹の秋

草 文

日は漏れる鶯ふけし竹の秋

花 林

東は「嵐山よし野山等花に名の

ある山が人出に賑やかな」との事ならん

が、何も「山の端」と限る訳はあるまじ、殊に

「名の付ける」といひたる詞もおもはしからずして

作極めて拙也

西も「鶯ふけし」がよろしからず、上五の「日

は漏れる」は竹の葉のまばらに成た為メ

にはあるべけれど斯る事はいはずもがな

である、東西ともこんな事では

到底角力にならず、もちつと御勉

強なさい

(2ウ)

野か山に春は隠れて竹の秋

松 琴

藪千里走る虎とや竹の秋

池 楽

東、「野か山に春は隠れて」ではなし

「春」は立派にあらはれてある、「野と山へ
春奪はれて竹の秋」など、やり

玉へ

西、「虎は千里の藪さへ云々」の俗歌

を取りたる句らしいが「竹の秋」には何の関係もなき事

とす、竹の秋といふ

からには「秋」の字の意をにがさぬ心がけ

が第一なり、唯竹の事ではいかん、この

二句も竹の秋の句とはいへず、矢張

はねる

(3オ)

萬代に洩れ覺^(す)竹は秋の色

一 明

尺取に喩ふ心地か竹の秋

南 山

東、竹の秋は竹の秋といふべし「竹」と

「秋」とのあひだに他の字が夾まると大

抵竹の秋にならず、竹の秋のミならず

すべての題の字を分けて句にするは

手柄をせんとして却て不手柄に落入

る也、小細工にてすべき事にあらじ

西は丸きりわからず、何とも解[※]釈

のしやうがなし勿論竹の秋は難題

には違ひないが、今回は格別にむつかしい
句が多い、この二句も捨る

※「解」の俗字

(3ウ)

松風に貰ひ戦きや竹の秋

愚 鏡

人心山に登るや竹の秋

キ※
ヲ

※後に「亀翁」が出る。同人であろう。

東、「竹自身に戦ぐあたはずして松

風のみを貰うて戦ぐ」との事らしい

が長閑な節なる二付竹が戦ぐ風なく

ば松にも同じく風はなかるべし、然れば「松
風に貰ひ戦ぎ」は不道理なる事

明かなり、即ち事実こそむく句たり

西、竹の秋は三月なれば「心」ではなく

人のからだも花の山へ登る、「人心山に登る」とは登る事あたハぬときに登りたいといふ意味なれば、この西も上等にはあらねどくらべて見れば東よりよし

(4才)

若鮎や昨日の雨に殖た水

若鮎や夕日に登る水の浪

水石

里遊

東、「若鮎や」と呼出していふからには若鮎は其處に見えて居るけしきなるが「雨に殖た水」は濁りしに違ひなければ鮎は見えざるべし、この句は「落鮎」の間違ひとおもハる

西、「若年魚や」といひ切りて「夕日に登る水の浪」としては、鮎※が登るにあらで浪が登る事に

なる、それは浪が登るにしても鮎が登るにしても第一「水の浪」といふ詞も

ぞつとせず、この二疋の若鮎も

さっぱり鮎らしう見えず、壹厘にも買へまい

(4ウ)

若鮎の小石轉かす瀬音哉

登る瀬に眼の離されぬ小鮎哉

愚鏡

雲葵

※右に細字で書き入れてある。

東、若鮎は随分いさましいものにはあれど、とても「小石」を「轉がす」力はあらざるべし、若鮎の時小石を轉がす力があらば親鮎になりては大石を轉がす力になる
筈にてこの若鮎は丸で朝比奈三郎が少年の時のやうな感じが起る、「若鮎や小石轉がす瀬の早ミ」と言はゞ差支なき句と成る
西、何の為メ「眼の離されぬ」にや釣る事も汲む事も見えぬゆゑ「眼の離されぬ」といふ譯がわからず、上手にいふてあるやうで矢張詞の足らぬ句ながら朝比奈鮎よりはまさる

(5才)

若年魚や水にちらつく花の影

キラ

若鮎(まて)や御座の次迄(まで)桶のまゝ

成 美

東、是も「若あゆや」といひ切りて「水に

ちらつく

花の影」と續けたるゆゑ、「ちらつく」は「鮎」に

あらで「花の影」の事になる、若鮎がちらく
とちらつく處に花影がうつりてある

けしきなるべければこの叙法では

其意にはきこえず

西貴人のおはします次の坐敷迄

若あゆ入れたる桶を運んで御覧に

入るゝとの意なるが「御座の次」といふい

ひかたがちつくりなり、「上覧に備へる」

桶の小年魚かな」ともいひたし、この二句もよいくらゐ

の立合ながら

先ヅは西を勝とさだめおく

(5ウ)

歌に迄香の添ふ宇治の茶摘哉

成 美

誰見ても香のありさうな茶摘かな

愚 鏡

東製造すれば香も出れど今摘ミ

つゝあるときはそんなに香氣の高

き茶の芽にあらざれば「歌に迄香の

添ふ」とは點頭(うづ)せず、あまりに法螺也、

西は茶摘女の事をいふたものにて

「誰見ても」といへばどの女を見ても

香がありさうなといはるゝが茶摘女が

まさかいづれも匂袋を持つてもをるまじく又どれも腋臭

女にもあるまじければ

この句も事実はづれにて東よりも

まだ数級劣る

(6オ)

郡から貰ハれて来て茶摘かな

松 琴

※左に「る」の字も並んで見える。

茶摘人も親に上茶の近さかな

花 林

東、「貰ハれて」なら茶摘のために

養女に成る事にきこゆ、「郡から傭はれ

て来て」ではなきや、茶摘のために

養女になるといふは合點し難し

西は「親に上茶の近さ」がわからず

茶摘をして其まうけた金子で

親へ上茶を飲ますとの意らしけれども
「近さかな」が全く判らずして東よりも
はるかに悪し

(6ウ)

若鮎の稱美の客や京の町

若あゆや日も落かゝる雨の雲

草 文

一 明

東、「京」は海邊にあらざるをもて川魚
の鮎を「稱美」するとならんが、それだけの
理由にては「京の町」と置く程の事は
なかるべし且「若鮎の稱美の」といへる「の」
の字の重なり具合も不手際極まりて
到底ろくな句ではなし

西は「雨の雲」のなかへでも日が落かゝった
やうにきこゆる句にて印象甚不

明瞭なり、大抵の場合において「日
も落かゝる」といふ下は「海の上」などと
せでは落かゝる場がしれず、誠に暖
味千萬の句、東より一層悪し

(7オ)

雇はれて見たし茶摘の片在所

唐土へ宇治の名を賣る茶摘哉

里 遊

一 明

東、「雇はれて見たし茶摘の」迄は
よけれど「片在所」が悪し、繁華な
地をさし置きてこと更に片在所を
望む其理由が覚束なし、「雇はれ
て我もうたはん茶摘唄」等ならばっ
きりせんに

西「もろこし」は茶の本家なり、
とてもう治の茶を以てちゃんく
を驚かす訳にはゆかぬから「唐土へ
う治の茶を賣る」は間違なり、日
本茶の輸出が支那にあらで西洋なる
事は兼て御承知なるべし、それでも勝

※右に「名」の字もあり。

(7ウ)

右十一組は幕の内に
入る事をゆるされざる片
輪力士にて、このおくにあ

らはるゝが幕の内

但し幕の内とても

一騎當千の面々といふ次

第にはあらず爾か御心得

(8才)

風は春と戦くや竹の秋

竹の秋雀は春とさへつりぬ

東西のいづれもさすがに幕の

内丈ありて無理な詞もなく

意もはつきりときこえたり然

し別だん斬新なる趣向といふにも

あらず、唯打聞えたるまでの事

にて團扇は二句の中央に

伏す

(8ウ)

鹿も啼さうな異名や竹の秋

忠と啼親子雀や竹の秋

雲 葵

水 石

里 遊

成 美

東、「竹の秋」は三月の異名なれども

この句は三月の事をいふにあらざる

を以て出しぬけに「異名や」といひ

ては何の異名なるかが疑はし、この疑

ひはこの句のたりなれども、「秋」といふ

字を捕へて「鹿」を持出だされたるは

近頃の御手際なるを以て強手幕

の内の位置をあたへたるは不都合なかるべし

と信ず

西はきこえた通りにて古くさい

事は根がきり古くさくも疵のない

のが奇妙也、負

(9才)

散込た花に飛つく小鮎かな

掃流す花に口さす小鮎かな

どちらも「花」を引合ひにしたる句に

て、「花に口さす」といへば花より若

鮎の口がちひさくなくてはならぬ算

用なるが「掃流す」といへば既にばら／＼

に成たる花らしうきこゆるをもて、「口

さす」といふ事が些如何はしうもおもはる

松 琴

池 楽

れどもさう迄考へずともよかるべく

何にしる「花に口さす」といふ中七は西の句の性命(マツ)とも

いふべき語たる事勿論

にて、つまり東は普通なれどよく温定※し

西はめづらしくも些危しとも評す

べきを含む、團扇はさし向き東へふる

※「治」とも見え、「穩」の極端な草体とも見える。

(9ウ)

網ぬけて小鮎是から出世かな

花林

若あめゆや眼引したまに見失へり

南山

東はいはゆる擬人法即ち魚を人に

なずらへたる句にて別に缺點も

なきやうに見受らる

西は下五が下六なり、是でも

かまひはせぬが、「見なくせし」といはゞ

吟聲はさしつかへなくなる、而してこの

句は若鮎の敏捷なるけしきを述たる

ものにて、「登る瀬に目の離されぬ云々」の句と

全一なるやうなれどかの句は鮎の敏捷

なるをいふたよりもじっと見詰めて居ら

ねばならぬといふ事を主にした

るやうにきこゆるをもつて何のために

見詰めて居ねばならぬかの難が起

(10オ)

りてこの句と同日の嘶(ほ)しに

あらねば是を此所に置き、彼を

彼所にぼいさげたるを憾がむなけれ、

されどこの句もこゝでは負

(10ウ)

宇治ていつ流行し唄そ茶摘唄※

水石

※右に「節」の字もあり。

縁の橋かける娘の茶摘かな

池楽

東は片在所において三十年も

前に本元の宇治で流行したる歌

をうたふ体にて邊鄙の人が何事

も時勢に後るゝを或る開化人が嗤り笑ふにやあらん、

「いつ流行し節ぞ」

が面白し

※西は恋句なり温定したる句

は句なれど、事柄が事柄丈にて品

格が東より劣る、品格の劣るは取りも直さず負

※「治」とも見え、「穂」の極端な草体とも見える。

(11オ)

爽な二八の聲や茶摘唄

紹鷗も歌きゝに出ん茶摘かな

草文

雲葵

東「爽な聲」ならいまだ聲がはりのせぬ娘なるべくして作も清浄

潔白也、いやミのない恋句たり

西、紹鷗がもし山城の人なら茶摘「歌をきゝに出ん」が格別よく利けど、

仮令境の人たりとも茶人たる點よりして歌きゝに出るも尤なり、殊に

「出ん」との想像辞を「かな」にてとめたる句法もあしからず、何角のうへより立

派な勝

※次の「を」の右に書かれてある。

(11ウ)

花は実となるや茶をつむ宇治の里

藪小屋へ弁當つるして茶摘かな

南 山

亀 翁

東、宇治の茶摘始メは花の最中

なれど茶摘の最中は多分花の

済た後なるべければ、この句時候

の定め具合兎角ウなかるべし、是亦

さっぱりしたる句也

(12オ)

拔萃九章

但し拔萃にて角力の

勝敗とは少し坐

次を異にす而して

娘乳母等の人物

を讀込たる句は大

抵品格悪し

(12ウ)

斯る語を讀込たる

句はとも巻

頭になる氣違ひは

なきに付御呑込な

さるへし

句位逆なり

※字は「逡」であるが「遣」のつもりであろう。

(13オ)

藪小屋へ弁

※ 當つるして茶摘かな

印

爽な聲の

揃ふや茶摘歌

※この句より、15オまでの各句の右肩に小朱印あり、後は略す。

(13ウ)

散掛る花に

飛附く小鮎かな

(14オ)

掃流す花を

逐行く小鮎かな

(14ウ)

何處らまで登るそ

網をぬけし鮎

登り鮎眼引した間に

見なくせり

(14ウ)

花は実と

なるや茶を

摘むう治の里

(15オ)

宇治ていつ

はやりし節そ

茶摘歌

(15ウ、16オ)

紹鷗も

聞きに

出て居ん

茶摘唄

(16ウ)

副章

風鈴をつるや軒

端の夏近し

石山印

(別紙——冊中に挟み込まれたもの、一ページの同じ大きな紙)

副章

世に立て罪

作るより菊作り

石山印

(裏表紙裏と裏表紙に誰か後のことだろう、違う筆で四句ほど書かれてあるが、省略する。)

日露戦陣営句集

(句—16)
句—22

明治三十八年九月、日露戦争は終結し、ポーツマス講和条約を締結することになるが、そのころ旧満州南孤山に駐屯していた第十一師団に属する輸卒隊と思れる小隊の中に、井上嶺雲(重信町下林)がいた。戦火熄んで、凱旋に至る間の陣営のつれづれに、兵士上官どもを語り、しばしば句会を催している。初心者多く見受けられ、遊びに似たものが多いが、異国にあって、手っ取り早い庶民の風流に集まる誰も彼ものことを思うと、講和の報を聞いてまだ帰国命令の出ない数カ月間の兵士の気持ちや、国民的風流志向の趣まで察せられる。

もとこの七冊に数倍する句帳があったらしく、そのまま嶺雲が持ち帰ったものか、中には小隊印の押されているものもある。

句一16

野中氏所蔵句帖

(重信町下林・宮之段、野中三郎氏の主家にあつたもの。横十二センチ、縦十六・五センチ、表紙を除いて二十二枚。四四二句。)

(表紙)

第八

日露開戦二年九月起

俳句雑題 印

於南孤山有志会 印

嶺雲 印

(1オ)

読むなれば軸をもとれや俳諧師

(1ウ)

とりもとるおりに肌で草をとる

嶺雲 印

嶺雲 印

(2オ) 22才略

ほとんど題詠で、いわゆる冠付(笠付)もある。題は「紅葉・酒吞」「鹿・松島」「雁・松果」「蟹・素水(作者の一人の俳名)」など、二語を一句に詠み込むものもある。この句帖の有志俳名は、「野緑・柳翠・梶の葉・緑山人・素水・宝月・栄玉・茶楽句斎・千代丸・二葉」らであるが、なにひとかは不明。

※「南孤山」については、旧満洲国安徽省安東市の南西数十キロメートルの所に「孤山」あるいは「孤山街」があり、特に南孤山というのは見当たらないが、孤山の南をいうのであろう。(大東亜共営巻地図、満洲国軍史付表地図等)または中国浙江省杭州の西湖の中にある島の名として「孤山」は有名であるが、それは当たらない。他にも、河北省、山東省、山西省、江蘇省、安徽省、江西省、福建省、湖北省等に同名のものがあり、満洲にも「孤山子」という地名が遼寧省と奉天海龍県下にある。

句一17

井上修氏所蔵句帖その一

(縦十六・五センチ、横十二センチ、表紙裏表紙とも二十七枚。五一八句。)

(表紙)

第四補欠

日露開戦二年九月起 印※

俳句雑題

於滿州南孤山

戦友楽会

嶺雲 印

(1才)

狐 秋季

狐狸の住む尾花のゆれや夕の鐘

(1ウ)

初袷 矢張

張かへの単衣畳む初袷

(2才以下略)

嶺雲

嶺雪

裏表紙に、この句集に用いられた題詠の句題が四十一書

かれてある。「水涕・横濱」「楢・高松」「鯨・徳島」「千

鳥・東京」「冬の日・神戸」「絵葉書・松山」など地名と

組み合わされたものが多い。中に「枯野・拝志」があり、

拝志は重信町拝志であり、嶺雲の出題かと思われる。

出句者は句16の十一名のうち、一、三増減があり「歌人」

「酔花」が加わっているが、俳名の記入のない部分も多い。

※この印は隸印体で「第十一師團 第六補助輪 卒隊
第貳小隊之印」と読めるようである。

句-18

井上氏所蔵句帖その二

(縦十六・五センチ、横十二センチ、本文十二枚、一四七句)

(表紙)

征露陣中

輪寿禮草 地

日本俳友

印 嶺雲 印

(1オゝ7オ、略)

(7ウ)

月の夕

世々萬代世々静なり秋の今日

栄玉

野分して後に残るや柿一ツ

月の夕

雷の音も静めて夕立哉

嶺雲

雪の朝

さっはりとして心地よや山椒餅

宝月

おわり

月の夕

秋の最中の徒然くゝに戦さの友が集ひして露伐ち徴す争も零時し休止の其か中に志気を養ふ言の葉を十七文字にあやなして風雅の餘地に弓張の心も弛まぬ日本男は心の竹を種々くゝの弦の響ハいとおもしろしとて後の

(8オ)

しるしに筆とりて

神無月十五

南孤山陣営中

越山人

感吟

争ひし事も流れて落し水

松寿

雲か山か浪間はるかに渡り鳥

松寿

(8ウゝ9ウ、略)

(10オ)

雲行のまた氣使ふや稲の浪

遷露月

人

稲の香の潜る田裾や落し水

遷露月

地

残念やいま一と押ししの

(10ウ)

分角力

素水

天

笑み洩るゝ西施の窓や秋海棠

千代丸

しふし

徒前川に橋かける日や渡り鳥

越山人

(11才、略)

(11ウ)

関を取る角力や服に波を打

越山人

満洲於南孤山日本俳友連

日露開戦二年十月十五日催會

南孤山兵站司令管（つら）

陸軍歩兵少佐中島征行閣下

行年五十有某

評之

俳名 越山人

(12才、ウ、略)

句16・17に出て来る俳名以外に、この集では、「子釣・半醉・松寿・遷路月」と、選者、越山人がある。

句-19

井上氏所蔵句帖その三

(表紙とも五枚、縦二十四・五センチ、横十六・五センチ。三十二句。)

(表紙)

日露二年極月

催主 野緑

満洲の南孤山ニ於テ

風交噺社 第一回

酒呑庵素水雅伯評

(1才以下略)

内容は、川柳じみた句に、素水が評を加えたもの。句16に顔を見せる者以外に、「藤園・律外・拔作・栗林・拔太」という名が見える

句-20

井上氏所蔵句帖その四

(表紙とも十九枚、縦二十五センチ、横十七センチ。二
一四句。)

(表紙)

はつ春の巻

南孤山戦友連

選者 目盲庵梶葉

(以下本文略)

互選でもしたらしく、三点句・五点句・七点句の印
のある句が多く出ている。15ウ以下は選者の選による感
吟十句、透逸五句、人、地、天各一句がある。出句者は
同類の句集に出ている人たち。

句-21

井上氏所蔵句帖その五

(十枚綴。縦二十五センチ、横十六・五センチ。八十三
句。)

(表紙)

明治三十九年

南孤山戦友連

一月

餘興六題句集

不審庵越人先生御評

(1オ、9オ、略)

^(4名)
楯・冬籠・落葉・枯野・鉢叩・煤掃の六題で出句され
ている。楯の印が句の上にあるものについてのみ作者名
が書かれてある。作者名のあるのは、嶺雲・素水・千代
丸・松寿・子釣・酔花の六名。

(9ウ)

明治三十八年極月四国新聞を閲せしに

発句の募集ありとて噂さたかかりしより

陣中の徒然く其題を仮りて

思ひくの趣向を咏せしに唯口ずさみしは

おしけりとて一と巻のわすれ草にとて

誌せし中にて盲者の杖の擲り取を

強へられしまゝ経のしるへと書拔しなん

丙午睦月凱旋の前一夜

雪溪(印)

(この印は「越山」)

(10才)

信心の道一筋や今朝の雪

句一22

井上氏所蔵句帖その六

(十六枚、縦十七センチ、横十二・五センチ。短歌三。

二六九句。選句三十六、追加、軸句各一。)

(表紙)

於滿州○ 戦友連

月次発句集 地

泥

不審庵越山老俳御評

(「於滿洲、南孤山、雲、泥、地」の字は朱書。)

長閑や浪も静に大船の集ふ多津度に凱歌立ちけり

豊さや此の大船に帆を巻ゐて帰る多度津に春は来にけり

嶺 雲

(2才以下、越山人の三点、五点、七点の入点の印が上欄にあり、下欄に別の、後凋庵清雪という人の入点印が押されてある。これまでに出ていない俳名に、可因(可因とも見える)、杉樹、藤園がある。)

(2才〜15才、略)

(15ウ)

(前ページに五客とあり、越山人の選と評になっている。)

山吹に実のなき人の恨み哉

酔花

手枕や蛙に寝むき雨の音

千代丸

(3才には「眠むき宵の雨」とある。)

月隴花の下道風うすき

酔花

雪降りて花に花咲く庵の梅

嶺雲

されはこそ人もめてたき雪の梅

酔花

三光

老た幹瘦た梢や雪の梅

子釣

人

評

児の知恵も末廣かれや侃

千代丸

此の評 子を育つ親心の厚さ教へ居也詛
具を与ふるにも行末の出世を祈りて

児の末廣かれと風にせしは親の情
なり

梅の老木程枝細くして瘦せ花も何と思
ふ老艶を顕ハせしに今朝の雪積りて
花もいと々太ときく見へて嚴しく
立ち揚りしは臥竜梅を見るの心地
して天位せしたりし

(16才)

(16ウ)

地

夢うとく蛙うとく聞く夜かな

千代丸

初春の寿き悦ふ屠蘇の酔
稻積みなからほろくと
はつの発句のおもしろき
かなたにかゝるて読
み取りぬ

※正月に寝ることを忌みてかくいふ。

評

丙午睦月於南孤山

越山人

蛙聞く夜から延ひく旅寝かな

明治三十九年一月十五日開会

(18ウ)

凱戦(カク)の途に開きて吾と我か恋ひに焦れし日こそ来にけり

印は「嶺雲」

町外句集

句一 川上神社所蔵卷紙一卷

(天明八戎申、序忽起菴東溝、自序願主梅洞庵幾充、及び後文願主管叔齋其友、跋玉椿五嶺翁。約五メートルに及ぶ巻物。自序によれば、「奥道前道後の境の中山の路は羊腸九折で通ひにくい所であったが、延宝の頃尊命により郡吏がその道筋に桜を植えさせたところ、吉野、初瀬、志賀、嵐山を欺くばかりとなっていた。ところが星霜を経るうち次第に朽ちてきて、その数も少なくなってきた。それを惜しんで、山内其友とはかり、画師にその景象を写さしめ(社に)奉掲することとなった。」とある。東溝の序には「(これを機会に)芳華の吟詠を遠近に需め、是を川上の社頭にささげんとす。」とある。到来の吟六十七句、五言律詩一、五言絶句五、和歌一、遅参の吟九句、他に五嶺や願主等の句五あり。)

俯(うつむ)て下る人なしさくら坂

西之岡 湖橋

誰爰(いかに)に捨た蕙や山桜

志津川 算車

雪にして懐暖しやまさくら

西之岡 李仙

此頃の猿人馴てさくら哉

※ 三万園
西之岡 不曲

落出も一里餘りや桜坂

西ノ岡 湖青

果しなき空に里塚や山桜

牛 渚 白 齊 飛

入相もしらぬ千□□の桜哉

西 岡 里 夙

月ならて夜を□□る桜哉

牛 渚 顔 優

入交る雲や桜も二郡

牛 渚 楚 雀

算へても跡忘れけり又桜

見 奈 良 麟 々

※ 西岡の宝寿院の僧、三万里とも号す。寛政六年三月歿。

句一 2
俳諧友千鳥

(正しくは豫陽俳諧友千鳥。享和二年「一八〇二」孟冬、一得齋埋蛇撰、一人一句全二二一句) 久浮社中十二句の中に次の句がある。

杜若矢に持添て通けり

志津川 箒 車

・同哥月(末光氏)が入句している。近在の川之内・東方・南方・松瀬川・川上・大野町・梅ノ本等の俳人も多い。

句一 5
嘉永版伊予簾

(嘉永元年、日野林樵枸編)

春の夜やどの山みても明安き

タノクボ 頌 風

朝ごとに水汲おくやほとゝぎす

タノクボ 壺 泉

句一 3
ちなみぐさ

(弘化二年正月(一八四五)、蛸壺鳥岬編、鶯居序、七万余吟の中から四百句を選び、大三島・出石寺・滝宮・宮嶋の神社へ分けて奉納したもの。選者は波同・芋丈・霞村・鳳朗。会林助筆六人の中に川上の茂松があり、大願主五人の中に川上の玄来がいる。各地の世話役の肖像入り。

中に牛洲二頌・同扇二(橋氏)・志津川芦岳(武智氏)

句一 6
おいまつ集

(明治十四年立春、大原其戎の古稀を祝って、県内外から送られてきた賀章を一冊にまとめ刊行したもの。愛媛大学子規研究会編「正岡子規資料と研究」3抜刷「大原其戎とその周辺」和田茂樹氏に、その紹介がある。賀章を寄せた県内の俳人一九四人、五三地区の中で、志津川

は三津三六、松山二一に次いで十二人と多く、他に野田一、西岡一の句が出ているという。ただこの紹介は、集の全部を復刻したものではないので、一部の載っているものだけを転載しておく。

其戎と道後・松山周辺門下との連句（歌仙）より――

（前略）

廣前の幣のそよきも御闇かと

川上 外京

ぬかも戴く山つとの飴

志津川 湖遊

（中略）

骨牌うるさき乗合の舟

南方 南陵

新発意も都めぐりになかつ羽織

志津川 干静

評判よりハ味ひふな焼

野田 二春

眼遣もうつる朱塗の給仕ほん

志津川 里静

なお関係あるものに次の如きものが載っている。

曙やにハ木の花もよしのやま

尾張 羽州

（羽州は川内町全刀比羅寺俳額明治三十三年の選者）

蒔初る色のゆかしや米のたね

土居 棹舟

（棹舟は「閑居の友」の後序を書いた人）

夕栄のあくまで赤し梅もどき

今治 半窓

（半窓は見奈良素我神社俳額明治十三年、南部田素我神社俳額明治二十二年、新立金刀比羅神社俳額明治十四年等の選者。ここには明治二十六年七十一歳歿と出ていて、伊予俳人録に明治二年歿とある方が間違いである）

春の野や持てみたしと思ふ嫩

松山 青菱

（後略）

（青菱は上林法蓮寺額明治二十四年の選者）

「閑居の友」より

(この句集は周布郡丹原に住した加地一直孚石こと蝸牛庵黙居編、明治十七年刊、四十枚、和綴、木版、縦二一・八センチ、横一五・八センチ。桂雲亭五嵐の序があり、跋は土居の松の本棹舟が書いている。刊本で他資料にも引用が多く、他所にも残っているはずだが、これは重信町大字志津川神野陳氏の所蔵されていたもの。本文の大部分は一ページに一句を載せ、合わせて作者の姿の絵が「ちなみ草」のように印刷されており珍しい。出句者は東予中予に拡がり、鶯居、半窓、芹舎、九圃、橘仙、棹舟その他名のある俳家も多く、総数七十名。この中より重信川内町関係が十八名おり、この地がかなり盛んであったことが知れる。重信川内関係のみ載せておく。)

色も香も見せず徳ありまつの花

(下浮穴郡南方、柏氏)

喜 陵

初風呂や不機嫌もなき人心

(全、川上)

老 遊

蜻蛉や寝て居上も行もとり

(全北方、医王寺)

成 也

涼風や月もすつかり山放れ

(全南方、関山居)

青 谷

※俳人録にはこの字であるが、この句集39ウの人名一覧では「開」に近い字。

薜(あまがは)の忘れ咲する九月哉

(全北方、渡辺倉五郎)

徐 来

瓢たんとともに轉むて月見かな

(全南方、高須賀氏、梅の舎)

南 陵

※川之内に「梅の舎涼杜」がいる。

から瓢叩も花のもとりかな

(久米郡シツ川)

和 友

春の風そわぬ夜ハなし草の宿

(全郡西岡村)

孝 風

小止なく音して落葉散夜かな

(西岡)

素 石

皆黙れ鶯来たと覗き鳥

(下浮穴郡川上、渡部氏)

芦 村

稻妻や杖をたよりにぬかり道

(全南方、南昌寺)

秋 月

草木ミなかけのおさなし春の月
(全北方、田中氏)
静民

卯の花や白ふ抱込霄(よび)の月
(全南方、南昌寺)
指月

梅提て袖口寒し長堤
(全北方、桑原氏)
壺石

はたくと團扇の音や門の闇
(全田ノクホ、稲葉氏)
亀泉

白蓮や傾く月を露のうへ
(全田ノクホ、大西氏)
一志

夜ハ唯音斗聞芭蕉かな
(ばかり)
(全、田ノクホ、稲葉甚三郎)
自稱

筆紙は左右の友なり冬こもり

床しさの増や二月の嵐山
※ 同全郡シツ川
于静

※「同」は、原本のその右の句にある「イヨ」をさし「全」は同じく「久米郡」をさす。

付

表

関係俳額・句集一覧

- 俳額句集等取り交せて年代順に並べた。
- 上欄の番号は、俳額とそれ以外の句集等に分けて、別々に古い順に付したものである。
「額」は俳額の、「句」は句集等の略号。
- 年次の書かれていないものは、おおよその推定で入れた。
- 作者名の下の数字は、その額や句集の中に出ている同作者の句数である。
- 町外資料のものは、主としてその中に見える町内俳人のみの名を挙げた。
- 地名の有無は原資料のままである。

<p>名称(地名) 年号 選者や編者・ 会林名</p>	<p>額1 岡八幡神社額(西ノ岡) 宝曆十二年春(一七六二)</p> <p>志山、兎去、普山、吳風、菊司、芦泉、不曲、古因、胡<small>圖</small>、白兔、一釣、<small>其</small>風、吸江、<small>樋</small>志、臥龍、虎白、李仙、婦人富、不及、草司、樽龍、味文、雨十、午睡、殘醉、鬼帆、止風、神主盛住、野水、<small>窓</small>風、宜中、徒十、孤声</p>
<p>額2 徳威三島神社額(北野田) 安永四年十一月(一七七五) 雲山人文養 ・千八百奄五 嶺追加</p>	<p>新農、柏志、未白、和聲、里風、兎兄、蘭亭2、篋波、歌優、亀友、未得、五白、雲歩、野龍、幽志、靈橋、梅友、筭中、自笑、太奇、工吟、糸流、似水、苛聖、鼠十、糸白、虎勢、<small>春</small><small>之</small>、野水</p>

<p>額3 住吉神社額(畑之川) 安永五年秋(一七七六) 五嶺評 會林—晒来 ・巴扇・烏十</p>	<p>川上歌全、川上湖芳、川上里風、井内之白、吉井女一、エハラ里夕3、エハラ其遊、クメ糸柳、ミドロ絲白、ミドロ楚山、畑中筭車、畑中吳竹、西岡湖青、梅ノ本雲汀、牛洩通意、牛洩驚踊、牛洩兔拜、牛洩兔兄 (近在のも挙げた。)</p>
<p>額4 八幡神社額(高井) 天明六年九月(一七八六) 葛綿舎和扇追加 會林—梅里 ・亀白・五名</p>	<p>牛洩楚雀、田ノ窪里瓊3</p>
<p>嶺跋 東溝序、五</p>	<p>句1 川上神社所蔵巻紙 天明八年(一七八八)</p> <p>西ノ岡湖橋、志津川筭車、西ノ岡李仙、西ノ岡不曲、西ノ岡湖青、牛洩白飛、西ノ岡里風、牛洩顔優、牛洩楚雀、見奈良麟々</p>

<p>額6 城山天満宮額(上林) 文化六年六月(一八〇九) 湖舟選 會林―桃枝 亀友・森月</p>	<p>句2 俳諧友千鳥 享和二年 一得齋埋蛇撰</p>	<p>額5 三奈良神社額(下林) 享和元年十二月(一八〇一) 嶺全堂五富 追加</p>
<p>好哥、青山、シツ川破琴、田ノクボ一風、下ハヤシ其調2、季鏡2、白斗4、マツ山湖柳、下ハヤシ良野、梅林3、亀友、一見2、玉酒、森月、桃枝、□曲二、一可、〔筆者〕有道</p>	<p>志津川箒車、川上五白、梅ノ本楚雀、全楚仙、水泥楚山、全亀列、井戸鬼丁、全五江、全雲山、市ノ坪麥漣、松前禹暎、全里風 (久浮社中として出ている者を挙げた。)</p>	<p>湖芳、梨白2、一臥庵2、龜山2、可厚3、巖々亭、扇月2、砂月、湖舟、せい子、黄口2、嵐阿3、志専2、文林斎、柳五、石鷲 齋里3、柳飛、吐白3、ノラ子コ、白□、青江、志白、不存、花紅、良野、川上歌全、知能、知里、嘯哭、芦船、林谷、如柳、花橋、雨聲、青峇</p>

<p>額8 拜志神社額(下林) 文化六年(一八〇九) 温習堂麥連 追加 會林―其調 栢枝・琴糸 良夜・盛柳</p>	<p>額7 拜志神社額(下林八幡) 文化六年季秋(一八〇九) 二晝奄蘭汀 追加 會林―一見 亀友・梅扇 不染・森月 一可・花黄 桃枝・工吟 白斗</p>
<p>南方一盛、洗耳、桑洲3、田窪湖白、三津左柳、見奈良雲紫2、可翁、見奈良里風、上林里暎、上野喜友、栢枝、一橋、白斗、富久籠、麻生伽白、古三津里三、志津川五葉、南方湖鳥、上村楽之、(下林)良野、高井亀毛、琴糸、盛柳、城下南、田窪文孝、□、上村□</p>	<p>宮元和光3、白斗4、畠之川措月、南方知情、二名白水、桃枝3、下林曲松、全桑洲2、一見4、林鶴2、麻生伽白、原町積玉、玉水、好哥、里仙、下林良野2、亀友2、宮元二白2、見奈良雲紫3、花遊、類女、二名文亭、二名南里2、志津川破琴、一可2、田之久保蝶夢、志津川五葉、田之久保湖白、全文孝、全都白、不染2、畠之川此友、見奈良一三、田之久保千鳥、南方器水、季鏡、〔書家〕有道、〔會林〕海扇、〔全〕森月、〔全〕花黄、〔全〕工吟</p>

<p>額9 城山天満宮額(上林) 文化八年(一八一一) 夏水齋追加 會林―林下 秀山・好哥</p>	<p>額10 三島神社額(麻生) 文化十三年(一八一六)</p>	<p>額川 慈光寺額(志津川) 文政十三年(一八三〇) 橘陵嵐角追加 會林―其蓬 其柳・吞海 大船・左右</p>	<p>城下夏山2、田窪湖月、全如柳、季鏡、久万七鳥花鬘、林下、備后福山吞拾、高井架白、下林其調 見奈良里風、畠之川指月3、志津川魚菜、森月、見奈良雲紫、志津川破琴2、田窪文孝2、南方湖泉、田窪蝶夢、白斗、好哥、北梅龜童、林鶴、下林三花</p>
<p>田窪文孝</p>		<p>其蓬2、其柳2、高ノ子□嵐、河ノ内不尺、大野比良4、素民2、左右田2、子全2、吞海2、魚菜、北梅本梅里、□嵐和3、金城下音船、雨柳2、大船2、吾葉、丸山、鬼若2、花暎、川上無名仙、里橋、牛瀨文玉、大野寿桃、高子里松、久米久米彦 島山柴作、大野梅光、湖游、破琴</p>	

<p>句3 ちなみぐ 弘化二年(一八四五) 蛸壺烏岬編</p>	<p>額13 牛頭天王額(上林) 天保四年(一八三三) 故文追加 會林―哥休 巴龍・桃下</p>	<p>牛瀨二頌、同扇二(橘氏)、志津川芦岳(武智氏)、同哥月(末光氏)――全四百句の中より</p>	<p>額12 城山天満宮額(上林) 天保三年(一八三二) 二頌追加 會林―季鏡 掬兔</p>	<p>白斗2、掬兔、京白、南方龜芳、牛瀨二慶2、牛瀨文玉3、不染、牛瀨其石、桃枝、哥休、則之内石上、里女、牛瀨二集、北高井鶴遊、里鳥、三巴、風孚、虎山、下林梅隣、風子、飄水、</p>
<p>城下杜若3、掬兔、見奈良左叟5、白計2、哥休、見奈良素遊2、下林宜哉、則之内石上、大野蘆澤、巴龍、季鏡、文玉、松瀬川玉子2、玉酒、南方里山、桃下、</p>				

4 子の日の
松

弘化二年
(一八四五)

相原二頌編

鶯居序

(地名・本

名の分かつて

いるものが多

いが、この集

のみ略す。本

文参照。)

二頌、亀毛 2、楽聖 2、素兄 2、樵子
2、二春 2、野水 2、二丈 2、示牛
2、扇 2、良久 2、二羽 2、二集
2、里留 2、商山 2、竹影 2、二眺
2、宜春 2、一様 2、里友 2、文玉
2、鼠友 2、清友 2、里莊 2、二調
2、宗静 2、鶴山 2、雨柏 2、夏昇
2、二芳 2、可調 2、志随 2、古錦
2、鷄里 2、二貫 2、千鶴 2、萬井、
芝堂、靄居、麦年、随意、黙夫、庭
里、呼水、里鳥、葵笠、草羽、鳥岬、
婦鷗、民芝、鷺谷、岱眉、三和、非
玉、栗壺、素居、茶山、吐雲、木人、
朴人、玄来、卵支、志流、茂松、米
谷、蘆村、五楊、五眺、巴人、梅夫、
藤□、杉蔭、因是、芦錐、蘆岳、是
邦、其柳、蘭久、如州、布山、静眉、
起牛、桃里、靄相、泥奔、龜童、柳
山、東籬、一枝、里白、玄和、庭居、
芦雪、柳窓、峻嶺、文水、二水、濱
女、河西、鶯朝、花井、一松、柿遊、
乙陽、花昌、其嶺、紫石、笑語、楽
久、梅二、素金、文龜、梅志、花石、

不明、竹子、吞湖、東莊、牛子、あや
め 2、牝所、桃人、烏孝、露井、楚
山、可柳、いろは、二京、草月、其
鳳、雪笠、湖洲、湖山、一怱、一石、
素人、白兔、山狸、五島、梅林、京
女、賀石、雨石、鶴松、瀧水、二柳、
二白、一笑、五梅、壺水、素月、二
好、有琴、十随、子光、胡月、里鶴、
其雪、紫路、其玉、白雲、鶴養、空
山、延寿、安居、鶴志、虎谷、千鈴、
梧水、月貞、飛蝶、松月、二扇、漁
虹、羊角、鶯盛、兔月、一由、山月、
哥遊、里雪、林鶴、不染、里風、古
情、左月、猿耳、龜雄、鷺眺、双水、
露青、巴綾、一風、春人、可笑、如
遊、二橋、醉月、真静、天保山、左
宿、野晴、厚志、耳風、龜石、壺泉、
頌風、龜楽、花勢、二鳥、一井、虎
石、残月、古柳、里益、拘兔、器玉、
三扇、虎勢、寄友、春調、林山、器
山、季鏡、山積、葦村、團翠、哥柳、
笑山、梅籬、吳山、里遊、白扇、波
蓼、寿勢、山月、梅里、玉井、逸民、

<p>編 日野林樵柯 嘉永元年 (一八四八)</p>	<p>額15 同神社額 弘化三年 (一八四六) 會林―起石 ・頌風・保泉</p>	<p>額14 宇気洲神社額(田窪) 弘化三年 (一八四六)</p>	<p>歌又は漢詩の作者名 (一)内は和</p>
<p>予簾 嘉永版伊 タノクボ頌風、 タノクボ壺泉</p>	<p>松子、二角、壺泉その他</p>	<p>保泉、楚雀、起石、巴頭、その他</p>	<p>河柳、柳枝、村薪、花人、二鳳、蓼村、一樂、五峰、花鶯、其熊、鍛焙、少鸞、春蟻、箕山、介左、麦人、(典綱、宥恕、壺水、伊藤誠、山田煥、光田売綱、橘草楼) 白志</p>

<p>額18 香積寺額(田窪) 安政四年 (一八五七) 會林―笑山 ・大里・寿井 ・残月</p>	<p>額17 金刀比羅宮額(久万町上畑野川) 安政三年 (一八五六) 鶯居追吟</p>	<p>額16 素鷲神社額(見奈良) 安政二年 (一八五五) 卯厄追加 會林―巴泉 ・花染・嘉庭 ・宗居</p>
<p>笑山等會林の句も多い。</p>	<p>田窪鶴水、上林不、上林桃下2</p>	<p>魚遊2、里石、久米寿松2、上林花林、花樵2、スノウチ樞風2、北方志流2、嘉庭2、里水3、巴頭、宗居3、花染3、里鬮、里月2、巴泉2、ヒノクチ歌勢2、里覚、北方加玉2、全木水、巴藤2、素遊2、梅本翁舩、久米鬼枝、梅枝、上村玉光</p>

<p>額22 浮島神社 (牛洩) 慶應元年</p>	<p>額21 鹿島神社 (北条市) 元治二年 (一八六五) 雲岱追加</p>	<p>額20 護国院額 (上村) 文久三年 (一八六三) 東琴追加</p>	<p>額19 川上神社 (肖像入り) 萬延元年 (一八六〇) 遊舟堂・ 源々庵撰</p>
<p>会林、願主扇二の他に、方明、城下山月、北川、松波、嘉風、生川、ミツ五谷、城下梅盛、花暁、千阿、丹青、ミ</p>	<p>牛洩扇二2、田之窪湖鏡、田之窪枕石2</p>	<p>上村寿蝶2、古處、上邑白梅6、上邑羊角3、一狸5、上邑華林3、上邑玉哥3、上邑竹林、波山3、上邑都村3、深井2、上邑石燕</p>	<p>見奈良宗居、見奈良巴泉、ミナラ左叟、田ノクボ寿井、見奈良花樵2、ミナラ湖雲、牛フチ酔園、見奈良久樂、田ノ窪二見、田ノ窪笑山、見奈良花染、田ノクホ岱梨、見奈良巴藤、田ノ窪鶴枝、牛洩扇二、田ノ窪花遊、み奈良里石、牛フチ古洩、田ノ窪蝶月</p>

<p>額24 拜志神社 (下林) 明治六年 (一八七三) 杉蔭追加 會林―春月 ・花頭・明森 其引―春月</p>	<p>額23 東王寺額 (下林) 慶應二年 (一八六六) 二春逐吟 會林―養素 ・鶴石・林光 ・嘉石・花遊</p>	<p>(一八六五) 會林―竹谷 ・古洩・松月 ・春浦・旭松 他一名</p>
<p>ヒノロ万花園、石燕、東方里遊2、花頭3、春月3、ミナラ嘉庭2、大野鶴桐2、高井二菱、高井紫髯、喜月2、濃田一狸、井内春井、高井龜朝、全上社中2、北方幽斗、南方五梅、笑居2、東方伊呂波、津吉愚鏡、田窪湖鏡3、川上松村、ノタ公寿、井内不覚、月居、不深、上村花林、高井ト之、津</p>	<p>石燕3、豊應2、田窪鶴枝5、鶴石2、林光3、来運2、養素5、上村都邑2、嘉石3、花遊、上村花林、眠子2、南方村蘭水3、時三、上村羊角、上林村樸處、桠松、則之内村牛洩2</p>	<p>ツ筵外、ミツ素谷、その他</p>

<p>額26 浮島神社 (牛洩) 明治十三年 (一八八〇) 土岐古逐加</p>	<p>額25 素鷲神社 (見奈良) 明治十二年 (二八七九) 一日葺選</p>	<p>・笑居・喜月 ・花頭</p>
<p>春甫3、湖舩、軽尾2、二隆、素雲、青洩、素兄、花洲3、春谷2、染精女、不求2、桜僊4、三津良2、二笑2、梅邑2、登、喜風2、古松2、松煙、水、春</p>	<p>ウシフチ南洩2、寿玉2、松山龜静2、下林春月3、白翁2、花樵4、風處3、嘉庭4、谷嵐、ウシフチ竹谷2、北方成也2、南方秋月2、松月、柳玉、里鶴4、巴玉4、ウシフチ松谷、スノウチ楳風、如泉、梅盛2、北方志汲、花頭、松山玉甫、田窪梅里、巴蕉、顧吟2、南方喜勇、ノタ湖龍、ウシフチ湖月、北方鷲陽、その他不明瞭数名</p>	<p>吉哥好、北方志汲、濃田二春、上村羊角、北方鶴眠、明森、嘉石、顧吟、養素、田窪旭川、上村都村、東方我好、北方静民、久米松虹、南方其翠、春光、</p>

<p>額28 雄郡神社 (松山) 明治十三年 (一八八〇) 鷲居和吟</p>	<p>額27 素鷲神社 (見奈良) 明治十三年 (一八八〇) 馬乳園半窓 追加</p>
<p>志津川晴光、志津川干静、志津川胡艶、志津川歌月</p>	<p>嘉庭5、志津川里静、静民8、湖春13、寿花、花樵4、老遊、東孤、龜洩2、松雨、寿玉2、主馬丸2、顧吟3、白翁7、松瀬川龜若、北東2、南方秋月、宗居2、玉泉、春錦、巴玉4、梅盛2、野田一狸、巴樵、田野さいき、一登2、成也5、外景3、虎遊3、桃仙3、田野如泊、志津川勢柳、吾暁、巴泉2、風處3、老遊、いつ、哥玉、如泉、今治茶隣2、保免白民、花染、鳥陽、北条棟笠、谷隣、大、月、大、里玉、志汲、古柳、三光、波止青黄、東方里遊、その他不明瞭あり。</p>

<p>句6 おいまつ集（大原其戒の古稀賀集） 明治十四年 （一八八一）</p>	<p>川上外京、志津川湖遊、南方南陵、志津川干静、野田二春、志津川里静、（尾張羽州、土居棹舟、今治半窓、松山青菱）他。</p>
<p>額29 金刀比羅神社額（松山新立） 明治十四年 （一八八一） 半窓選</p>	<p>志津川干静、志津川胡艶、志津川晴光、志津川里静、田ノ窪亀泉2、志津川和友</p>
<p>額30 城山神社額（東石井） 明治十四年 （一八八一） 雨泊追加</p>	<p>志津川和友、樋ノ口亀淵、志津川里静、志津川其静、志津川晴光、志津川いろは、牛淵素雲、志津川胡艶、</p>
<p>額31 浮島神社額（牛淵） 明治十四年 （一八八一）</p>	<p>賀、春、古、旭水、櫻僊、湖、□月、吾、里、花、常雅、竹谷、古松、可、竹虎、梁榑女、松、一、三津良、□登、貴、岡松、千、不、その他。（一）</p>

<p>額32 宇気洲神社額（田窪） 明治十五年 （一八八二） 雨泊追加</p>	<p>字のものは下の字が見えないもの） 一志、如泉、亀泉、千玄、一木、其梅、二扇、和友、天山、その他。</p>
<p>額33 片山神社額（下林） 明治十五年 （一八八二） 五揚追加</p>	<p>徳丸六川2、林光、牛淵竹谷、城下六川、八倉一木3、春月、津吉都月、川上白翁3、畑ノ川鶯谷、筒井鸕友、梅志、郡中上野精月、上三谷寿水4、北方壺石、稚恠、志津川干静、[*]嘉石、牛淵輕尾、徳丸魚風2、川丑居、南方穂月、川上来、トベ百川、野田一猩、城下桐溪、時正2、牛貴宅、城下乙民、養素、上林笑居、静民、北方鷹陽、牛淵畜谷、川井玉岑、城下樵翁、其川、八倉其梅、梅谷、久米松静、川上輝山2、 ※于静であらう。</p>
<p>額34 松山神社額（道後）</p>	<p>下林春月2、上邨清玉、野田天神2、田ノ窪一志2、田ノ窪自称、野田二</p>

額36 宇氣洲神 社額 (田窪)	額35 総河内神 社額 (川内町) 明治十八年 (一八八五) 因阿撰 會林—陽柳 ・花眠・涼杜 ・一石	句7 閑居の友 明治十七年 (一八八四) 黙居編	明治十七年 (一八八四) 其戎選
花村、琴嘯、樹山、湖秋、花林、千 松、一志、その他	下林 <small>(老)</small> 〇八、西岡村龍月2、睦月村梅 月、明穂村半窓、西岡村素石2、田窪 村文敬、志津川村不老、田窪村其 玉、志津川村晴光、西岡村香風2	(重信・川内のみ) 南方喜陵、川上老 遊、北方成也、南方青谷、北方徐来、 南方南陵、シツ川和友、西岡村孝 風、西岡素石、川上芦村、南方秋月、 北方静民、南方指月、北方壺石、田 ノクボ亀泉、田ノクホ一志、田ノク ホ自稱、シツ川干静	春、田窪天蘭

句8 発句合拔 翠四十章 (和 田句帖一)	額38 三社大権 現額 (八反地) 明治十九年 (一八八六) 其戎選 會林—柳玉 ・松眠・執筆 —素石	額37 宇氣洲神 社額 (田窪) 明治十九年 (一八八六) 世外追吟 會林—知昇 外二名	明治十八年 (一八八五)
以呂波、干静16、玉志、笑止2、胡艶 3、游雀3、歌月5、蘆月2、文柳、 里静、勢柳、天山2、藤剪、和水、	松山草月2、樋口蘭籠、八倉木、 柳玉4、素石、梅園、花蕉、南谷、 玉、亀遊、哥勢、里、君山、 白民、湖春、過生、文閑、井水、松 眠、六門、吐月、春月、月、愚 、南、二	(五十句と追吟二句)	

<p>額39 飛梅天神 社額(北野田)</p>	<p>句9 秋の鎌磨 (和田句帖二) 素石追加</p>	<p>雨泊追加</p>
<p>晴月、古梅、一風、静民、湖山、玉心、柳雨、湖月、松月、梅居、花友、</p>	<p>句10 倭楽会月 次発句集(和田句帖三) 不玉斎選</p> <p>北梅梅里、西岡香風3、クメ花京5、西岡梅女、上村都昇2、志津川柳玉2、津吉愚鏡、上村清玉、北梅秋明2、大坂丸万、クメ梅友8、高井貴遠2、志津川勢柳、上村水月2、川ノ内實玉、畑中龜鏡、志津川ろ月2、クメ柳枝2、クメ其雀3、高井壽閑2、タノクボ残月、新村馨、牛渕不尽、西岡龍月2、新村柳雨、津吉池樂、上林花頭2、畑中一枝、志津川龜友、高井一法2、西岡和有、上村成美5、畑中素重、北梅龜昇、川ノ内涼杜、志ツ川晴光2、平井川生柳、畑中歌居、志ツ川和水、素石3</p>	<p>和水2、可也3、久子、晴光4、胡艶3、歌遊、矮夫2、拜月、寿樂3、和友、〇〇庵、扇枝、里□、素石、</p>

<p>額42 飛梅天神 社額(北野田) 會林―柳雨 ・黃山</p>	<p>額41 飛梅天神 社額(北野田) 明治二十二 年</p>	<p>額40 医王山長 連寺額(上林) 明治二十一 年</p>	<p>明治二十一 年(一八八一) 冬語逐喰 會林―一風 ・柳雨・黃山 ・榮月・晴月</p>
<p>梅月、一風、松哥、戀□、松枝、砥部五□、柳雨、萩月、久米花京、二鳳、琴嘯、黃山、その他</p>	<p>柳雨、梅月、二鳳、黃山、松枝、田舎、梅花、櫻友、晴月、千雀、喜遊、友弥、楚月、楳里、その他</p>	<p>歌樂、梅枝2、喜月、東明神梅盛2、花頭2、志津川琴樂、玉水、志津川梅月、久谷龜盛2、二柏2、梅下2、花村2、玉静、寿月、鶯遊、壺松2、湖□</p>	<p>鷺泉、無石、久米喜雀、北良、一枝、栄月、高井竹遠、一木、牧野、二雀、西岡馨風、東方里盛、梅月、松哥、五葉、森松硯志、松山萩月、和水、水泥琴嘯、櫻屋、松枝、黃山、高井明梅、里遊、北方壺石、静可、その他</p>

<p>額46 城山天満宮額 (上林) 明治二十四年</p>	<p>額45 香積寺額 (田窪) 明治二十三年</p>	<p>額44 金比羅寺觀音堂額 (川内町) 明治二十三年</p>	<p>額43 素鷲神社 (南野田) 明治二十二年</p>
<p>當処歌楽、下林春月6、ミナラ巴人、全處巴玉2、北方静民、小野梅居、川上都楽、當処花頭2、當処可静3、三奈良一雄、全處桃語2、南方</p>	<p>豫川、梅友、不求、柳泉、松嵐、松緑、梅光、花京、その他。</p>	<p>野田古處、下林春月、田窪一志、上邑都昇、野田和水</p>	<p>北タカイ二三、カワノウチ涼社、芦僊、和水、ドイ旭山、静民、二蝶、松月、一狸、香風、古處、花友、マツヤマ桐溪、ウエムラ晴玉、クメ花京、可長、その他</p>

<p>額47 法蓮寺額 (上林) 明治二十四年</p>	<p>南陵逐吟 會林—可静 榮月・歌翠 補助—花頭</p>
<p>青菱追加 會林—榮月 可壽・歌翠 願主—連枝、月穂・梅曙 花頭</p> <p>井内二窟、北方樑鸞、梅曙4、ミナラ巴玉2、ミナラ成雅2、田窪二水、花頭2、久米樑友、志ツ川亀友3、ミナラ嘉庭4、志茂林春月3、保水、川上都楽3、ミナラ花居5、久万梅盛2、川上豫川、歌翠2、自樂5、上村都昇3、歌楽3、可静2、豫、南方萬化3、志茂林石、ミナラ桃語4、北方志汲、上村成美3、北方玄深、ミナラ山月2、湖辰、龜遊3、瀬川吉井4、二柳5、川上輝山6、其正2、南方潦水、福箇二遊、廣島鬼笑、上村清玉2、南方良石2、月穂(秋)3、志ツ川松静、井水2、ミナラ一雄3、梅遊、喜月2、ミナラ巴</p>	<p>良石、北方梅鸞5、當処湖辰、全梅枝、久万梅盛、當処歌翠、全處梅曙、ミナラ嘉庭、川上豫川、ミナラ花居2、西条儀道2、川上輝山2、當処喜月、井樂、上村成美、當処榮月、南方潦水、當処月秋、白扇、北方志流、全處春玉、南方五柳</p>

<p>額49 二瀬のお 堂額(上林) 明治二十七年 因阿追喰 會林―春月</p>	<p>額48 宮内天満 宮額(砥部) 明治二十六年 青菱追加</p>	
<p>原町目平3、<u>田</u>村喜月、下林春月 2、<u>田</u>村陽谷2、可静、砥部一角、 栄月、華盛、月田、春畝、当村歌翠、 漂舟、二遊、春水2、鷺船、北久米 終昔、上村都昇2、<u>祖</u>、<u>田</u>ノ<u>窪</u>喜 鶴、全(<u>田</u>村の意)湖辰、<u>南野田</u>和水、</p>	<p>上林月秋</p>	<p>人、<u>吉</u>久<u>眞</u>竹2、井笠、<u>田</u>梅居2、<u>久</u> <u>田</u>裏江2、<u>田</u>以楽3、南方湖月、醉 月、榮月2、自笑2、南方洋月、<u>吉</u> <u>久</u>喜山、河内涼杜2、<u>東</u>方白扇、五柳 2、北<u>田</u>静民、<u>田</u>川其水、南方梅鶯 、久米其雀2、赭山、居士、陽谷、梅 枝2、北方<u>志</u>、松瀬川重松、連枝、 梅月、吉久松録、壽月、南方和楽、志 ツ川壽楽、かしこ、則ノ内七丸、西 <u>案</u>蟻道、北方春玉、西ノ岡香風</p>

<p>選 年三月 桂廼舎老人 旬川 青野句帖 (その一) 明治二十八</p>	<p>・月秋・喜<u>田</u> ・海<u>田</u>・歌<u>田</u> ・漂舟・栄月</p>
<p>川上豫川2、新村莞爾、田窪(吉井と も)一志11、久米梅友2、上村鬼勢 2、新村(久米・井門とも)恋梶3、新 村梅月、川ノ内涼橋3、高井明梅、高 井竹搦、畑中祖丈3、上野(上村の誤) 都昇、南高井満月、北高井(高井とも) 貴景3、高井<u>田</u>多、高井集泉4、高井 (南高井とも)亀鶴4、水泥琴爾(囀 とも)2、新村柳月2、川ノ内杜月 2、東方里遊5、上村成美3、津吉南 雪、津吉池楽2、新村龍山3、川ノ 内實玉4、高井水石、新村流美、田 窪壹詩3、津吉愚鏡、久米(水泥石とも) 峯松2、牛淵不盡、高井寿楽2、久 米一葉、西岡村香風、高井二三、高 井寿閑3、梅ノ本一枝、高井頼三、畑 中樂山、西岡三関、津吉花梶、西岡北 吉井とも)素石3、北高井題巖、久米冬</p>	<p>松松嵐、<u>田</u>村春楽、<u>田</u>村月秋、浄瑠 璃寺水石、<u>森</u>松嵐月、成美2、砥部 祐一、樋ノ口珪磋、南野田一狸、南方 <u>田</u>、不明瞭四、</p>

<p>額51 浮島神社 (牛瀨)</p> <p>額50 宮内天満 宮額(砥部) 明治二十八年七月 桃陽追加</p>	<p>句13 青野句帖 (その三)</p>	<p>句12 見飽ぬ花 (青野句帖その二)</p>
<p>上村猿丸、全松月、河之内実玉、牛瀨春甫、上村都<small>□</small>、東方莞爾、麻生目</p>	<p>北野田梅雨、シツ川胡艶3、西岡香風3、志津川村(山ノ内とも)叙月3、志津川村晴光4、ヒノロ珪磋13、上村猿丸、上村松月、上村都昇、牛瀨暮甫、見奈良桃晤、可長、(以下重信関係のみ)</p> <p>上林月秋</p>	<p>首、梅本桑園、田窪旭昇、南高井息暁、牛瀨一笠、田窪樹聲</p> <p>(青野句集その三の27ウ、月並三回の「是より倭楽亭撰甲の巻」と同じ)</p>

<p>額53 天満 宮額(志津川) 明治三十五年(一九〇二) 桂廼舎宗匠撰 會林一露口 里正・末光可光・武智天山</p>	<p>額52 船川神社 (上村) 明治三十年 世外追加 會林一成美 ※額51には同名に「久谷」とあり</p>	<p>明治三十年 (二八九七) 可長追加</p>
<p>秀、砥部千圃、樋口醉香2、砥部静月、久米終昔、大野一筆、下林春月、和氣龜遊、樋口遊静、松山不白、久</p>	<p>北方烏陽、上村成美、大野春涛、堀江風月、北方椽鷲2、村清月、全胡艶、全栄2、全胡舟、砥部其雪、大野寿聲2、村可光2、野田愿村、田窪旭昇、平井生柳、東方里遊、村花蝶4、全和水4、野田馬雪2、吉田桃</p> <p>成美3、上林花頭3、静石、上林喜月、清玉6、都昇4、笠一2、可泉2、水月3、妙々、下林春月6、春山、松翠、花林2、見奈良宗楽、松山笑<small>園</small>、北方梅鶯、見奈良桃晤2、鹿聲、松里、久谷龜盛、杜水、上林梅暑、下林春鳥、樹山、岳月、羊角</p>	<p>平、一長、久谷梅鶯、砥部龜鶴、牛瀨梅邑、上村春楽、麻生つる女、上野一明、麻生茶石、全米里、八倉梅軒、水石、八倉松寿、牛瀨卜祥、東方魯光、麻生和聲、上<small>□</small>櫻<small>園</small>、その他</p>

・宮倉宮玉・
橘金山・大西
花蝶・味田栄
補助―和田
和水・伊賀胡
艶・岩川晴光
※1後には「村」
とあり。

※2額49には「樋
ノ口」とあり。

米孤山、東方松琴、村里静2、全八
木、六合3、村晴光4、田窪梅曙
2、村喜玉、砥部一舟、三軒家茂松2、
可楽、上野一明、いろは、牛瀨春甫、
指月、高井漏月、柳玉、田窪二鳥、砥
部文龍、松山岡玉、三軒家玉泉、高^{※1}
井梅月、北方玉翁、三軒家憑六、東
方草文、松山柴岳、坂本水石、和友
2、堀江步鶴、横川嘉庭、高井如
月、天山2、津吉花遊、北方玄深、
野田喜和恵、松山里辰、見奈良喜雄、
津吉愚鏡、栄華、上村雲志、全岳月、
村篠夢、牛瀨松年、大野永楽、窪田久
洲、田窪東志、津吉池楽、金山3、恵
桃、樋口友女、堀江珪磋、雪樹、勿論
坊、梅本冬村、西岡香風3、坂本亀
石、湖遊、峰水、寂月2、芦月、野
田柳雪、松瀬川吉井、田窪盛貞、風
早一上、宮玉、松山虚心、松瀬川重
松、水常、松枝、牛瀨花續、樋口武
智、

<p>句14 奉納梅千 句 (志津川天 満宮)</p>	<p>旭扇堂李瓶</p>
<p>額54 黒住教吉 井教会額 (志 津川)</p>	<p>村和友2、村勢柳3、北方嘉松2、 村晴光、全廬月、見奈良花樵、西岡香 風2、村可□、村和水2、村胡艶、 ☐朝月2、全里静、村藤翦、大野此 友、北方玄翁、全玄深、村哥月、北 方玉翁</p>
<p>額55 同所額 明治三十五 年七月 千羅追加 會林―牧愿 村・八塚喜和 恵・松田壽枿 ・松田冬村・ 八塚馬雪(南 吉井村大字野 田)</p>	<p>神崎又玄2、高井漏月4、齊院孝 誠、東方草文、松山松樹2、大間湖 月、塩屋蓬生2、大野永楽、馬木義 勇、高井亀鶴2、久谷亀翁、上村岳 月、横川嘉庭、志津川晴光2、当村 松哥、北方玄深2、窪田久洲、古泉 櫻雨、上村成美、神崎長翠、水泥春 水、当村柳雪5、牛瀨单枝、古泉柳川、 亀石、垣生花垣、三津湖石、河之内 凉杜2、畑中楽山、高井紗月、松山 蒼林、垣生春陽、上村花林、当村原 村3、水泥彌生、北方梅鶯5、松前無</p>

※1 額24・46・

47等には見
奈良とある。

※2 後に「志津
川」とある。

両方載せて
おく。

※3 上村に同号
あり。

※4 「夢」なら
多の異体

號庵、当村榮月2、長洲5、梅本友
 花、塩屋南坡2、高井蕪青、当村馬
 雪5、井門郡境、神崎梅月2、梅ノ本
 一月、志津川志築2、当村花月、平井
 生柳2、当村壽松2、見奈良桃咄、
 出作龜遊、大野壽聲3、北梅松香、
 宮下都月、松山梅林、原町目平3、
 上野一明、徳丸赤哉、当村櫻友、齋院
 千雀、上野長棗、下林春月、※2 齋院湖
 舟2、高井水月、山之内叡月、志津川
 芦月、垣生霞舟、東野一悦、上野一
 遊、松山苔翠、牛瀧春甫、志津川和
 水、当村愿村2、坂本水石2、志津川
 胡艶、当村一風、志津川花蝶、志津川
 湖舟、牛瀧松年、北方玉翁3、北梅冬
 村3、高井竹春、齋院紫一石、津吉花
 遊、砥部文龍、大野春濤、齋院霍孫、
 南梅梅山、牛瀧双洲、当村玉心2、
 砥部一舟、東方里遊、吉田桃秀、出作
 松翠、久米孤山、高井如月、塩屋秀
 紅2、松山一翠、当村喜和恵2、上野
 夢松、※4 東方松琴、志津川さかえ、河
 之内涼橋、牛瀧花績、北方太甫、志

<p>額57 黒住教吉 井教会額(志 津川) 明治三十六</p>	<p>句15 雅と俗 (句角力) 明治三十六 年暮春 守中庵石山</p>	<p>額56 飛梅天神 社額(北野田) 明治三十五 年八月</p>	<p>津川和友、北方白扇、出作道楽、高井 梅出、東野逸楽、津吉池楽、津吉愚 鏡、大間清泉、志津川金山、則之内 清谷、北梅竹堂</p>
<p>神崎梅月4、平井川生柳5、大野寿 聲7、大野湖月、浄瑠璃寺水石、南 吉田桃秀4、松山李瓶、※1 大野一葦2、 鷹ノ子志晴2、齋院紫石2、神崎長</p>	<p>草文3、花林3、松琴3、池楽3、一 明3、南山3、愚鏡3、亀翁3、水石 3、里遊3、雲葵3、成美3</p>	<p>〔會林〕—馬雪・冬村・喜和恵・寿松 ・□村。(見え難い。)</p>	

年終夏

常陸国田月

庵峰居追加

會林一渡部

春濤・永山永

榮・宮内一翠

・宇高壽聲

(以上小野村

大野町) 山内

香風(西ノ岡)

・重松生柳

(平井川)

※志津川天満

宮梅千句献

納者

※他額には

「上村」と

ある。

※志津川に和

水あり。

額58 白山神社
類 (川内町滑

翠2、松山一走2、高井漏月2、大野

永榮3、南梅本梅遊、神崎柳雅3、

水泥彌生、松瀬川重松、西ノ岡香風

3、松山蒼林、新村柳雪、三津□谷、

古泉桜雨3、水泥春水、土居清、鷹

ノ子可□、久谷梅友2、川ノ内凉杜、

北梅松香、大野春涛2、水泥琴嘯、

水泥寿玉、松山二葉、南梅本梅山2、

松山菅翠4、三津素窓、三津花朝、

北梅静遊、松山儂窓堂、津吉秋月、

三津窓甫、土居一素、砥部其雪、駄場

竹堂2、井門硯志、畑中樹堂2、古泉

窓山2、志津川晴光、駄場青甫、平

井谷青木、久米孤山、吉井芦邨2、

※上林花林、野田馬雪、古泉知学、河

之内柴山、上村成美、下林春月2、

古川竹翠、砥部和水

西岡香風2

川
明治三十九
年

町内俳人一覧

1 町内外俳額・句集等にあらわれた、明治までの町内在住の俳人の号を五十音順に並べた。
2 音読に従ったが、訓読みと思われるものは訓に従った。「二某」の号は「に」の項へ入れた。

3 () 内は、上から、地区名、判明している場合は氏名、その他、出句されている額や句集の番号を載せた。「会」は「会林」の意、(俳)は「伊予俳人録」(注)の略。

4 番号は「関係俳額、句集一覧」及び本文の上部に示された番号と一致させている。番号のみは俳額の番号。「句何」は「句集何番」の意。

5 地名は、上村、上林を除いて一字で表わした。志||志津川、西||西岡、樋||樋口、横||横河原、山||山之内、野(濃)||野田、牛||牛渕、田||田窪、見||見奈良、下||下林、
拜||拜志、吉||吉井等。地区名の記入されていないのは、町内らしいが町内資料では不明なもの。

(注) 故會我部松亭氏(あるいはその遺稿)が伊予史談に約五十回にわたり分載されたもの。

【い】

一可 (6 7 会)

一狸 (濃、20 24 27 33 43 49)

一見 (7 会)

一志 (田、大西氏、(俳)、明二三額会林・32 34 36 37 44 句
7 句 11・宇気洲神社明一九額追吟)

一枝 (39 句 4)

一笑 (田、山置小平、句 4)

一風 (風) (吉・42 55 39 会)

一風 (田、6 句 4)

一雄 (見・46 47)

一笠 (牛・句 11)

壹詩 (田・句 11)

いろは (志・30 53 句 4 句 8)

一三 (見・7)

【う】

雲志 (上村・53)

雲紫 (見・7 8 9)

于静 (志・28 29 33 句 6 句 7 句 8)

【え】

栄月 (上林・39 会 46 会 47 会 49 会)

栄月 (南吉・55)

叡月 (志・山之内とも 37 53 55 句 13)

【お】

桜友 (野・41 55)

桜僊 (26 31)

【か】

花月 (野・55)

花績 (牛 53 55)

花染 (見・16 会 19 27)

花蝶 (志・大西氏・53 会 55)

花居 (見・46 47)

花黄 (7 会)

花樵 (見・16 19 25 27 54)

花林 (上村、上林とも 16 23 24 36 52 55 57 句 15)

花頭 (上林・24 会 25 40 46 47 52 句 10)

花遊 (田・19 23 会)

歌翠 (上村・46 会 47 会 49 会)

歌 (哥) 勢 (樋・16 38)

歌楽 (上林・40 46 47)

華林 (上村・20・花林と同じか)

哥月 (志・末光源九郎(俳)、28 54 句 3 句 8)

鶴枝 (田・19 23)

鶴水 (田・17)

嘉庭 (見・横川とも・16 24 25 27 46 47 53 55)

嘉石 (下? 23 会 (下? 23 会 24 33 会)

可静 (上林・46 会 47 49)

可光 (志・末光氏・53会)

可然 (志・54)

馨 (新村・句10)

顔優 (牛・句1)

可寿 (47会)

哥休 (12 13会)

岳月 (上村、52 53 55)

可長 (南吉、大西良実、(俳)、句13、43)

莞爾 (新村、句11)

【き】

其調 (下、6 8会 9 (俳) には上林、文化ころとあり。)

基石 (牛・12)

其玉 (田・35)

其蓬 (豊助・11会)

其柳 (新太郎・山内新泰とも、11会句4)

其静 (志・30)

亀友 (志・2 6 7 47句10)

亀洲 (樋・30)

亀泉 (田・稲菜氏、(俳)、29 32句7)

亀遊 (出作・38 47 55)

琴糸 (上林?・(俳)、文化ころ 1 8会)

琴楽 (志・40)

喜鶴 (田・49)

喜雄 (見・53)

喜玉 (志・53)

喜月 (上林・24 40 46 47 49会 52)

喜和恵 (野・八塚氏・53 55会 56会)

玉哥 (上村・20)

玉心 (野・39 55)

玉光 (上村・16)

旭川 (田・24)

旭昇 (田・53句11)

金山 (田・53句11)

金山 (志・橘氏・53会 55)

久楽 (見・19)

黄山 (39会 41 42会)

魚楽 (志・9)

魚遊 (見? 16)

宮玉 (志? 宮倉氏 53会)

馨風 (西、香風と同じか、39)

貴宅 (牛・33)

季鏡 (12会 13句4)

宜哉 (下・13)

起石 (14 15会、卯之町の同名とは別人。)

鬼勢 (上村・句11)

曲松 (下・7)

【け】

軽尾 (牛・26 33)

月秋（上林・46 47 48 49 会 50）
珪磋（樋・49 句 13）
原村（野・牧氏、55 会、53 の愿村と同人か。）

【こ】

湖青（西、〈俳〉牛渚とあり、諧謔庵・3 句 1）
湖白（田・7 8）
湖月（田、牛とも、9 25 39）
湖鏡（田・21 24）
湖雲（見・19）
胡艶（志、伊賀氏、28 29 30 53 54 55 句 8 句 9 句 13）
湖龍（野・25）
湖遊（志・53 句 6）
湖橋（西・句 1）
五葉（志・〈俳〉、7 8 39）
互哉（下・13・亘哉とも）
五柳（47 〈俳〉東温地方）
壺氷（上林住、僧・句 4 〈俳〉天保ころとあり）
公壽（野・24）
壺泉（田・水田氏、〈俳〉15 句 4 句 5、伊予簾明十八没）
工吟（7 会 2）
好哥（9 会）
虎勢（志？・句 4）
古渚（牛・19 22 会）
顧吟（24 25 27）

古處（野・20 43 44）
香風（西・35 43 47 53 54 57 会 58 句 10 句 11 句 13、大山祇社明治
21 額）
虎樂（見、〈俳〉
湖舟（志、〈俳〉に田窪住とあり、55。「5」に同名ある
は別人か。）

湖辰（上林・46 47 49）
胡舟（志、53）
孝風（西、句 7）
吾松（〈俳〉上林）

【さ】

算車（志・畑中とも、句 1 句 2、〈俳〉天明ころ）
栄（志・和田氏 53 会 55）
山月（見・47）
残月（田・18 会 句 10、〈俳〉に上村明治 15 ころとあり、香
積寺安政四額会林）
三関（西・句 11）
猿丸（上村・51 句 13）
左右田（大助・11 会）
三花（下・9）
左叟（見・13 19）
【し】
頌風（田、〈俳〉15 会 句 4 句 5）
樵子（田、下か、小山義一郎 〈俳〉、句 4）

如柳 (田・59)
寿蝶 (上村・20)

春声 (志・《俳》弘化ころ)
春朝 (下、《俳》)

春鳥 (下・52)
春月 (下・24会25 33 34 38 40 44 46 47 49会52 53 55 57)

笑居 (上林・24其引、33)
松静 (志・47、大山祇神社明治21額)

春谷 (牛・33)
慎農 (牛・《俳》樗堂時代)

松月 (上村・22会25 39 43 51句13)
松哥 (吉・39 42 55)

松枝 (志?・39 41 42 53)
春甫 (牛・春浦と同人かも・26 51 53 55)

松平 (牛・53 55)
春浦 (22会、57に駄場とあり。)

寿井 (田・18 19・《俳》明治初)
壽松 (野・松田氏・55会56会)

樹聲 (田・句11)
志楽 (志・55)

秀山 (? 9会)
森月 (? 6会7会9)

笑山 (田・18会19)
寿楽 (志・47句9)

自稱 (田・稲葉甚三郎、鶯居の友、《俳》、句7 34)

食山 (吉・久松氏《俳》)
篠夢 (志・53)

春鳥 (下・52)
新農 (《俳》吉・蘇風の子とあり)

松眠 (? 38会)
春楽 (上村・49 51)

女 (如) 一 (吉・3)

【す】
水月 (上村・52句10)

水山 (《俳》、田)
酔園 (牛・19)

酔香 (樋・53)

【せ】
成美 (上村・高市氏、46 47 49 52会53 55 57句10句11句15)

《俳》
成雅 (見・47)

清月 (志・53)
清玉 (上村・34 47 52句10)

晴玉 (上村・43 47)
晴光 (志・岩川氏・28 29 30 35 53補助54 55 57句9句10句13)

《俳》
勢柳 (志・28 54句8句10《俳》)

扇二 (牛・南州と号す・立花《橘》甚七・篤好・慶応二没)

・ 19 21 22 句 3 句 4 〈俳〉

石燕 (上村・20 23 24)

石? (下・47)

盛貞 (田・53)

盛柳 (? 8 会)

洗耳 (上林・〈俳〉文化ころ)

晴月 (? 39 会 41)

【そ】

宗楽 (見・52)

宗居 (見・16 会 19 27)

素兄 (牛・相原善五兵衛二頌の男、〈俳〉26 句 4)

素遊 (見・13 16)

素雲 (牛・30)

素石 (西・北吉井とも、35 38 筆句 7 句 9 選句 10 句 11)

桑洲 (下・7 8)

楚雀 (牛・句 1 4 14)

双洲 (牛・55)

【た】

泰石 (牛・33)

單枝 (牛・55)

大船 (臺太郎・11 会)

大里 (? 18 会)

岱梨 (田・19)

武智 (樋・53)

【ち】

千晷 (田・7)

稚松 (? 33 会)

蝶夢 (田・7 9)

蝶月 (田・19)

竹林 (上村・20)

枕石 (田・21)

竹谷 (牛・22 会 25 31 33)

朝月 (志・54)

知昇 (37 会)

長洲 (? 55)

池楽 (? 句 15)

【つ】

通意 (午・3)

【て】

天神 (野・34)

天蘭 (田・34)

天山 (志? 武智氏・32 53 会 句 8)

田舎 (? 41)

【と】

桃枝 (6 会 7 会 12)

桃下 (上林・13 会 17)

桃晤 (見・桃語と同じか・52 55 句 13)

桃語 (見・46 47)

東志 (田・53)

兎兄 (牛・2 3)

兎拜 (牛・3)

都白 (田・7)

都村 (上村・20 24 44)

都邑 (上村・23)

都昇 (上村・47 49 52 句 10 句 11 句 13)

藤翦 (志・54 句 8)

時古 (田・《俳》同名の宗匠と別人)

吞海 (平介・11 会)

笠一 (? 52)

【な】
南洩 (牛・25)

【に】
二頌 (牛・相原経當・通称善兵衛、《俳》句 3 句 4)

二集 (牛・大西傳五兵衛(伝右衛門) 12 句 4)

二慶 (牛・12)

二春 (濃・花山民五郎、23 選 24 34 句 4 句 6)

二鳥 (田・53 句 4 大徳院とある。《俳》)

二暁 (牛・《俳》大西傳蔵句 4)

二芳 (牛・《俳》大西三省句 4)

二橋 (田・句 4 には富水翁の書入れて久米米山父、三輪田)

河内守とある。小田町立石神社文政二額

二見 (田・19)

二水 (田・47)

【は】

梅志 (33 会)

梅枝 (16 40 46 47)

梅月 (志・39 40 41 42 47)

梅月 (新村・句 11・53 に高井とあり)

梅女 (西・句 10)

梅籬 (牛・相原近江守句 4、《俳》)

梅雨 (北野・句 13)

梅曙 (田・53)

梅里 (田・25、41 に榎里あり。同人か。)

梅曙 (暑) (上林・46 47 52)

梅邑 (牛・26 51)

破琴 (志・6 7 9 11)

白飛 (西・句 1)

梅扇 (7 会)

八木 (志・53)

万花園 (樋・24)

榎處 (上林・23)

白梅 (上邑・20)

白兔 (7 会 8)

白斗 (6 7 会 8 9 12)

栢枝 (8 会)

馬雪 (野・八塚氏・53 55 会 56 会 57)

馬石 (田、《俳》土田要新屋)

巴泉 (見、16 会 19 27)

巴藤 (見・16 19)

巴龍 (13 会)

巴頭 (見? 16 14)

巴人 (見・46 47)

巴玉 (見・25 27 46 47)

【ひ】

漂舟 (49 会)

【ふ】

不老 (志・35)

不尽 (牛・句 10 句 11)

不 (上林・17)

不染 (7 会 12 句 4)

不曲 (西・1 句 1 《俳》)

文玉 (牛・清助・11 12 13 句 4)

文孝 (田・7 8 9 10)

風處 (見? 25 27)

文敬 (田・35)

不求 (? 26 45)

【ほ】
鳳尾 (志・《俳》)

暮甫 (牛・句 13)

保泉 (14 15 会)

【ま】

○八 (下・35)

【み】

三津良 (牛・26 31)

妙々 (? 52)

【め】

明森 (? 24 会)

【も】

勿論坊 (? 53)

【ゆ】

遊静 (樋・53)

遊雀 (? 句 8)

友女 (樋・53)

友弥 (? 41)

【よ】

羊角 上村・井上金兵衛、23 24 52 句 4、《俳》

養素 (下? 23 24 33 会)

陽谷 (上林? 47 49)

【ら】

楽之（上村・8）

蘭龍（樋・38）

【り】

良野（下・5678）

良久（牛（俳）大西幸助・弘化ころ・句4）

里瓊（田・（俳）には牛渚如山庵とあり・4）

里風（風）（見・89・西・句1川上2）

里眺（上林・8）

里月（見？16）

里靄（見？1625）

里覚（見？16）

里水（見？16）

里石（見・1619）

里正（志？露口氏53会）

李仙（西・1句1）

里静（志・2629305354句6句8）

柳雨（新村・39会4142会句10）

柳雪（野・535557||新村とあり）

柳月（新村・句11）

柳玉（志・2538会53句10）

龍月（西・35句10）

流美（新村・句11）

龍山（新村・句11）

麟々（見・句1）

林下（9会）

【れ】

恋遊（上村・句11には新村とあり）

嶺雲（下・井上氏・句16、句22）

連枝（？47）

【ろ】

鷺踊（牛・3）

芦岳（志・武智伝次郎、中清、米田屋と号す、明12没・句

3句4）

六合（志？53）

蘆（芦）月（志・27535455句8句10）

芦村（吉・57・（俳）同名あり・南方八幡屋庄吉又定吉、

文久の代又弘化万延のころ）

【わ】

和水（志・和田氏・53補5455句8句9句10。南野ともあ

る。39434449また57には砥部とあり。）

和友（志・293032535455句7句9）

和有（西・句10）

あとがき

俳額を調べて歩いている時、いつも思うことがある。「これは一刻も早くやらないと大変なことになるぞ。」と。一日一日文字が消えつつあるのである。また一年前にあった短冊板が抜け落ちて、なくなっていることもある。他の資料には所在が載っているのに、訪ねてみると行方不明になっているものもある。

保管の場所によっては、安永のころのでも、かなり明瞭に読み取れるのがあるかと思うと、明治のがほとんど見えないものもある。人々は地域の文化財を守ろうなどというが、何でこれをほっておくのかと思う。句帖などは散逸や焼失しなければ、（それも改築の際捨てられたり、襖の下張りになったり）かなり永い歳月に耐えるが、この消えてゆく永額は、いち早く写しておかないと、先祖に対して申し訳ないではないか。

当時の人たちは、その句が最も良いと思いをこめて奉獻しているのだ。中には五千句、一万句の中から百句の選を受けて奉納しているものもある。

よく「芭蕉みたいなのは見つかりませんか」と尋ねられるが、日本俳諧史を塗り変えるような期待をしている訳ではない。江戸時代の庶民の、あのささやかな願いや、ひそやかな楽しみ、風交や連帯感、生きざま。生活の息づかいが、字面を撫でているうちに肌に伝わって来るのである。

欲をいえば日本国中、あるいは県内の一部からでも、地味な仕事だが、それを調べる組織を作らねばならない。研究されていた先輩も次々亡くなられた。まだ地域にはおられると思うが、独りの力では、わずかのことしか出来ない。

この重信町内の俳額も、動かせるものは、町社会教育課の方々が、読みやすいように車で運んで下さった。下ろせないものは長焦点レンズで写し、自分で引き延ばして読んだ。しかし写真では、風化の跡の盛り上がりや、横から光線を当てながら読むほどには読めていない。また邪魔物があつて写せないのもあつた。第一消えてしまったのはフィルムに現れない。赤外線写真も役に立たなかつた。

足場の悪い梯子の上で、寒風にさらされながら長時間がんばるのは辛かつた。落ちて死ななかつたのは幸いだったが、それも思い出となれば楽しい。

今後、句集・短冊・書簡などまだ出て来るのがあるかも知れない。不備な点が多いし、誤りもあるかも知れない。大方の御指導をお願いする次第である。

また考察を加えたいことも多いが、もう少し広範囲の調査が出来てからにしたいこともある。

この小さな資料作成でも、多くの方々のお力添えをいただいている。せめてお名前を記して深く御礼申し上げたい。―重信町・同文化財専門委員の方々・同社会教育課・神野陳氏・岩田弁次郎氏・井上修氏・野中三郎氏（宮の段）・川上神社野口晃氏・青野隆夫氏・県立図書館、そして判読に御協力いただいた桜井久次郎氏・牧野龍夫氏、森正史氏、また慈光寺・香積寺・別府頼雄氏・渡部禎之氏・武智成彬氏・佐伯惟揚氏をはじめ、御迷惑をおかけした神社仏閣の宮司・住職・総代の方々その他である。日曜の朝から、青野氏句帖に記されている額の在りかを尋ね、小型トラックに脚立を積んで、川内の奥まで回って下さった橋本矩之先生のこととも忘れられない。

昭和五十四年二月

松山市谷町

泉

洋

一

重信の俳諧資料

企画編集

重信町文化財専門委員会

発行所

重信町教育委員会

印刷所

愛媛県温泉郡重信町志津川九七二

明星印刷工業株式会社

松山市土居田町五〇〇番地